

足引の山邊ふもとめ淺茅生の野邊ふ根おじて我宿おむ手もすまふひさ  
植し心もまゑるく秋萩の枝もとをいふ今しくい花ささおけり朝庭ふふみた  
ちならし夕庭ふ出見るごとふ少女らむま手ふまきもつ白玉のむるしき君  
とひきよちて折みをらずみたつさはり共ふ見むまで秋風もよきてをふけ  
とまひしつゝあむこひのめど朝なさなかく露まげみいたつらふつちあち  
りなげせむすべのたときあらめや近くわらば今二日ばかり遠くとも七日  
いまた心赤駒のあがきををはやめいでませわおせ

白玉のむかしき君おたいひとめ見せてしわらばかくこひめやも

浦乳鳥

ともしびの明石の浦ふ大舟あかしふりたてゝ鳥じ物うさねをすれば淺風  
寒くふき來ぬ家もふといのねむてねば須磨の浦に通ふ千鳥の夜くだちて  
妻こひすらしをちかへりなく

反歌

すまの浦おまばなく千鳥我ごとく妹おこふれやをちかへりなく

故郷乳鳥

春山のまなひさかえて秋山の色なつかしき百敷の大宮人のあともひて舟  
乗しけむいにしへをなれもあふれやさい浪の志賀此浦みあわけたてばお  
きへのかさあ夕さればありその前ふよびたてゝなくなる千鳥聲此悲しき  
宮人のふねまぢかねてゆふさらずちどりなくなり志賀のうら崎

歳暮

春花此さたる盛ふ秋此葉此あへる時お思ふどち手折りのさしてまをら  
ぬ此あそぶさかりしをちかへりまも來めやもそおもへば數多も惜しき  
いりあせば走せゆく年をとめ得つべき

反歌

あら玉此走せゆく年をとめめね惜しきさうり此過まぐ惜しも

逆戀緒歌

輕池乃浦回往轉留鴨尙毛妻登比豆暮不去玉藻之上爾白細乃羽指更豆己尾  
爾零置霜乎打拂比狹寐知布物乎虚背見乃世人吾哉敷栲乃手枕不纏紐不解  
丸寐加毛將爲永此夜乎



反歌

中々二妹似不戀者輕池之酒回往轉鴨爾在猿尾

送別

夕されば鴨つまよばひあけくれればたづが音をなくはたすき浦戸の崎ゆ  
大船あまかぢぬきおろしみ舟子をあともしたて、白浪の八重をる海をあ  
へぎつゝ君のおさざいなばといまれるわれの明日ゆの竹玉をまじおぬきた  
りいはひへおゆふどりしでてきたつみの神おしはまな平らけくまさきく  
ありて早歸りませ

いさのをみおれぬやあひひあすより君がみ船の歸りこむまで

文化十二年乙亥九月十六日遊羽山郷道上超荒倉山之時作歌  
菰まくら高坂のへを九月の在明の月あゆく鳥のあらそひ立てはしきやし  
妹の手なれは鏡川さよき川瀬あさを舟あ竿さし渡し神のます朝倉の野は  
萩の花ちりとふ見つゝ足引の岩根こゝしき荒倉の山のためけあまのぼ  
りぬさとりひけて坂鳥の朝こえくれは玉垂のをともおれぬ山つみは神  
の處女の足玉も手玉もゆらお萬機ちやはたたて、唐錦おかりかけふりと見

るまでおにはひ渡りてあやふともしも  
吹く風もあらくな吹きそ荒倉のやまのもみぢのいまさかりなり

妻死之時悲傷作歌一首并短歌一首

愛寸八師妹命之虛蟬跡念師時荷布勢廬之曲庵之裏似丹穗鳥之二人雙居白  
袴之袖指交而靡宿之其黑髮之真白髮荷將變極新世似共將在常朝暮似咲三  
不咲裳打嘆語家卷者常之閉爾如是霜有目八天地之神祇事依而春花之盛裳  
將有跡梓弓末之田附乎大舟之念憑而如今思勿和備等語相之心者不遂念有  
之事者不果白細之手本矣別丹杵火西家從裳離立霧之失去如置露之消去如  
久由緣毛無山路乎指而入日成隱座去禮吾妹子之形見似置有若子之乞泣時  
者何物乎鴨取而將與吾耳而如何爲余等會此念荷妹之恨之其念荷心之痛之  
將言爲便將爲々便不知如是管老附吾身蓋毛可堪有哉後居而戀管不有者吾  
妹兒我跡踏求冬薯積尋將往跡心庭千遍雖念五月蠅成驟子等乎打棄而者往  
卷不知吾妹跡佐宿孀屋似朝庭出立偲夕庭入居嘆合朝鳥之音耳泣管忘而者  
如座愛寸八師妹名喚而此床乃比師等鳴左右歎鶴鴨

反歌



山縣似種之青菜者雖過可摘人之無之不怜也

悲緒未息更作歌一首并短歌二首

如有刀豫而知為者天神仰乞祈地祇伏而額衝齋茲乎床邊似座而竹玉乎無  
間貫垂木綿手次肩似取懸倭文幣乎手似取持而勿離跡禱而益乎何方荷御念  
異目香春草之益目頰敷真十鏡雖見不足玉緒之惜盛乎露霜乃置而去兼空蟬  
跡念之時荷妹跡為而二人造之出立之島之木立荷為之來鳴春方者蘆棺木之  
山下耀咲花乎折插頭管左小牡鹿之嫺喚秋者天霧合鐘禮爾丹穗經黃葉乃色  
夏借見吾妹子跡手携而木晚之繁念乎意遣見奈疑之物乎櫻花將薰秋乎從今  
者誰與將偲往水之過去妹乎懸而耳戀管將行天地爾悔事乃世間之悲事者愛  
寸八師妹命乃吾乎除而何地往跡香水鴨成二人雙居要而師情忘為結而師事  
毛背而家放座

春花秋黃葉乎從今者誰與共似香折而將插頭

別西妹之令着大王穢衣褻者雖益誰香取見

文政十三年庚寅冬十月十日哀傷長逝之弟歌并短歌

天地之神祇無鬼荷在益者何物香將恨木綿手次肩荷取懸倭文幣乎手似取持

而天神仰乞祈地祇伏而額衝慙慙似禱心乎何為似打棄將賜天地之神祇之惠  
慈乃後遂荷驗之在而愛寸弟命之荒璞之此月期呂乎打靡臥有病何時然毛令  
愈賜而若草乃妻似子等荷手携吾許來益而吾新人管婿干柳原氏故謂之來吾許也相咲六時之真  
坂者幾許歎有六等大舟乃憑之心何處香今者緣與等十月鍾禮乃雨零山霧合  
隨悒谷似晚闊跡隱座兼現前友夢友不知雲入夜之念迷而天仰足摩叫比伏地  
胸打歎展轉吾哭淚息時文梨

反歌

何在歲月日香愛寸弟命乎又一目將見

悲傷清水濱臣之女死去作贈歌

篠輪津之池乃清水之真清水之底并照而石着云玉爾益而所念之愛其子者秋  
山之赤葉柯怜裏觸而入哉座兼知智能實之父之命柞葉之母之命者立而居而  
日爾異雖待往水之還毛不來者雖戀將為便不知且霧之思亂而生緒丹嘆座常  
吹風之音聞我毛庭田泉流淚留曾不得鶴

反歌

水底之珠爾勝而愛寸子則從手離斯等云父母之悲也



見雪女歌集書其後歌一首并反歌

都追慈花香越賣名湯竹之十依妹者何方爾所念食可夏野往小杜鹿之角之束  
之間毛惜盛乎露霜之過而往兼空蟬等念師時爾春去者花折頭刺秋付者黃葉  
插頭所念寸心之緒呂乎時々丹思暢乍歌爲其言尙矣永代之形見爾爲管後人  
之德爾爲與等藻鹽草書集爾有未通女等之此之歌集卷返之見者悲見丈夫跡  
念有吾毛床之邊之交机之上爾涕拭津

反歌

言靈之千羽日助而後世之形身等成有此之歌書

賀長濱若宮八幡宮祠官大久保香贊六十齡之時題蟹書

五十申立神酒座奉且煮異息時無仕來神之千羽日常言福真幸座勢吾兄子之  
齡乎長濱之濱毛勢爾並居集而神祝爾祝廻之豐祝爾祝轉之酒見附惠良歧榮  
而五百重浪千重浪敷似歌舞令響居者琴引似吾乎召賜常笛吹爾吾乎召賜常  
那麻里居葦蟹尙母葦邊從競出來而此間丹集有

賀小松某六十算歌并短歌

大澗入江溢而有磯越外往浪之外心都毛不持若草之自弱時感嬌等之續麻之



線柱打麻懸續時無二久堅之天似始之神祖之道之直道乎古之猪名部工之墨  
繩乎延有如一道荷仰尊神習々伊座而神直日直言以古事乎言問交大直日直  
心似世事乎取持爲去列土左國七郡之許知恭智二鎮座廿餘一之神社之諸之  
大御神等其乎霜字豆那比座而夏野往牡鹿角之束間毛打乘不賜夜守口守似  
守賜幸利任意拷繩之千尋繩之長世似眞福座而月諺之持有越水彌變若似變  
若還座端寸八師吾兄君之宜苗名負小松之常磐堅磐似

廿餘一之神社之皇神之靈治波比座其人也誰

名似懸爲小松之末之有廉叙波常磐堅磐似不榮可有

市川守行父賀六十算之時應需題馬畫歌并短歌

宇都蟬乃世之長人鬱瞻乃世之遠人常萬代爾眞幸座而事之有者倭文鞍打置  
延乘而火爾母水爾母吾君之御楯常成而梓弓末振起之投矢以千尋射渡之勤  
而將奉仕後世爾聞繼人毛語嗣言次金常愛八師吾兄君之朝庭取而草飼暮庭  
搥而水飼搔撫之情毛驗久青雲之向伏隈白雲之輕引極時間爾伊行至而鳥翅  
成早歸將來此之赤駒

反歌



左並有馬之歩之無如久長人之世爾及人將在哉

新室壽歌

奥山之大峽小峽爾茂立留真木之大木之本末乎神爾奉而中間乎婆娑手爾造  
伊取來而今造爲流稚室之此室爾親族共來入集而贊舉而稱申久家長之心鎮  
常築立柱之太萬代爾動事無家長之壽堅常取結綱根之長千年似裳絕事無繫  
卷者文可畏句々迺馳乃神命之千羽日座護座者常之閑爾富榮六跡脚日本之  
此傍山之牡鹿之角指舉持殊儼々毛不儼毛旨酒乎美飲而手掌乎拍上遊今日  
之樂也

裏御室濱所産貝贈齋部道足歌并短歌

土佐の海の入野の濱おきつ浪來よするまにま玉のしもさはあよれども  
貝のしもまじあよれども海山と草木のかさを責にもちかけるが如くその  
あやの見のあやしくなりいでし此袖貝のゆるよしをいかにと問ふお里人  
の語りつらくの掛巻のかしこきかもよ天地此神此あらびと大八島くぬち  
ことく亂れりし時のさかりお鎌倉の平の子らの世の中のまおのまお臣  
くなたふれたふれはありて遠つ神にが大きみをましおも此弓矢かくみて

ひなさかる隠岐の國へお神下しいませし時お天皇の神の御子の大船お眞  
梶まじぬきいさなとり海路お出て遠々し土佐路をさして百船の泊る入野  
の濱清みはて給へればそおをしもあやあかしてみ里人いむかへまゐ來て  
磯山おかり宮つらへたふとくもいませまつりぬまかれども大宮此へお露  
霜のかきて別れし若草のみめのみことを玉だすき掛てまぬがし山たづの  
むかへはやまとかしおくもきおすまにくつかへ人秦此おくおの足引此  
山ゆき野ゆきたいおさり川ゆき渡りみさとへおゆきたらひして淺茅原つ  
ばらくお大みこと傳へまをしていそしくも御供つかへておしてゐるや難  
波のみつおすむややく來りしものを春山のまなひさかえて秋山の色なつ  
かしきみおもわをかきまみまつり遠つ人松浦たけるおるやなくもたはけ  
むものと白波の濱松の根のまさはへし心もまらおありそへおかりはつく  
るとおく子らのおし苜るはしお遠つ人松浦たけるい若草此まめ此みこと  
をおふけなくいかさうぶきてさにぬりの小船お此りて沖さかりこき出お  
しを阿波の海名おおふ鳴戸のうづ潮お梶どりかねてはどくお船しかへ  
ればたけるらひおちかしおまりせむすべのたどきをまらおそこおしお思



ひはからく若草のみめのみことの色深きみけしの袖をむつみの神のほ  
 りすと御袖をらとささけもちてわの中おなげ入てあるを中々あうづ潮高  
 くいやましお立しき寄せき頼お船のかへりぬえかれこそ松浦たけるの  
 どのそまおきを深めていくりなすまづき失ぬれをゆるぎのみたまたすけ  
 てむつみのみことのためにま八ひろわにおひての行きしあやしくもみめ  
 のみこと現とも夢ともまらお浪の上をなづさひ渡り淡路の野島の崎お  
 時の間おいゆきいさうてつゝみなくいませしとを云ふ解ささけし御けし  
 の袖の浪のむなながさえ來おて皇子のますあり宮近き濱おしも打寄せお  
 ければまもせおそ此日のきはみ百お千おなり出おしをよろしなへ名お  
 ひこしと袖貝のそのゆるよしをいにしへよ今此をつゝお語りつぎいひぞ  
 つぎたる世の中おくすしき事お物毎おさはおあれども聞く毎おあやお悲  
 しみ見る毎お心うごきて白妙の吾袖さへぞこゝたぬれつる

百お千お貝のよれどもこれやこの名おかふ袖貝見ればあやしも

拜長岡郡大津里遠祖飛鳥井雅墓作歌

内日さす京ゆさかりなつさにしみさとゆいでて天さかる鄙にのあれど山

並のよろしき里と川なみの清き河内と幡多の國愛宕の山お高殿をふと高  
 しきて藤原の大まへつぎみ梅の木のおやつぎくおうつそみの代々を重  
 ねて國のうちの事とりいませそおをしも思ひ頼みて大船お真梶まじぬき  
 白浪の八重をるお上をあへぎつゝいおぎ渡りて大かたの鹿持の山お真木  
 柱はめてつくれるみきのへおいまし給ひて新玉の年ふるほどお藤原の殿  
 のわくこのゆく鳥のひきのまにく長岡お大津の里おもみち葉お移りい  
 まして春花の咲のさかりに秋の葉の匂へる時おありたゝしめし給へりし  
 井北山のおおみづ山をとお宮と定め給ひて磐がくり隠りましぬれいにし  
 へゆ今のをつゝお諸人のいつさまつれる飛鳥井の遠つ神おやかむおやの  
 奥つき處まじい物ひさをりふせて鶴お物うなねつきぬきかしてみとをる  
 がみまつる今日のたふとさ

あすかおの吾遠祖のかくつさをあお來て見ればあまざしながる  
 古へをなれもこふれや墓の上おあてる木葉のまなひてあるらし

東照宮神幸之時作歌

下野二荒山爾宮柱大高敷而天下四方之人乎蒙安夫佐波受惠賜等萬代爾鎮



座東照神命之尊哉恩賴乎凡爾念而將有哉所聞食建依別能國內似裳選奉而  
 手酬草幣取向而朝夕二將祭物等我君之御念立志委曲爾仰賜者匠等百工母  
 我君之御命恐見家忘身毛多奈不知伊蘇波伎氏奉仕苗爾月毛日毛伊久陀母  
 阿羅彌婆朝附日豐逆登薊野乃其美豆山爾新宮乎仕奉禮卯花之開哉卯月之  
 今日乎足日等定神御幸仕奉等久堅能天母照蟹目可我也久御矛佐々賀勢白  
 檀五百狹取持大御馬之口引雙而祝部毛法師之徒裳御尾前爾御供仕而蘆檜  
 木之山母響動二鼓打笛吹令鳴湯鞍干彌利通良志豆玉梓能道之術乃八衢荷  
 繩引延而木柴刺御與乎座而大御魂和奉跡紅之丹穗經處女我手二纏有小鈴  
 母由羅爾白細之袖振反踏平志遊手業乎大神毛穴面白登不見座有目八

反歌

吾公之御代萬世荷神左備氏榮會將行此乃新宮

題養老瀧

飲見者奇靈心副計夜爾所念此也是音耳聞月夜見乃持有越水久堅之天傳來  
 吾耳爲而倭多宜米夜挹取而家似歸而一盃者父命煮一盃者母命煮急擊奉而  
 彌變若似變若得染六其此乃真清水

題不盡山盡

天地のじかれし時ゆ峻河なる富士此より嶺のいひもかね名づけもまらふ  
 おやしきもいます神かもくすじくもなれる山うも其山此かさをうつして  
 古ことをまぬぶじがせむ其家のまづめとませて其家の資となせりうべな  
 く其かゝすらふりさけてたい見る如く神さびてまゐとたふとくかし  
 こくもたもはゆるかも不盡の高根の

詣土左國府跡作歌并序

大凡世之詞人推紀氏爲山柿以降之歌仙而不欽慕其風稱習其體者蓋鮮矣  
 傳云延長中出爲土左守承平中任滿歸京師著土左日記一卷傳于世矣我本  
 國長岡郡日吉山南之地是則古之國府而遺跡尙存矣當昔任國者幾許人而  
 至今里人獨戀紀氏則豈嘗因裁詞之巧耶有盛德至善民之所不能忘然也乎  
 天明中尾池氏慮後世遺失紀氏所說處與高村某者議將植碑恭告諸邦君邦  
 君悉親書篆額而賜焉遂需詞于日野家請文章于伏原家併勸以備于不朽  
 一日燕閒與友人遊觀其地仍賦數行之詞式抒下情其詞曰  
 咲く花の匂ふが如く天地の榮えし御代も大王のまけのまにく朝もよし



紀の大夫刺並此土左の國にはるく、あぐり來まして璞玉の年の五とせ  
 食國の事執持て老人も女の童兒もことく、あはふり給はせ撫でさほひ治  
 め給へばそこをしもあやふ懽まらちねの母ならなくみ縁子の乳こふが  
 如く諸人の慕ひ來よりし大宅のその跡どころまぬびつゝあが來て見れば  
 荒野等と草根おひさち霧こそわかをりさされ、まのれどもなやあらむ  
 と淑人の立る事立古從今のをつゝあかより繼言繼來ある里人のその言を  
 らを片山の列々椿つらく、お聞あきらめて後の世お生續ぐ人もいや遠あ  
 まぬびあせよと大宅の跡いちじろく石ぶみあまるしてゐれて玉銚此道行  
 人も行よりてい立仰おひ永き世お語りつぎつゝ遠き世あかくしまぬばむ  
 今も見るごと

いあしへあは此紀のあそが御事持國內をさめし跡とある此

題菟田松原圖

大王之命之任意新玉之歳之五年取持而仕留國之事竟宮方上等朝裳吉紀乃  
 風流士之奥放而榜往隨意神左備兵立榮有彼方之菟田松原遙々丹見放給者  
 靈寸春幾世經去兼枝每似鶴者群居本每似浪者打依痛何怜痛面白跡立而居

而見之給良之其故丹賦止不得在者贊舉而歌而之等云舟人之其言尙丹遠代  
 之事庭雖有直西毛今母如聞所念而此乃松原委曲似行來跡雖見不飽足鴨  
 暮春之日蕙心院尼君出遊于桂濱獲貝玉若干見惠副以歌詠

仍述謝報之意作歌一首并短歌

春方開藤之裏葉之裏門瀉桂濱之白愛兒清浪激丹紅之玉裳塗漬而與津浪來  
 因白玉邊津浪之縁流白玉拾取歸來益而濱裏常吾丹賜有取持而見者貴手卷  
 而見者奇母綿津見之手纏玉之盖毛解哉依之且潮之滿乃登等美爾狹丹塗之  
 御舟艤等楫音之髣髴爾聞乍楫柄丹吾身乎成者副而裳行申物跡樞實之唯獨  
 耳霞立永春日乎戀暮思結保禮息衝之心之緒呂會今者水葱少熟  
 宇麻人之不出座家婆綿津見之手纏玉之依申也其

痛惜伐櫻樹作歌 其地俗號四郎丘

いかならむよししあらねど人の子の四人あわたるいらつこを名あふへる  
 丘お水垣の久しき時ゆ枝茂く立榮えたる一本の櫻の花いつしかも早も  
 咲なむ見あきらめ心なきむと春霞立あし日より今日々々ど日を數へつゝ  
 立て居てわらまつ時あたふれたるまふ山もりお手斧もち此ぼりゆきたち



山つみおまひもせなくおあなわはれわたら櫻を本へきり末へかりたちい  
どり来て薪おなせれ胸をいたみ我の歎々どせむすべのたづきあらめや大  
名持少彦名の神代よりならへる業と新玉の春もつ毎お空蟬の世の人皆の  
さく花あうらこひまつゝ吹く風いたくな吹きを降る雨のつぎてお降り  
と天地の神おまひのみかにかくお心つくせどあくよしもそおああらぬを  
いふなるやたふれ心をまこの山より

かゝらむどかねてまうせバ山守おもたる手斧もかくしてましを

名所山

久方の天の原より大やまと國のまほらお天降まし天の香具山玉きはる幾  
世經おけむ山さびて見ればたふとし神さびて見ればかしかしあゝもへバ  
うべし神代ゆればりたち國見あそぼしどりよろふよろしき山と遠つ神吾  
大王いたゝへけらしも

久うさの天の香具山おまち經てあもりつさけむ神代しかもはゆ

鎮懐石

いにしへゆいひつぎけらく懸卷のあやふかしてししたらし姫神のみことの

御心をまづめ賜ふといとらしておかし賜ふといひつげる二つの石のくし  
みたま見れば尊し天地のはじめの時お二柱神のみことの太八島くぬちこ  
とくゝよろしなへうまゑしなへお潮なまのありてなれりと神世よりいひ  
つがひ来るさびづるやからの國へお富士の嶺の高きたふとき神國の御國  
のいつを山の端ゆてり出る月のいや照おてりかゝやかし天地のいや遠長  
く大舟のかちさをほさず仕へおむみやつこ國と定めてしみいさをすらを  
足引の山菅の根のぬもころおかけてまぬびつかしかかれども

かしまきやいつのみたましくしみま二つの石お今ものおれり

名護屋坂作

夕さらずかはづ啼なるみわ川の清き川瀬をには鳥のなづさひ渡り菰枕高  
岡すぎて大鳥の羽毛山松をさき竹のそがひお見つゝ蓮池此堤此上をすく  
くどゆきたもとほり吾妹子お使來むると小金門お出間の里のをとめら  
おおしね刈はす秋の田を見つゝ過行き足引の岩戸の岡のさにづらふ秋の  
おみちば引よちて枝もとをいお打手をりかざしおさして八重ださみ戸波  
の山への川そひの岡への道を九月此時雨の雨おきほひつゝいゆき到りて



むしぶすま名護屋の坂の坂の上お歎さうそむきのぼりさちふりさけ見れ  
ばみさごゐる洲崎の海のおきつあま八重折の上の鮪つると海人舟とよみ  
へつ浪の寄る濱への鹽やくと人を騒げる海原のゆさけきみれば立つ霧の  
いぶせき心なきおけるかも

名護屋坂たむけあさちてみさごゐる洲崎の海を見さけつるかも

羽山郷姫野村伊藤躬列家作

大鳥の羽山の里の真木の立つ山の尾上お明立バ秋芽子まぬぎさを鹿のつ  
まよびとよめおちたぎつ川の瀬毎ふ夕されバ霧立渡り磯千鳥まなくまバ  
鳴く山みれば山もみろほし川みれば瀬の音も清しありよけく住よき里と  
こゝをしもうべし昔ゆ定めけらしも

山川をあつみさやけみむろしよりたぬしき里とさぶめけらずや

又作

大鳥の羽山の岡の巖おの松お根ねばひ河瀬おのさいれ波よる松お根の絶  
ることなくさいれ波いやまくくお年のはおかくし来て見む羽山の岡の

和齋部道足歌

おして難波此國お國もせお里なみしきて人さはおみちてのあれど木綿  
掛てまつるみもろの神さびて齋部の翁の久方の天お始めし神祖の直き手  
ぶりを皇神の正しき道をひだ人のうつ墨繩の一筋お思ひさとりて小舟こ  
ぐ堀江お来よる深みるの深く尊み言さへぐ唐此てぶりの鳥網はる釋迦の  
をしへのあし垣の繁きこちたき蟹おゆく横しま業ら心ゆも真墨の鏡明ら  
けくわきだめましてうたひせるその言をらを大伴の三津の濱邊をうちさ  
らし来寄る浪の遠音おもきなむおしさかくばかりむかしき君を高とぶ  
鳥おももやありがよひあまがけりても朝づく日たゝ向ひ居て神祖の直  
き手ぶりを皇神の正しき道を語りさけとひさけましを玉鉾の道にし遠く  
關さへお隔て有おそよしゑやし道遠くともよしゑやし關へなるとも土左  
の海のおきつ島山おくまへて吾思ふ心隔ておもへや

とがせこをおひしむかしと鳥翅おすとびたつ心まづめかねつる

追和萬葉集卷廿内相藤原朝臣奏之歌一首

日の本のやまと島根の天地の神のみことよるしなへかためし國を今更  
お何る思はむさかしらのまこわざせめやおよづれのたはこといひめや天



地の神のまにまにと劔太刀とさし心を梓弓ふるひおこして大きみあつかへ  
まつらむますらをわれい

無題

土左の海清き濱邊ふおきつ浪きよす白玉邊つ浪のよする真珠まら玉いや  
もとめてぬく人なしおひりひてまく人なしおわたのそこかきをふりめて  
いくりなすかくやまづかむわたらまら玉

登津野城蹟作

大舟の津野の命の眞木柱太敷立て樗の木のいやつぎくお木綿花の榮え  
ましけむ羽山のや姫野の山の玉きはる幾世経おけむ神さびて見ればさぶ  
しも山さびて見ればおなしも百木なす木高き嶺お朝さらす雲居棚びさ夕  
されば霧立をさり雲おなす心もまぬお立つ霧の思ひ過さず玉だすきかけ  
てまぬびつ遠き昔を

朝さらす姫野の山おたつ雲のこゝろもまぬおいにしへおもほゆ

文化十二年乙亥十月十五日登朝峰作歌

武依別國のまほらお高山のさはおあれども神がらし尊き山の山がらしみ

かはし山と昔より人のいひつぐ介良山のその朝峰にますらをの友いさな  
ひて木の根とり歎きうそむき登りたち振さけ見ればたゞむかふ室戸の崎  
の日の經の大海の原お眉のごと横はりふせり打渡す暎陀のみさき日の  
緯の天のみそら此雲居なす遠く見えけり神無月時雨の時と小鹿ふす大島  
の嶺のさにづらふ紅葉ちりつゝ物さはお大津の田井の雁お音もとよみて  
さむし神さぶる岩根こゝしみ松お枝のまげみさるえて此峰の尊きみれば  
皇神此うべし神代ゆまかしけらしも

朝まねの山のいは根お神さびてさてるまつの木いく代經ぬらむ

贈清水濱臣歌

篠輪津の池の清水の眞清水のさやかお聞て吾こふるはしきわおせびまき  
柱賛てつくれるそ此宿の名おかゝしたるさゝ浪のいやまくくお月おけ  
お戀ひやわたらむはしきわおせを

詠弓矢

天地之初時爾大穴牟遲神命之生弓矢手握持爲千磐破其八十神乎鳥網張坂  
之御尾每直沙河瀬每似追撥追避坐而神隨大國主常御名似霜稱申而天下御



造座而大八島大人掃座之其時從今乃乎都追爾久堅之天沼琴之樹似拂而地  
毛動似音高響之如後世似語繼幣等空暉之名乎競而大皇似奉仕武夫之臣之  
寶等成有弓矢香

擬防人妻悲別之情作歌

志保布禰乃弊古祖志良奈美爾波志久母於不世他麻保杼佐傲奈傲奴美許等  
爾作例婆麻我奈志氣阿母我目可例豆宇都久之氣麻古我手波奈例阿加等枳  
乃可波多例等枳爾乎都久波乃之宜吉許乃麻欲多都等理乃欲太知伊麻之豆  
阿之我理乃美佐可多婆利豆奈爾波治爾美布禰於呂須惠布奈與會比與會比  
多志湮豆之麻加枳乎許藝爾志勢奈我多等都久乃奴我那傲由吉豆安比太欲  
乃佐波太那利奈婆於久例爲豆伊波那留和禮波於吉爾須毛乎可母乃毛許呂  
夜佐可等利奈宜伎伊久豆伎爾波奈可乃阿須波乃可味爾許之婆佐志伊乃理  
麻宇之豆可奈刀田乎阿良可伎麻由美比我刀禮婆阿米乎麻刀乃須和我勢奈  
乎和我麻知乎母都久之閉爾傲牟可流不尼乃都追美那久波夜久伊多利豆大  
王乃美許等乃麻爾麻阿良之乎乃伊乎佐太波佐美由伎米具利佐氣久伊麻之  
豆麻由須妣爾由須妣志比母之多延奴刀爾可比利伎麻佐爾於米可波理勢受

寄弓噲思

搔霧之雨之零夜乎但獨山路往友刺柳根張梓乎取持而爪引爲者人魂之左青  
有公毛惜而遠離云乎如何爲而令遠離烏玉之晝夜不云已身丹束見懸有戀之  
奴乎

梓弓戀之奴丹令取而者晝夜弛時者核不有

某贈鮪若干喉之時聊申謝作贈歌一首并短歌

瘦々母生有者將在乎八多也八多鮪乎漁跡流卷其乎恐漁獲卷吾者雖念取食  
常人者雖言將爲々便之田時乎不知隱居而思煩月荷日荷爾憊留吾乎勞彌所  
念而愛寸八師吾背君之川爾出而邊往儀往五十衣掃而漁有鮪乎許多吾荷賜  
做禮朝異食管在者夏瘦爾瘦而細而若葦乎取之如似取搯可所批萎々之醜之  
四吉手母彌肥似肥而太而殆千人引石乎手末爾可擊持今者將成

彌瘦似瘦之吾身裳給有鮪乎食者不肥將在鴨

松本弘蔭一日賚園松之題于余詵之曰右曩歲春嘗自然生園中  
累年柯葉繁茂尋家有慶事必其兆也幸忝褒祝何嘉如之仍賦數  
行之歌敢投机下其詞



愛八師吾兄君之妻爾子爾手携而朝庭爾出立令鳴暮庭爾蹈平留小垣內之其  
之苑生爾榮有千代松木者足檜木之山往野往伊許自來而殖之庭不有愛八師  
吾兄君之弱草之弱時自皇神之嚴道言靈之幸道乎斐太人之打墨繩之一條爾  
尊美座者所虛乎霜宇豆那比坐而生出之千代松木之常登波爾面變不為許知  
恭智爾枝指有如妻爾子爾榮座常天地之神哉蓋口種乎居象

反歌

三苑生之千代松木者天地之神乃受日而令生家良壽也

生出之小松之若末之木垂左右榮將座人之友重二者

題正成與正行別盡

玄黃之神之荒備等大八洲國內盡借裝乃擾二亂千早人競起而惶八皇御朝廷  
荷楯並手射向時似天下四方之國煎人多爾滿手齒有跡千萬乃軍卒爾有鞞言  
舉不為取而可來物部乃益荒健男者汝乎除而又者難有佐並有人者將無常神  
在隨撰賜而爾宜多麻比任賜有流勅旨戴持而劔刀腰爾取佩梓弓鞞取負而不  
隱障赤心乎皇邊爾究盡而伊蘇四三手仕來二重則大皇令禁目屋津國之六兒  
爾下來敵向經為故乃奴蛾痛矢申面爾令立而吾命之過牛鳴時衣今死饑廻來

去異類爾谷藻世爾長柄歷而哭兒如慕來依有門下人奴僕之徒乎不令放撫見  
治見群鳥之足利思津烈代山行者草生屍海行者水漬屍常斐太人之打墨繩之  
一道二思定目手玉切內限者彼方之五十狹々村竹伊左佐米母願不為而不奉  
仕國則言趣千磐破人乎母和為掃清目仕奉而生花之丹太經蚊如大御代爾再  
令復八桑枝之佐可遙麻都良志石上古柄小野之本柏本乎不忘香細花橘之家  
風令吹名引為而永世爾語繼氏々後世乃鑑等為根凡爾心動勿益荒雄西手

反歌

古從負持來有橘之香細名乎勤與令腐勿

宮崎八矛往于江戶之時作贈歌一首并短歌

吾君之御言畏美草枕羈往公者葦日木之八峰踏超不知魚取荒海涉而天皇之  
遠乃朝廷等鷄鳴吾孀之國爾急伊行足椅益荒雄之赤心乎劔刀彌磨乍勤久母  
事執持之平真幸座而璞之年月立者飛鳥之早却來還六其日之曇爾何物乎鴨  
吾者乞嘗何物鴨吾者將欲玉梓之道行觸爾耳爾聞目似見別爾歌為八十之言  
靈片山之列々棒委曲爾書集持來示給根

反歌



好去而早還來根吾瀨子之客去暴乎吾戀居六

病中伸拙懷作歌

手握而擊而搨而辱見而夜良比氏置之否醜目戀之奴我不懲摩爾又母可來也  
身上爾去年裳今年裳責來管束見懸而打細爾吾乎令惱者如何成也世之邪鬼  
曾如何成也世之惡鬼曾百千遍問常不答五十殿寸而苦寸鬼尾瘦馬丹令負重  
荷丹上荷打跡言留我如久取掛之肩乃可加布波海松之知和々氣懸而月異爾  
斷者尖禮騰管士花丹頰經妹之蟠腸香黑寸髮丹抑指五百津爪榴妻谷裳吾者  
無者針持而着而將服跡云人母無

述拙懷

久方之天之八衢々々爾道者雖有猿田彦吾大神之參迎侍座而伊蘇之久母御  
前仕之一條之道者正道々々之直一條爾古乎仰尊三伊那志許米之許米伎說  
爾更々爾迷事無久天下言向座等大汝神命之杖有之重八尋之廣矛之廣心乎  
天地爾思足椅恐毛八意知須思兼神之千羽日乎茜刺日者之良爾烏珠乃夜者  
須我良爾乞祈而學常為跡懦弱哉吾身西在者無用荷老附意為便裳為便無也  
皇神之道之與儀乎別不得津六十七之年者歷香常

又

多夫禮多流醜翁我橫言跡人社忌目菴言跡人社罵目能咲八師人者雖罵縱查  
屋師人者雖忌己之云事跡念勿神語之真事傳而神在隨物言吾曾香山之湯津  
真賢木之中枝爾懸之鏡乃明寸情乎以而神直日直為形爾大直日直手振爾天  
地之神之任意神習勉吾子等進吾子等

又

懦弱哉吾身西在者負氣無且者雖念恐哉命之任意皇神之稜威道言靈之德用  
道乎足引之山菅根之根毛已呂爾教諭常拒措越爾麥咋駒之口不息言舉為管  
神語乎受而傳而鄉導為而率吾曾道邊之草乎冬野爾蹈干之吾許往來而憾嬌  
等之續麻之線柱打麻懸倦時無爾吹棄氣吹之狹霧言借寸事等盡隈母不落問  
明目而思兼神之千羽日乎朝暮爾騰白而大來目之益荒健男之取持之天之梶  
弓弦着而引而不縱勳吾子等

又

布勢廬之曲廬之裏爾吾者雖有曲有事者一言毋吾將云哉跡栲網之白髯搔撫  
之波夫可比吾云事乎橫言跡人者不聞乎狂言跡人者不云乎何為香人之咲有



何爲香人之囁有頃者之老舌出而每云言者余々美氏鼻當無久米久爲形蓋母  
穴可笑等之腹内乎鎮不得之香鹿煮闕爾爲便無物者世間之道

又

葦原之水穗國者神在隨言舉不爲國雖然辭舉爲管吾子等爾一言告久百不足  
八十禍津日之禍事爾相率而橫道之行惡寸道爾所欺迷行管刈婆爾爾足蹈卷  
乎勞彌默然毛不得在而正道之行吉寸道者此處西毛有家留物等鄉導爲而廣  
大道之平寸道蹈會氣而又更爾狹細道之險有道爾之入勿如此而廣大道者懸  
卷者畏有友久方之天八重雲排分而天降伊座之天皇之神之大御世徒櫻木之  
彌繼々爾傳來之柯怜道曾止辭舉爲吾者

又

石上故西御代之古言乎慕醜屋爾年久爾住有翁者無才蚊人之不問來無條蚊友  
之不緣來吉咲八師無條雖在吉盡矢師無才雖有古言乎率去語相六入來友人

又

種々乃書者雖有石上古事記者千萬之書乃御祖肇持讀見每天地之初發之時  
由御代々々乃手張盡久方之天之八衢隈毛不落所念鳴神語乎喻卷念古事乎

知卷念者凡爾念而讀勿橘之權原乃中瀬爾美會我師之等布潔心乎以而明久  
委曲見吾子等書之御祖乎

又

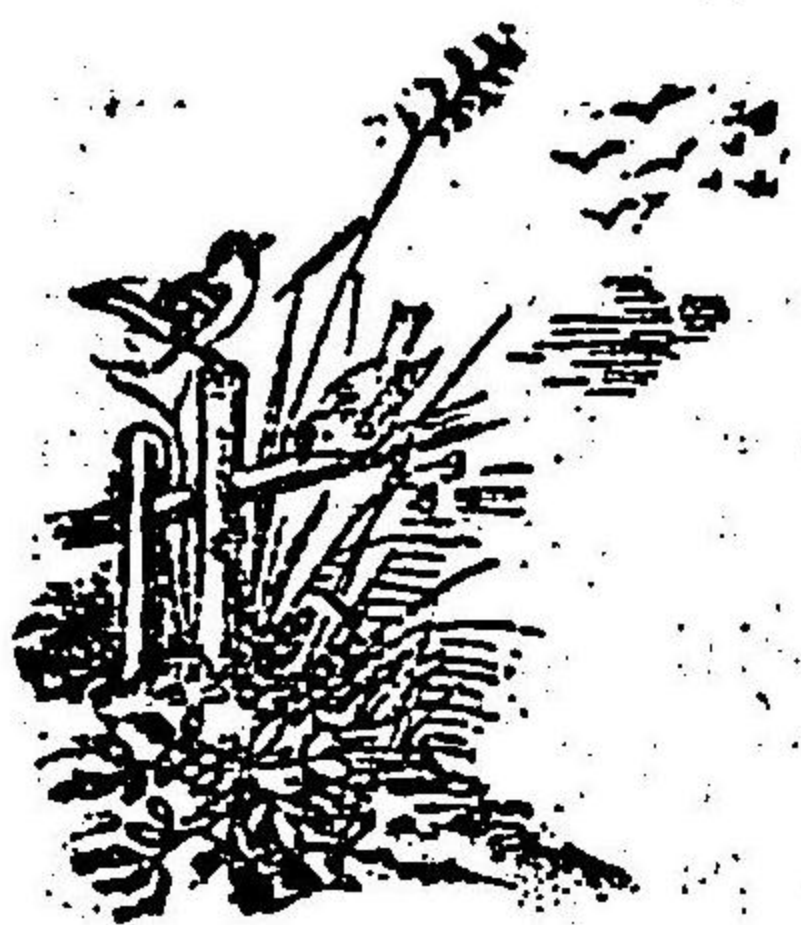
皇神之稜威道言靈之德用道乎久方之天之吉葛都良々々爾解論六等神直日  
直情爾大直日直言以加久云者人爾所厭加云者人爾所誹今者吾者口乎閉而  
又更爾不云跡爲者庭吉跡濱邊爾出而海人之引網爾羅有鱒ニギハヤヒ如腹脹滿乎者  
如何爾吾爲

又

刀之母強母我母心之母聰母我母百不足八十禍津日之惡事爾相率而賢良爾  
物言橫爲狂等乎搯批而他國爾追除置而久堅之天河原爾八百萬千萬神之神  
集々座而神議々之時從高御座天之日嗣等八隅知之吾大皇高照吾皇子之恐  
毛受傳座一條之道之直道乎香山之湯津真賢木之中枝爾懸之鏡之明氣久喻  
知得而水母如漂蕩心令鎮物



山齋長歌集 終



由良牟呂集序

長歌のまじり歌を比べたるものなりかれ五七文字を二つかさねて七  
もじもてとちめたるを反歌といひ五文字七もじをいくつも連ねてまた七  
文字もてとちめたるを長歌といひて短きも長きも句にあそ多きと少なき  
とのわからぬれど辨わかれども同じかりけり其よしおのれ古風三辨考に委  
しくいへり然るを古今集えらばれし頃より短きも五七とつづくが正しき  
を七五に綴りなして三句にて断つれたるが多く出来たれどそのおのづから  
短き故に調のかはれりどもお不えぬを長歌をもこれに同じく七五七五と  
つづけたるの詞よわく調くだけて口に歌ひ試みるにまたく近き世のわざ  
をぎに用ゐる道ゆきとか豊後とかいふうたひも此の如く聞きなされつゝ  
更にみやびたるおとゝも思はれおはれ貫之躬恒らひかなればそを辨へ  
ずてかく怪しきすがたの歌をおのれもよみ勅撰にも載せたりけむこゝに  
元祿享保のおろより古へ學おこりて萬葉の古へにさうのぼり古今此長歌  
をおろよからず思へる博士たちつぎつぎにいのでつひにかく物おどの盛



にひらけし御代となりたるの我友のよろこびにして辨玉上人もまた其ひ  
 どりなり上人はやく仙覺が昔を去たひて奈良山を吾たつ袖とし契沖のお  
 どをたづねて難波江ふ心の水をたへ物せられつるまゝに詞もうるはし  
 く關も高くてかいなでならぬおどの葉を玉川のたつくりと織りなしあら  
 むが崎のみるめとつみてかくあまたえられつるを教へ子ら板にゑらむと  
 語らひはかりておのれに序をはしよみおへりおのれふるく相えたしむこの道の友  
 なればいなみがたさに短き筆のつかどりてあさき硯に向へるになむ

明治の十まり二年の春

近藤芳樹識



# 瑤々室集

## 桑門辨玉詠草

一月一日拜旭日謹作歌

ぬば玉の一夜のからに昨日まで世のいとなみに暇なき人の心も天のはら  
 ほがらくと年たちてあけゆく見れば青雲にかもひいつきぬ白雲に望の  
 たえぬ向ふ空此どおもあるか仰ぐ空ゆたおもあるか一年のいつのあれど  
 も今日の日の豊さう此なる日の大御影

明治丙子新年望山御題謹而作歌

おら玉の年比始の言ほがひまゐる來さもらひ大み門はじめたまへる都邊を  
 仰ぎて見れば天そより高くぬけ出ていやさきお筑波嶺すゝみいやはてお  
 二子嶺えどき甲斐がぬの秩火此嶺とみまゝへにひうへてつゝき安房が嶺  
 の相模の山とみまへよりなのめお聳え駿河なる富士のたうぬのむら山の  
 おさへとたゝし天づゝふ日此経緯に影面に背面おかぐみ峯も尾もまゝり目



おかはしまくばせしさもらふ如くむれ競ひ屯める如く御垣なし遠のまもりど山々のい立ちめぐるもあたらしき年の初日の此どかなる光をそへて稜威高く猛く雄々しくとりよるひよりて仕へり大宮所

明治十年一月御題松不改色謹而作歌

久方の天此御かげの大宮此御墻の松の御齡此千歳の林風ふけバ萬世よばひ雨ふれば千世此色そひかく霜のあはれどかれさふる雪のつもれどさへさしかはる古葉の見せずさしそはる青葉のまげりたちめぐる根ざしかさめてうごきなき石垣の上にとあしへに吾大きみ此千年もる松

同

いや高に枝さしおほひいやひろに青葉まげりて昔より老木といへど吾見ても年のへぬるを其葉の霜ふもかれず其枝此雪ふも堪へてさかえゆく松のよはひいにくらなるらむ

新年作歌

あらたまの年のはじめ此るやまをしまをすやごとくにひとつさとみきどりいだし御世たへふた杯三つさあるじほぎ四つさ五つさ吾いはひ六つさ

七杯くみかはま杯のかせくよろこび此かさねあまりてゑみあふれつゝ

相將友人某々遊杉田梅林作歌

蟹がゆく横濱のまち級たてる石川の坂山そはの根岸の畑百たらず五十子の濱みつ栗の中原の道をぎくして杉田の里に瓢に酒さへいれわりおに飯さへもりてはるくど來しいたづきも思ふどち忘れてぞ見る梅此盛に

遊杉田登妙觀山而觀梅花于此一目瞭然乃作歌

春風の比どにしふけバ杉田のや千本の梅の沫雪のかのころ鳥とわた中おさし出で浮び咲きそふも限のあらせちりかふもはてうらえれず匂ひあめあをろくと搔きなしていふきめぐらし沫雪に杉田小國をつくるはる風

反歌

梅さけバ海よりつづく花のいろにすぎ田のさとも波のなかなる

庭梅

かけ高く枝さしおほひさき匂ふ一木の梅の庭中にみ柱とたち垣ぬちに花の屋をふき花のやにみてるかをり此み柱を風のまにく左より右よりめぐりめぐりあひいゆさあひつゝ青玉のま玉なすみをいつら結ばむ



明治十一年一月御題爲入新年語謹而作歌

春またで年のたてまど年たちて春したゝねバ年たてる志るしのあらじ春  
たゝぬえるしのまられ集はなれて鳥もなかと枝こもり花もさかじと思  
ひつゝ在ける程に鶯のけさぞ來なける春またで立渡りぬる年此えるしお

夕鶯

うみをなす長き春日にくれのこりなく鶯の影かすむゆふへの月おあはれ  
をバやらじとや鳴くあはれをバそへむとや鳴くそへむとてをしまぬ聲り  
やらじとてすまへる聲うさゝわかむよしのなけれどさく人のよそにいや  
らじ聲のあはれを

反歌

うぐひすのなけるかざりの暮まぬとて月おのみやの心やるべき

馴鶯

梓弓はるたちしよりありつゝも來ぬる鶯里さかるわざへの園のいくみ竹  
いく夜宿りしたしみ竹たしにねあけむきるべになまてやなけるもどべに  
ありてやあさる中つ枝に時やまむる人ならば笠させましを衣かさましを

若菜

朝風に衣手かへし夕つゆに裳の裾ぬらしおもちゝの齡わかなど春あささ  
野べにつむらしいはひつゝ母にまつるやはぎつゝ父にまつるやまはし  
處女うらぐはし子等

贈人若菜歌

よろづ世をふる野の原に出たちてつめる若菜五百ち世をふる川岸におり  
たちて洗ふ若菜滌ぎふるをどみの水のいやをちにみまもいやは遠  
に若えまसानも御齡をはぎてをさあせ祝ひてを致せ

若草

うちわたす春此野の面此目にたちてこのもかのもふうま縁もゆる若草わ  
か草の妻うちなびきあのもあどきいすのこもるかのもにと雲雀のなるゝ  
床とまめ時とやどりうらやましく蔭たれむべくやゝおひぬらむ

柳

籠こそあみてのかくれ簪こそとりていはらへあまなくに軒端にかゝりと  
らなくに庭の面はらひ籠なし日影をへだて簪なし塵うちはらふむが宿の



えだり柳のみやびを此友のとひまむまけをかもする

同

ひき蘭のやはかり有りともさらしその八量ありとも何せむにあり糸くら  
を何せむにあり機おらず幡にしもおまゐるならねど糸にしもくれるならね  
どひささをに色いそひゆきいや長にたけいのびゆく庭の面のえだり柳に  
あにまかめやも

月前柳

うちなびく柳の糸のかくつゆを玉とあざむきいつる日のたいさをあした  
くるゝ日のかざらふゆふへ赤玉と秀つ枝おつらね白玉とまづえにぬきて  
瑞玉此ま玉の親と中つ枝お月をかまめてよるのかけなり

歸雁

春花のさくといへれどふく風のおちといへれどあなとへとさを方いとぎ  
こなふの心もどめまそなのみおもひたつらむなきつれて雲井に隠れ  
聲かはし霞にさえてつれもなく歸る雁おの春花の咲くもかひなしふく風  
此こちといふ名もいふづらにして



花

花のもよ櫻の花木のもよ松の常磐木ときはにさかゆく稍月やどし雪に埋  
もれありたてる姿むかしみ秋の夜此ふくるもえらき冬の日此寒さも忘れ  
いむかひてめづるあゝろも春くればうつる櫻いひえらぬ花の色かも花  
のにはひかも

山花

梓ゆみ春さうくれバ咲出る時をまちつけむれ來ぬる人あまじりて綾の袖  
赤裳かさねて手弱女もかげたちならき袖おそいかさね此にはへ裾おそい  
かさねのはゆれいつ見ても花のひとへ此山さくらばな

春日至干東京遙望東叡山之櫻花而作歌

天なるや日此小宮うわたつみの龍此都う白雲のあわたちおはひ白波の來  
よりめぐるどおぼめきし昔も遠くうちわさしえ此ぶが岡邊うらくと花  
ぞにはへるあらくぎの黄金のいらか高殿のにぬりの軒此おちくに見え  
しや今のさくらなるらむ

明治癸酉之春官下令於伊勢山植櫻樹數品至其花時爲觀花



之遊因作歌

あづさ弓春日うらゝに天照皇大神此幸御魂いつきまつれる神風此伊勢山  
みればうゑなめし御垣此櫻いひえらぬ花の色かも天なるや齋機殿にかし  
こきや皇大神此神ながらおらしましけむてるたへのみけしのはひ白妙  
のみぞの光を廣機にかけてぞ思ふ高機にかけてぞあふぐいひえらぬ花の  
色かも年のはに五百機千機よるづはさ機ばりひろく咲そひなきむ

花下言志

賤たまきいやしかる身此およびなく何う思はむふさへなく何うほりせむ  
花ぐはし櫻の花をあくまでも見るよしもがもうらくとささ此さかちあ  
思ふどちゆたに遊ばひありつゝも物おもはせぱうつしみのいける限のた  
ぬしさの極みならましさけばとく移ろひゆくを去のべぞ胸やまからぬ  
戀ふればぞ心の痛きそこゆゑにちるを歎しみてかひなきも恨みけるかも  
わりなくも歎きけるかもあゝら櫻を

花處々

花ぐはし櫻さければ我宿の花に人まち人の家此花も見かほり今朝もまた

とはむとまれバ鶯此ひとくととむ今朝もなほやめむとすれば子鴉のい  
ざあどさそふいざ今日の汝が行くかたのさく花の宿をとほまし鶯おとぎ  
への園の花いまかせて

花盛

梓ゆみ春日うらゝに長閑なる今を盛と櫻花さきいでぬらむいや日けに色  
香そひゆきあした見て夕べに見ればあしたより夕べのそはり夕べ見てあ  
したお見れば夕べよりあしたの増り昨日より今日のそはまり今日よりい  
あまれまさらむ日ならべて野山あさらさうつろはぬまに

馴花

櫻さく野山に遊びぬぼ玉のよるもまがらに思ひねの夢驚かし庭つ鳥かけ  
のなく野つ鳥さすいとよむ山鴉ねぐらをいでぬ出たちて山路やわけむ  
おきたちて野邊やあさらむ今日もまゝ庭の花より蔭たちならし

樵路春月

長閑なる春の山路にさく花を見てやおくれし夕月をまちてや暮れしま柴  
かひうたひつれくる山がつか聲すなり家路とめ今かへるらし里さして今



歸るらしま柴かひうたひつれくる山がつが聲すなり

反歌

さきつゆく花もかばるの月影に木ありぐうたいかままざりけり

曙雲雀

うち霞む雲井はるかになく聲れいついあれどもひむがしの野にかげろふ  
此横雲に匂へる見つゝ聲たてゝたつや雲雀此若艸のねぐらを離れ有明の  
光をちらし露おもる花にかをれるあけぼのゝ空

海上春望

いにしへありけむおとゝ水の江の浦鳥が子のふるおとを文あも傳へ今  
此世のかたりあもせりうべなくゝふりさけ見つゝうらくゝと霞むうなび  
淡朝なぎになづさひゆけわわたつみの都の春ものどけさに思ひやられぬ  
まづけさに心ふかめぬ寄る波此かゝるをりしもそゝるにし船出もまらむ  
はて此なくうかれもゆりむおそやあ此身も

反歌

うらくゝと霞みわされるわゝつみの都のはるやいかみ此どけき

同

うらくゝと霞む春日に住吉此うなびに出て百舟此わたらふ見れば古への  
事ぞおもはゆるかくばかり此どなきも此をいかさまに風うあれりむいり  
さまに浪うたちけむあさもよし紀の朝臣の御縣のまけおどはてゝ都べに  
歸らす時にあどもへる妻子らも此せて大船此思ひ頼みしかあらさへたと  
き残まらにたげどゝまどきにまどきせむすべ此そおになりればうしは  
かまこれのみ神にことあげし此りてま残さく眼こそ二つしもあれたゝ一  
つもてる鏡をとりもちて幣とまつると荒沙此八百合に沈めあひ此むを神  
御心にうけひりまちはひもまるとうづなはま恵もまると波風のおどなく  
なごみ鏡なす海の面をこどもなくい渡りしとふ其灘のそこといへども其  
水脈のおゝとさきなども春霞見のおほゝしく古へも遠く隔てぬ住の江此浦

反歌

ふることにかけ此よろしく夕月のかいみも霞む水脈にまづさぬ

遅日

うち和し霞む野寺に雲雀まふ空うちまもり時守もまちやわびぬる雲雀も



舞ひやつうるゝ舞ひつかれ今うかつらむまぢわびて今うつくらむ鐘の音  
のひいさと共になく聲もきえてくるれどうす雲に猶かげるひて夕日かげ  
かつとしもなく暮れむともなし

野遊

いざ子ども野べに遊びて手ささびふ春の日ぐらしつばなぬき蔭も折らむ  
董つみつくしもそへむ言ははもかふみあつみてかへり路のうらやみなし  
あもるもちにせむ

同

花どりの聲なつうしみ立出て野邊見わさせバ櫻色に霞をはてつゝなく鳥  
のありかもえれまたつ鳥此かふもわうねどゆくまゝに花ぞさきける咲く  
花をさしてたつらむさく花枝とめてなくらむたつ鳥の方をえるべになく  
鳥此聲をたのみお道のわたりなむ

春夕自横濱歸過高島町作歌

ゆき通ふ大路へだてゝあひむきてたつる高き屋さしなみてつくる廂を咲  
きおほふ櫻此もどに植そへてにはひかはせる丹つゝじのにつかふ面わ山

吹の靡く姿此うちまなへうかれ女がとも契りつる夕ぐれたのみ高き屋に  
まつの庇此久しかるらむ

山吹

春深く霞む小川此遠近に小舟うけまゑさばしりて下る若鮎のおちくるを  
待ちてや釣れるよりくる菰もりてや汲める川中をどめてさでさせ川岸菰  
よきて棹させ今をせとさきてかゝれる山吹此枝やをれなむ花やちりなむ

松上藤

あしびき此山此老松まつはれる梢の藤の春ふかく花さく見れば白かるの  
かしらの雪と紫のはつもどゆひと男さび色なつうしく翁さびにはひゆか  
しくたちまじり若がへるあり老そふもあり

山霞

あづさゆみ春さりくれバ心なき山となきしみぬの山をさそ此山も妹が  
ため靡けどうらみ月此たゆ逃げよといひし山々もかくなるらしもうらう  
らと霞みわたれる中空のいづべに迹なし白雲此いづらになびくおほし  
くたどられぬなる朝夕にめなれし山の箱根あしむら



暮春

鶯のちる花よりも早くよりなきてわびぬるさく花のゆく春よりも先だち  
てちりて過にき身をつみて今ぞ知らるゝちる花のうさを思へやゆく春の  
別おもへやそこゆゑにかねてなきけむかねてちりけむ

田家首夏

櫻がり梅見此友がいぶせかる宿とあなづり草ふかき門の畑中足ふみし麥  
生の跡も道わけしうつ木此垣も深緑青葉にまげり眞白に花にうづもれ見  
わたしの清く涼しく青盛まきなすなせり白金にかくめるなせりふせ屋と  
て思ひかどすな鄙のすまひも

田家卯花

朝まだき畔の小艸此露ふみて吾どめゆけば小針もち利鎌手にざり賤のを  
がどもつれだちて時ならせみ雪はざれお菅笠にみだりてちらし蕪ぐつあ  
はらゝにかけて来る方をふりさけ見れば垣つゝさう此花さけり畑中此里

待郭公

ほどゝぎを來なく五月の初聲をさゝ違へじと耳たてゝ空まもりつゝ月に

まら雨にまのびて宵寐せばよひあやなかむ朝いせば朝やなかむと端居し  
て高嶺にむかひ外に出て天雲あふぎいたづらにながめのみして心空なる

始聞郭公

う月たち夏のはじめの郭公なく音どもしみまらちつけてきく人ごとに語り  
つぎいひつぐなべに一里に一聲なけば七里もきあえ渡らむ一聲を十里に  
きかばはた里もつぎてあさらむまかなれば一日のうち八十聲になりて  
きあえむ百里につゝへてきかむ今朝の一聲

反歌

ほどゝぎを今朝の初音を人づてにきゝつぐ里もいくらなるらむ

謝山本退齋贈葵草作歌

水鳥のかもの御神を年のはにいつきまつらす時にしもあふひ此艸のいか  
なりし契なるらむいつよりの例なるらむ宮人のうづにさゝしめ玉だれの  
をまにとりかけ世にはえてなぐはしきかもそこをしもおむかしみつゝ鳥  
がなく吾孀にしての園あうゑおふまといへど稀ああるものとしきくを百  
木もる山本我背がみやびたる心にとめてまぎえてぞ贈らせりけむはしき



やし葵の艸の諸かつらかけてまぬばむ打日さま都の手振あせがみやびを

茶摘

山さちもかのがさちく海さちもかのがさちく海山にいりたつわざの  
荒男らがならはしなるを春すぎて夏さりくれのものふれ八十うぢ山お  
まづの女がかまどりもち弱肩に禪とりかけむれつめる名くはし木のめ  
いたづけるいそはく見ればかよむる女のともおのがさちく

夕顔

里はなれ小屋のまきやに世を去のぶかくれ妻かも露ふかくうちまぬるら  
む葉がくれに打なびくらむうらぶる姿ゆかしなま草の隈をよすがに  
あら垣のあれまをとめて見いだすや誰まの妹か夕顔の花

鶺鴒川

夏川の夕やみまちて瀬はやしと上つ瀬くだり瀬よわしと下つ瀬のぼり中  
つ瀬のみをさしただめ舟うけてあさりすれど早き瀬に魚やのぼれる弱  
き瀬に魚やひそめるみなれ禪さしも定めず島つどり鶺鴒がともの篝火の  
かげのみだれのかざりまられず

梅雨

卯月はて五月たちしゆ日のみ影一日てれバ二日はも雨雲おほひ月かげ  
の二夜てれバ三夜はも雨づつみして大空もくもりふさがりかきくらし  
いぶせかりけりよつの時いつのあれども日ならべてかくのみからに年の  
端に此ひと月の長しとあもほゆ

梅雨久

世になべて時にうつれバ髪はも截りて短く羽織はもたけの長かる法の師  
のころも短くわらはべ此袂ながうる長かるもさはりなきかも短きがたよ  
りよきかも五月雨の雨の長さの物みなにまゆりてさはりなす事にさより  
あしかり短くてありなむものを昔より長くぞふれる漢人此ゆひだれ髪も  
ながしとも長くいあれどさみだれなくに

螢

あらびぬる神此かイヤき戀ひわぶる人の思ひに早くよりさぐへらるれど  
夏の夜をてらす螢のかイヤけど厭はれもせまおもひにまどふともなく置  
く露を玉と光らせ涼しさをそへてめでられ竹此はの上をも通ひ艸の葉の



末にも宿り雨風になびきまゝがひおのが身を心のまゝにまうせゝらむ

角力

まきむく此珠城の宮のふることや例なるらむまをらを此ままひのとも  
其御世の野見此宿禰此名々はしきかち名どめむと大庭をくるはらゝかし  
くるはや此まけ名おはじとさしなみてはつ手とらまくたちなみてぬき手  
とらまくわらそふらしも

反歌

事しあらばみ楯とならむ手力をめしあひまがにままひつがふも

明治九年五月於横濱内田町回向院出張所之地設相撲之伎

場及時細雨經旬因乃作歌

久方の空曇りなくはるゝ日を日數かざりて益良男のままひのするを五月  
雨此時にしなればあま此日のつがひよばひてくるゝまで巷めぐれど今日  
此日の日和さのみて曉ゆ櫓おのれどわけゆけは其日又ふり暮れゆけは其  
夜又ふり鼓うちつとめいそしみ晴間まち空あふぎつゝさもらへどさもら  
ひうねてふりつゝ五月の雨此長きおはすまひ此ともゝままひうぬらむ

船中納涼

夏の日此あつさ厭ひて暮まちて舟此りまればさしそはるまをもうなひて  
うちよせる波も静々くふく風お暑さの消えぬゆく水に夏の流れぬ夕月も  
かげすみぬらむみつ汐此さしてままむよる浪のかけ此よるしも河上の  
とよはゝ雲お入日さまなり

新竹

たまちはふ神此御櫛のかき葉より筈ありて木おもあら老草おもあら老竹  
のよ此なうらにわれど本草もる靈もそふらむくゝ此ち此くゝどたゞぢち  
五十猛此たけくいさまし年此はおおひそはりつゝ投げうてし其つまぐし  
此ゆづま若竹

同

かきおもる軒端をぐらくいや日けに茂りもゆくか竹の子の苔路をやぶり  
龍神此角どつちざり蘆さつ此おどがひとおひ豊けしな青葉さしそひいさ  
ましな高くさけぢち龍神此雲をま此きてあしたつに船くらへむ庭此若竹

水風如秋



水清き池此みぎはゆく水の暑さ流してよる浪のまじし誘ふさはれ  
て秋や通へる朝露のこなきにゆらぎ夕露のおもだかあちりふく風を目に  
さへ見せて秋やかよへる

夏人事

翁はもあらめこになひおむなはもかさま取りもちあらめこに畑つものつ  
みかさまに枝豆いれて妹と背と夜と晝とに商かへて市路にひさを朝露此  
ひぬまど急ぎ夜露おぬれそぼちつゝ其身さへかれまばまじと世わらりに  
露此命をかけてうるらむ

草花

やよ子ども埴釜やつあり一つうゑ二くさうつし三くさはり五くさは根こじ  
七くさを今日のつごへむ明日のまた野邊にあさりてひと草の何をうゑま  
し残るはにべに

葬花

おく露のひるまもまさははかなくもまばむものから今日さくのにほひら  
つれど明日さくの色ふゝみもち日ならべていやつごゝにさきかはる朝

顔此花はなちて結べる種をつみとりてまきてしかるバ時まちて生ひて  
墓はへくる年もまさくる年もくる朝も又来る朝もつぎにいやさきか  
はる朝顔此花

月夜宿於宮根驛步關外而作歌

天の下四方此國にたゝなはる山のあれども寇まもる關のあれどもとりよ  
ろふ箱根の關の水海をうなねとたゝへ磐むらを御楯とかくまみ山木のみ  
垣とめぐりも此ゝふの守部がともいにかめしくめで守ればたねらはむ  
あさいよるともたばうらむやつあありともかしてみておゆべからぬを久  
方此雲井の月もぬば玉のよる此まもりと御楯を磐むらちちをみ垣なま  
こぬれこどくうなねなす海とほむるくい照りわされり

反歌

静み代の關屋つかふるも此ゝふ此やまいせむ夜も月のもるらむ

對月思昔

ひさうさ此月をし見れば千里まで心ゆけとゆくささ此こといあられを  
うつし身のかなしきことい今宵ものゝうつりゆけるも明日ことのうつり



かはるもかねて去る人のあらしな歌えのびことまのびしてあし方を思ひつゞけてゆく先此去られぬあどの思ひやみなむ

鶉

夕露に千草匂へる秋の野お何をうづらぞ穂薄のまなへうらぶれ眞萩のたり枝去たくまごまごひお妻や尋ぬるまなさに子らやよびぬる聲哀なり

夜雁

さよ中に獨ねざめて山寺此鐘此ひいき時守此つゞみ此音をおよびをり數へてわれバ鐘此おる鼓此音おうちまじり雁ぞなくなる時のや、丑此みつなり鳴き渡る雲井此雁のいくつ來ぬらむ

澗底鹿

松此風ながるゝ水の遠近お聲かはしつゝなけばおく夜はのさを鹿こなたなる聲此さかれバかなさなる聲もかそけくともくゝに遠くぞなれるあくがるゝ心まどひお吾戀ふる妻やこたふと山彦のひいき此まにま谷陰お深くやいれるわけやまごへる

明治七年之秋相將吉岡信之欲聽鹿鳴宿筥根山中宮下之旅

亭深夜聽其聲相共作歌

あしおらや箱根此おくの八重たゝむ山此くまゝ所えて男鹿やおもる木蔭どめ女鹿やまめるはなれむ中を隔てゝおちたぎつくぐる谷川魚ならバ浪わけゆかむ鳥ならバ羽ぶきおえむとこちゝにわひむきたちて秋此夜の長きよまごら思ひわびなきかはせらむ聲あはれなり

紅葉

露霜おそめて色こく秋山おにはへる紅葉つひお吹く風やちらさむちらまらむつらさ思へバ手をらむとかけおのよれどたわめむとまづ枝のどれど此ちにこむ人やうらみむ恨むらむ歎おもへバたゆたひてどりてハ秋しみおきてハ秋しみ

葛紅葉

うちわふしひとつ緑おたちつゝく山松が枝の上つ枝のこぞめまつはり下つえのうまぞめまどひむらゝにみるめわうちてはふ葛のもみづる色もかのがむきゝ

菊



とこしへにありつゝわさる仙人のうゑけむ種ときく此花此めづ花のれど  
かなる御代長月をわが時ときそひさきいで露おけどまばまどにはひ霜ふ  
れどたへてかをれりうべなくそこをたへて千五百秋長五百秋れため  
しふもかけてことほげ菊のめづ花

近來東京郭駝之輩每歲秋時培養菊花各自競工連叢架欄以  
開縱觀至如其名花乃揭列名牌以表絕品焉於此都下士女莫  
不往觀者也以此流行施迨村落每秋好事者培養菊花化工絶  
艶殆勝都下也余一日賞看家々菊花乃作此歌

おきそはる露霜たへてさきにはふかはらよもぎの年はあめでもかれ世  
を名々はしく世にさおえぬる園おどに所せきまでめもあやあさき此盛の  
あかるたへてるさへ此絹のみりさねたゝめるなして紅のこぞめのまゝに  
あら染此うを色まじりゆひはさ此むらで此うへにさゝらがた錦ひきはへ  
千五百むらにはへる見ればうづまさと名をたばるまで大宮あたてまたし  
けむ古おどにかけてぞ思ふ漢服部吳此服部が機のにしごり

夜袴衣

あきじありふさへせむとて吾背子がけなぐき旅おえぬらむ山此かけ道  
たどるらむ野路の細道いづつきを思ひやりつゝ小夜衣打合まればどる槌  
此手もたゆるらむおぼら屋も身の寒からむ草枕假ねの床も霜やさゆらむ

山時雨

うき雲の足がら山の谷かげの民の窳此うを烟たつとあもへばたなびきて  
雲ぞおはへる日此みかげてらまど見ればかきくらし雨のふり出でいつの  
どいつねもまかねど冬くれバふく風はやみ時じくに時雨の雨此足柄此山

霧中時雨

はれくもる冬のならひとさしてゆく箱根此山もかつかくれかつあらはれ  
て伊豆の島の夕日かぎるひ雨降嶺のこれるを中空お雲かきくらし  
驟路の並松さわぎ海づらのよる浪とよみ見るがうちに吹く風はやみこよ  
ろぎ此磯山まぐれ沖あいであけり

残紅葉

秋まらしわぎへの楓くれなゐに匂ふ盛此上つ枝を鳥ふみちらし下つ枝を  
人とりからし中つ枝お残る紅葉も朝さればおく霜さやぎ夕さればふく風



寒みおのづからかれてやちれるたへがさみくちてやおつる今のしも數ふ  
ばかりになるがともしき

落葉浮水

つぬさはふ磐此はさま水よどむ谷の川くま河隈におちなづさひはさまに  
おちふらばひ浪のむたなぐれもあへせ風のむたなびきもはてせ色あせせ  
たよふ紅葉ことならばちらで梢にかくならざらむ

埋火

冬ごもる窓の埋火かきかこし炭さしそへて朝さらせ木の芽をにたて夕さ  
らず酒あさゝめてのむからに思をはるけくむからに心をやりてさく花此  
にはひゆかしく鶯の聲なつかしく埋火のうもれぬる身も春ぞまゐるゝ

反歌

ふゆながらさむさわさるゝ埋火あまだきこゝろの花になりぬる

同

冬ごもり春まつ窓此埋火此炭の櫻木をりどれる花の梅が枝其炭の火桶の  
もとに其枝を花瓶にさしはの氣にとくさかせむと水させる枝のまぶしく

炭させる灰のましろく櫻木の炭こそ花此色になりけれ

待雪

たなぐもり雪げの空をうちわたしふりさけ見れば峯まろき箱根の山の昨  
日かもふりうづみけむ雲かゝる雨降の山の今日かもふり積るらむくらを  
かみ所なわきそ此里もつぎてふらさば遠くとも七日ばかりう近からば五  
日の程うほどのあらむな

雪中獸

たなぐもり雪ふりくれバかどまもる家たちはなれうかれ出て犬の遊べり  
埋火のもどたちさらせはひかくれ猫のねぶれりかのもくさか異なれど  
うかるゝもふしねぶれるも此雪にとくる心の一つなるらむ

旅中歳暮

みな人のよはひをそへてゆくとしの跡をとめぬけならべて旅路のゆけ  
と世にのこせあともとめせ名々はしき山のこゆれとまはしき川の渡  
れどかさいづるふみのつたなし詠みいづる歌のはえなしかひもなく又一  
年をいたづらに身おぞとめむ旅のけにして



歳暮市

倉玉の年たちかへりこむ春のまけのわやしり海より持ちこせる物山より  
とりおせる物ちまゝ狭くみてならべ門たかくつみたらはし伊勢の海の常  
世の波のまき浪にきよる海老麻呂みちのく此あるみの波の荒波に靡くえ  
びまゆひき渡す千尋まゆ繩とりかさる八十のものぐささちものゝどりよ  
ろへりどほぎとよもしやぎくるほしてよびさそひ賣りのまゝみにたなそ  
あそさやらにうちていさむ市人

冬晴彌旬偶對佳雨喜而作歌

冬ごもる戸牖のさかひ緩ぶまで物らかわきてさへ長くま日てる空ふ雲ま  
よひ雨あばれきぬたしくにうるひわさらな日ならべて雨此ふらねば夜  
ならべて風いふかねどうらやましく誰ういをねむも長にささうあやさむ  
かしこきや火のかぐつちの神のみあらび

冬田家

木葉ちる風をみにまゆいそはきて買またすといとなみて冬ごもりまど眞  
鍬うち畑の物はり利鎌もちたなつ物かり門ふつみ背戸にとりいれ山柿を

糸にぬきされ大根を繩にゆひなし軒にかけ庭につりはしおのがじし心つ  
くせるいたづさもまきて見えけり冬がれの宿

戀

あのごろの世の諺か我どめ子のよづく心の早きをばわせとぞいへる遅き  
をばなくとぞいへるおくてはもおだひまぎなむわせはもさかしまぎなむ  
なか手こそほどよかるらめ秋の田の穂むさ此よれるかゝよりに吾のなか  
てになびきよりなむ

見戀

沖の藻のへによりくれどへつ波の沖にかへせばかくよれど淵水のぞめど  
かくよれど岸にたてれど浪のむたうかびふらばひ風のむた亂れたいよひ  
よりもあはずなびきもいねまうつたへにわが思ふ妹こひつゝかあらむ

聞戀

わがさゝしさまによく似て人のいふおとによくあてもみぢ葉の匂へる少  
女さく花のうるはしき妹うるはしくなさけありなむつらからず思ひかは  
さな心さへ姿かゝちのさまあよく似て



待戀

はしきやし君待酒此みさかなにまけせむもの何よりむ餓さをどさだ  
をのみ此まなけさの貝ながらあつものになし餓のみ此多々さの貝はなち  
なままになしてとりそへし此くちひくはじかみのからくもあるか夜の  
くだちゆく

待空戀

ぬばたまの夜のくだちゆく歎きつゝまぢりあかさむ恨みつゝ獨りねなむ  
此ゆふべ思ひたのみし占とひものりたがひけむ蛛のいもかけたがへけむ  
かけまてし軒端に月の影うらぶさぬ

絶戀

こひきいへば耳にたやまし魚にあらばみるめもやすし青淵にのどかにま  
づき白波にゆたに遊ばひ龍の門に此ぼらふ時に末遂にあふせもあらむを  
すみはてぬ淺川わらり末とげぬ心をはしてふるひわびつれなき人におひ  
にくるしも

忘戀

紅のうつろひやましく誰が袖のにはひゆかしみあつぶま思ひかさねし麻  
ぶまま心さやげりま玉手の玉手まきねしさねどこいよしやわたへずま玉  
手のよしやかさすもうつりやまき心だおかせ吾もわまれむ

隱戀

さき竹の青ふし垣植松のさし枝めぐるはなれやの背戸の小川此川岸に  
たてる妹はも朝夕にさよるさゝ波夕まはにさよるまき波まき浪のまきま  
く思ひま此びあふ中なるらしも音たてば人知りぬべみ川舟のもそろく  
にさゝ波のよりあゝくどうらぶれてたちやまつらむ誰がかくし妻

寄山戀

武藏野の大野の末に白雲のをちにさかりて青雲此こちにへなりて筑波山  
ふたなみたゝし箱根山二子嶺たゝし二ならびそひたつ中に秩父峯もむら  
がれゝども甲斐がねもたゝなはれどもおのもくゝひとりたゝせり獨ある  
我身にかけてながめつゝ思へばあはれちゝぶ甲斐がね

寄春風戀

さ夜ふけてわがまつ人のうちさやぐさぬのかをりどうちつけお人ごのめ



ふも細殿のうちはし渡りわた殿此をまゆらがして所せきつばねならびを  
けさやかに梅が香まめてかよふ春風

反歌

まつ人のきぬのさやぎのそれならで梅が香さそふ夜はの春かせ

寄花戀

春の日の比どにしおれば八重おさね七重たゝみてふゝみもつ花此下ひも  
櫻の今日うとくらむ山吹の明日うとくらむたへの袴七重さるともまづは  
た帯八重むすぶともどにしも妹が心しどけなむ

寄草戀

夏まけて菅の子もたり秋まけて薄のはらむ穂薄や秋になびける玉菅や夏  
になびける玉菅のすがくし妹穂薄のうらわかき子らいつらに時のさ  
ふるをいつなびくらむ

寄魚戀

琴上に来ぬる影姫蘇我の臣のくなふれをも現身此いぬち死ぬまでねな  
さおひまぬばせりけり此臣此名にかふ鮎も見のさま此ま魚なれどみの

色の真黒とよべどまがしゝのうましくしおまばうましめもめでをまどふ  
うましめしめで厭はじくなふれまこをど人のいひにいふとも

寄琴戀

うつくしむたがかくし妻世にまのお身の里まみりかりそめにゆへるあし  
垣あづまやのまやもゆるしくあしたあにいよせまがさ夕べあにいよせ  
とりなでなつかしき手馴の琴のつま音此きこゆなり蘆垣や今うたふらむ  
東屋や今かあづらむなつかしき手馴の琴のつま音の聞ゆなり

悼藤澤驛長堀内悠久之男久文之歌

花にかぜ月に村雲はかあかる世のおとこさのまりつゝも驚かれけり里人  
の末たのもしみかひつがむ驛の長と堀内のあせがわくごの月ならばよご  
もる影花ならばかくあるにはひ真盛の時をもまたまふく風にさそはれお  
けむ浮雲に隠るひあけむはかなさを何ふたどへむ悲しさを何にたぐへむ  
あはれ世の花にふく風月に村雲

足立氏令萱千代子齡六十有四平生詠歌能入其奥矣自從明  
治二年之夏至于今茲九年之秋老備臥病四體不適長女恒子



看護之侍其久病口不言勞孝養之行至矣盡矣至七月母病篤醫藥無驗竟至七日瞑矣余聞恒子事母之行固爲可感矣而恒子受歌學於母亦能詠歌故余作追悼之歌贈之

くはしめのあともくはしくさかしめの後もさかしくをしへけむ心おきて  
ならはし、業らさしくあどとめていよ、いそしみ末遠くいよ、守らひ  
かき残す筆の林にちりうせぬ言葉の花とどおしへに世ふぞ薫らむうつし  
身のいぬちすくともまかり路のうしろやまけむ思ひ残まな

安政三年秋八月廿五日至夜烈風暴雨海水激怒巨艦爲之漂

着神奈川海濱於此將以衆人之力泛之於海中聞有死傷人焉

悲悼作歌

武藏の海橋の崎神奈川の驛のへたふ嵐ふさうけさ、いはし波われてうち  
よしよりし大船を沖にいざせと賤の男のはやりをつとひやいつ子のまを  
らむれて聲きそひ力つくしてとりつくる船の艦舳はねりそをしひき此  
まゝみに毛綱をし捲のきはひにいまきひく力車は羽車のはねをれさけて  
驚ける心たゆみによりもどる車にひかれはねかへる綱にうされてまるび

ふしおるぶす中にかきうぞふこ、此の人此な、たりの痛手をかひて二人  
はも命まぐとふあはれ其賤此はやりをわはれ其賤のまをらわさつみの  
神や守らぬ手力雄此神や助けぬ羽車此めぐりまぐとも年月にかけてまの  
びて大船の思ひたのみし親や妻の思ひ此きつあたゆる世あらめや

川上竹子者語余曰岩龜樓遊女喜遊者性與洋客不肯同枕席

焉雖然自願典身也詠歌一首而絕命矣真可憐之者也因相俱

作歌

勝牡鹿此真間の手兒名蘆のや此菟名日處女がよりさそひ妻どひするをい  
ぶせみといとへる時に身うせにしたぐひいわれどさらに今ありける事を  
きけバ又まして悲しき月艸のうつるならひをぬけ出てさく女郎花いろこ  
そのあどに句へれさまおそいたはれて見ゆれうるはしき心おきてに外國  
此人のめでに折られじとそむきあらそひ靡かじといひままへれどつれ  
もなくさそへる風にせむまべ此たづきをまら老劍太刀身をしもさして置  
く露と命さえけむ河竹の流ふまづみ世中のうき瀬まぐひし親の猶ながら  
へぬるうゆく末をたのみ契れる夫のまたあらまありしか夫あらばいかに



玄ぬばむ親あらばいかに歎かむ命おもかへぬ操らうなひ處女手兒名ごと  
もにかくれざるらむ

明治九年九月廿二日夜於鶴見村鐵道有人竊伏俟列車奔轉  
身摧於轍跡死矣聞此憐之乃作歌

樂しきを誰かいはむ悲しきを誰うほりせむ悲しかる極まといふ世の  
人のみまかるなるを天とぶや鶴見此里のくろがねの道にこやりてはしり  
くる車にひうれ心からみまうりぬとふいうさまに思ひまどひし大御世の  
さかゆくさかり里の名の千代よぶ鶴見長からむよはひこのみてまさかり  
の時を仰ぎてかにかくにうさふたへなば樂しきに又あはじやの悲しけく  
命をてけむあはれ其人

明治丙子五月客遊伊豆登修禪寺境內有大將軍源賴家卿之  
古塔土俗相傳有斷吉凶必拜墳前捧持古塔而定疑於上下云  
因作歌

薪こる鎌倉此城おまつりごとまをし給ひし源のいくさの君のあひる湯此  
まゐるしも見えず腹ぐるさまをが爲にみうせけむ靈をどめて世の人に

さきは、まらむ此君此かくつさ此上に玉なしてすゑさる石のい此ること  
なりぬる人の手にとればかやすくあがり願ふ事ならざる人の手にとれば  
おもくあがら老をこそをしも人のたのみて物ごとになるもならぬもはしり  
湯此はやさまゐるしをあふぎてぞくる

登熱海温泉寺門內有古松一株其大合抱餘也傳言萬里小路  
藤房卿遁世子此處而手植之木也同作歌

そにかみを思へば遠く其かけをあふげば高し藤はら此君の命此大みかど  
おもほしめせる真心此ねざしかさめてさかゆかむ御世此ためしふいはひ  
まし植ましにけむ末長くたてる庭松末遠く繁る老松いや高ふやつ枝さち  
そひいやひろに下枝あざりて深緑さかえゆくかもほつ枝のたてりくも  
まづ枝此たわみくも手束杖腰にたがねて老の命さきくしあらばたどり  
つゝ又も見にこむ昔まのびて

伊勢山招魂祭碑之歌

隼人のさつまた此國のまどむけふ命まぐとふ壯夫のいさをたゝて石文に  
いむかひ茂れば磯邊の波の音とよみ山への松風騒ぐありし世お挑み



たゞかひ田原坂さゝふを崩し木留のどまらき進み木の葉むらむらしく寇  
を木枯とうち散らしけむ其音を浪もよするか其聲を風もたつるかみも  
らず言もかはさぬ我だも心さまねしそこし思へば

風

時じくに吹ちらせれば寇としも恨みらるれどちらせればちらまふく  
誘へまば誘ふまふく花紅葉むつまつはり目に見えぬ風の姿を白妙に  
なしてを靡く紅に染めてぞみまゐる吹ちらしつれなき風や思ふどちなる

巖

おちたぎちくたる波まにさしいづるみ谷のいははかのづから枝さしきげ  
く一つ松うづにさまなしさをがせかつらどかゝり年を経てかささる昔  
に深緑むつの位の衣きにけり

望箱根山作歌

足がらや宮根の山北むら山の中おぬけ出てそゝりたち秀たる山北駒が嶽  
二子山神ろぞ此遠つ神世に國つちをうましゝ時に二子にうましつらむか  
駒たてゝのぼりましゝ古へゆ名におひ來され其世よりふめぐこいしき

其世よりゆけどさかしきたゝなはるかさしは山北駒が嶽ふた子山

反歌

名におへる駒ふみどめてのぼりけむ神世ながらやあゝしいは山  
神世よりいつきて雲のま床おほふふままにつゝむふたと山かも

浴遊熱海有時登日金山回望作歌

いづくし伊豆此國の影友の荒海たゝへ背面の磐山そゝりさかしかる嶺  
たちついきこいしかる坂をれめぐりたゝなはる中にぬけ出し久堅此日金  
の山お此ぼりたち高嶺もどほり天此原あふきて見れば大海原ふりさけ見  
れば山のまゆ山のこちく國の十國まの五島まつぶさに見さけられけ  
り見わさしのくはしき山ぞ見はらしのよろしき山ぞ日金の山の

宮根山中眺望有感作歌

玉くしげ宮根の山路かりのぼりなづさひくれれば岩ばしりかつる谷川上つ  
瀬の雲ぞかりぬる下つ瀬の雲ぞなぐるゝ水せきてかりぬる雲う雲ちらし  
流るゝ水う浪のまに雲もたいよひ雲此まに浪もみざれて雲水の定めなき  
世をよはなましあら山中お見せおけるかも



詠横濱

賑へる羨みがてり横濱にとひこむ人の日かいてふ星にあふる日わか星の  
曉かきて夕づつの空にてるまでおと國の人のことくとりよそひ妻子ら  
ひきつれ馬にのり車おれりて天の星みまをつらなみたはれあをびおもし  
るさ日ぞ此はしの日

題横濱港圖之歌

大御代のみさかえまろく久良伎海横濱の津のいりかはる瀬戸もせきまで  
朝風お真帆ひきあげ夕潮に碇おろして時じくに出れば來入りつらなめる  
西のからふねありみどりゑぐまろしの白旗の花となびかひ帆檣の林と  
ついく商じてる民のたよりと五とあろえらびおかせるおちくの羨みな  
がらかくし榮えむ

宮根歸途至酒匂川之渡逢風雨暴烈船中作歌

風まじり雨ふりまざり水濁り水沫さかまきみかさそふ酒匂のわさり棹と  
りにさへたる子等が漕におげどまどきにまどく沖つ波いたくな立ちを邊  
つ波いよくなよりを船たよへり

東京歸路至川崎之波而作歌

物ごどに流るゝ水のとこはりなきのまれなり艸枕いそぐ旅路おゆく川  
の渡にくればおなよよりゆく舟あらまかなよよりくる船まで八尋くみ  
たゝむ筏の八十結ゆへる葛根のうちはへて長くつらねて川中を流しくど  
せバまよせして乗りしかなよも船長の棹さしよどめ猶まよせけり

遊宮根而浴堂島之温泉亦日看白糸瀧作歌

級たてる宮根の奥に山とよめ谷ひかするままじき音をもたてまあふ  
き見る木の根めぐりて水清くかちくる瀧の白糸の名に流れつゝ岩のまに  
ましろに靡き磐の上にかあをによられさくなぶらちれるみなわの青玉と  
磐根にまろびえら玉と磐まに浮ぶまが玉をひりひあつめてまが糸にぬく  
よしもがも御統の五百箇集ひを家づとあせむ

宿金澤東屋看旅人遊歩作歌

武藏の海金澤の崎海山のみらくともしみ見まくほりくる人たえまわくて  
らが雨降嶺出たち處女らが江の島かへり其ともいひ來遊べり壯夫が富  
士の嶺のぼり風流士が鎌倉めぐり其ともいひ訪來遊べり商人北浦賀路通ひ



やみ人の宮根の湯あみ其ども、問ひ來遊べり横濱ゆ横須賀にゆく外つ國  
の人もとひ來てみかほれる金澤の崎さきくもあるかも

遊宮根温泉歌三首

あしがらや宮根の山の大きをふりかけ樋を渡しさを、あゝまゝ樋をわさせ  
こちく、にひくや出湯此下樋なま木此根もどほしかけひなを磐根めぐら  
し八街に道ふみわくれ雲うづむみ谷の底も霧こむるいはは此奥も家つ鳥  
かけの音きこえ門まもる犬の聲して家むらしく旅のやどりにもろく、此  
やもひさままどあみ人もまうる湯ぶねのみちたへたり

あしがらや箱根の山、山高み朝雲おほひ山深み夕ざりかをり晝はも日此  
くれはやし夜はも夜のあくるおそし時むくに雨もふれ、ど時なくに日も  
てらせれば家むらしき住む人たえず湯あみする旅人つきせ空はるけ日を  
てらせるゝまなつ彦神のいぶきどはしり湯此やもひくまゝ、少彦名神の  
御靈ぞ神み靈あふごふりたちいぶせかるやもひ拂はなまなとべのいぶき  
に拂ふ雲霧のごと

まなたてる箱根のみ坂磐ふみて此ぼるゝかさし雲うづむ谷の荒川さくな

たり落るゝ早しかくゆけバゆあまをる屋お酒みつぎうさ遊ぼくかくゆ  
けバ磐のかけ路を重荷おひいきづきあへぐよそながらいほりて見ればた  
ぬしきもきはみゝあら老若しきも限ゝあら老世中のうき瀬にかちてやま  
き瀬おのぼるゝかさしたぬしきに流れてあらばうき瀬おゝかちやまから  
む人の上もたぐへらまけり宮根山のぼるかけ道くぐる谷川

滞留熱海之旅舍浴温泉乃作歌

はしり湯此熱海の浦回鮪つると海士人さわぐ沙やくと里人きやふ釣舟の  
たまよふやもひやく沙此沙のからき痛みもやみ人の湯あみてあらバ海士  
を舟まきかへりつき沙煙かきけてるごと夕なまき此海の面のはれ渡るらむ

明治九年五月浴修禪寺温泉焉其主淺羽氏請以余之歌爲遍

額故應索作歌

くしの神常世にいまを磐たゝま少御神此現身に御靈さきはひいく藥わさ  
て出湯をたびまねくおりかづきなむいぶせかるおもひいはるけ結ぼるゝ  
やもひのさめてありつゝもへなむ齡いひさく

詠東京



寶田や千代田の千五百萬秋まらま都の人草にかふしかへむどかねてゆも  
天つゆだねを神此世にまきやあきけむ足穂なし生ふる人草稻葉なしまげ  
る家むら武藏野の大野の原も八巻に所せきまで立ちつゝささかゆくまに  
ま久方の天つ齋庭とみあらかを高しりまして雲むとなりぬ

滯宿木賀龜屋浴温泉且聞水聲作歌並短歌

足柄や箱根のみ谷さくなたりたぎつ早川水の音此清みさやけを洗はねど  
心をすまし滌ぐねど耳を洗ひてうしとさく事もあらねば厭はしと見る物  
もなく打むかぶ心むなしく世中のかもひいたえぬ旅此宿りあ

反歌

水の音の耳にのこらば塵の世にまじるこゝろをのちもあらはむ

早晨過高嶋町作歌

あけわさる空まらみゆき夜をのびを燈火うまき高き屋のおぼしまにたち  
うかれぬ見かくりまなりゆく人のかへり見すなりあなふもいふあど  
はてずかなふも思ひつくせずさぬくの心まどひふ今いどて乗れる車  
のひきわかれけむ

福住正兄新築煉瓦石之屋作歌贈之

まめ國此書をひな木ふまめ神の道を柱と心さしたて、學びて何事もひろ  
く太まりことくによきことなりとりとりつくる妻木となしてむな木さへ  
へ柱たまけて西國の今のさまふいうつまなるらむ

赴東京於停車場待來車乃作歌

ささ艸のみつばよつ葉にたて隔て造る廣屋の御柱にかけてめぐらま時は  
かりあふぎまもらひ上の等つばねあさいり中の等つばねあなみる下の等  
つばね此外あむ内外せくあぐらによりて車まつ心の同じ時はかりささみ  
ささみのまなわまども

某來請題娼妓貸座鋪之歌詠之贈之

うつりゆく月日もまらまよ此中のかもひも忘れ驚け聲うちかをり胡蝶の  
袖うちかへし常とはにゆゑにのどけき高き屋に玉けさへげて木の芽ふて  
もちくる少女をどめはも櫻のにはひ木の芽はも山吹の色みればまづ誰も  
心此春になるらむ

遊某宅得揚弓場題席上作歌



うちなびく少女がともい靡かへどなびきもはて老よりくれぱよら老しも  
あらでくる人の心ひくとふ放つ矢の拾ひてあさへたかく弓のすゝめてあさ  
へさね床のあさはぬかもよさかし處女等

過横濱異人館作歌

武藏の海横濱の津のまゐる來ぬる異國人此わけてすむ町も八十町やちまよ  
についく高屋此庭ひろき厨を見ればゐの子の垣つに放ち牛の抗うちつな  
ぎ庭鳥のふせごにかへり生膚をたちて煮らゆり逆刺にはぎて焼かゆり朝  
なのあへ夕け此まけおまが親をどらくをまらにまが子をどらくをまらふ  
遊ばひをるよ鳥もけものも

慰花鳥茶屋一見馴飼籠中小諸鳥而作歌

うらくと此とけき春も花鳥の花もなかな老籠にかはれいぶせかれども  
天ゆかば大鳥とらむ地ゆかば毛物はみなむわやふかるおどを思へば山鳥  
も尾上へだてまな柱尾ゆきあへまら羽鶴はぬうちかはし吾が羽に風の  
ふくとも汝が羽に風のあてじとめをむつび夜もふまらむうづら鳥はひか  
がむとも庭雀うづくまるとも庭つ鳥かけら老とてもうらやみて雲井な戀

ひそ雲雀なす思ひあがりてよの中にたちてつまづく人し多しも

慶運寺園池歌

梁我上人者性有烟霞癖新築小庭搬土爲山盤地爲池植嘉卉  
壘巖石以成山水招雅客詠詩歌余亦與其招爲乃作長短二章  
以贊之時文久紀元之夏六月二十日也

おの園の世此つねなら老くしの神とて世にいままいはた、ま少御神此大  
巳貴神の命と大御國つくらせりけるみまををしたばりましけむ水をやり  
土をはこびてよろしなへなれるを見ればおほしき心もはるけ結ぶる、  
おもひもとけぬたぬしさに身もまがくし池水のかれむかはせたて石  
のたちもとほらせそひ懸此そひなづさはせ常磐木此とはにありへむ咲く  
花此榮えいまさむこれぞ此老せまなぬみくまりの園

反歌

たぬしさにこゝろはるけていく鶯これやよもぎが島の御そのふ  
大綱山高島氏別業其景太佳乃作歌贈主人  
八隅ましむ大君此かしてきやうづの御手より玉うきをたまはりまして



いたづきをたへへましける御惠も世におえきてえ高島のをぢがえめゆふ  
 大綱の山北や庭ゆかく見れば神奈川の海うみつ路を埋めつかしてやむら  
 しく高島の町山をさきり車かけらま棹かねの眞金のたいちこれも皆をぢが  
 いたづきかく見れば横濱の町湊よりたてつらなめて八巻あてらま燈火水  
 上ゆ下樋渡して家毎にわけくむ堀井これも皆をぢがいさづきいたづきて  
 なしける事らあどくへかまへもつきせめうつしにふりさけ見れば安房  
 のねの上つ總べの山のべについきて聳え相模ねの浦賀の丘の岡のべにさ  
 かりてめぐり宮根の雨降の山の山北べに離れて並び富士のねの八重棚雲  
 此雲の上こそりてたてりそどもを遠く見やれば武蔵野に都築國原かけ  
 どもを近くのぞめば武蔵の海久良伎海原國原のまもとたちなみ海原の  
 ら船つどふ荒波の浪の千里もたよりよくゆさかふまにま商まこりとみさ  
 かえつゝも此まなび業のたくみもかのもくつとめすゝむを居ながら  
 に見たゝさとりて御盛の時を仰ぎて御代の爲み國の爲にいやつぎていさ  
 をたつらむかくばかりまぐはしき屋を所えてこゝに造るもよそながらく  
 みてぞ思ふ賜はしゝ大御惠の酒杯のさばれてあまるをぢがさきはひ

明治元年冬十月幸東京之時謹作歌並短歌

かけまくのかしおうれども現神我大君此うち日さす大宮人ものゝふ此八  
 十氏人千萬のみどもつらなめ吾孀路に出たちませばあえがてにいゆきな  
 やましつれなかる大井此川も心なき宮根の山も靡かへどみさきおはねど  
 よりなむとあきてまかねとみ橋はも荒波ゆらま御輿はもかけ路なづまき  
 さき道も大路ゆくこと波のへも疊ゆくこと平らけく安くのぞけしきへ長  
 くわらま旅に一日ぶお風も音せま一夜だお雨もそゝがまこゝもへばい  
 つきさもらひ級津彦いぶさやなさぬくらおかみ空やまもれる今もなほ神  
 代ながらに猿田彦みさきにたちて出たゝす道やつかへしうべなゝなび  
 きよりけむ心なき大井の川も箱根の山も

反歌

八十かみもえたちまらひ山川もよりて仕ふるいでましのみち  
 えごかはし五十の驛のなみまつも天此みかげとみゆきつかへり

明治九年八月皇后幸宮根温泉蓋車駕過處山阪削嶮道路坦  
 地修理着意以盡美矣某驛御慰某驛御泊庶民拜幸而献品物



皇后亦有賞詞而至賜物若干之事件者余乃讀新聞紙中載記  
然得知之焉乃作歌記之

八隅之し吾大君此大后君の命のかしこきや宮根此山に出たししみ湯あみ  
ませりのりなめておきてさそれ平らけくいわたらまぶね安らけくい通  
はずがね天さがる鄙のみ民も驛路にまむかひなりと道つくりさそひいそ  
しみ菅たふみまきなまなして鶉なまいはひもどほりましいもの膝をりふ  
せて天つ水あふぎてまてる真心を思ほしめせか程々に物賜はりて大みこ  
とかいふりまつれ泣子なす慕ひをるがみをしみぬる大御車の轍だに残ら  
ざれどもいそはきて行幸仕へしいさつさ此いさをぞ此ある後此世までも

神田息胤拜伊勢内宮權禰宜焉自横濱發舟赴彼地作歌贈之

拆鈴此五十鈴の宮此大神の大まへ仕へかふれるまけのまにたまら  
はふ神田此あせが蟹ぐゆく横濱の津ゆ綱手とき舟出せまふあらしは  
年月まねくふることの道にいさつき神習ふ教へさどさしはしきやしいそ  
しき人と青海原へふも沖にも神つまり守りませればいか潮のまはの八百  
會も五百重波荒くいたで千重波高くいおえで伊勢此海の常世の波のま

き波のれどによまらむ安くはつらむ

饒山本退齋之伊勢國作歌

艸まくら旅のやどりのいをやまうまいいねじ残りゐて家もる妻子も  
うちどけてやまいいねじ稀にいをなまむ夜らふの思ひやる心かよひて  
背子が目に妻子の見ゆらむ妻子が目に背子のみゆらむはかなかるいゆも  
たのみて長さけをありまつ妹がいぶせかる心たらひおとくゆきて早かへ  
り来てうらやまをくわひうらはせいゆに見むごと

明治十一年三月福田教正應衆之請聞赴西京於此作歌以贖

其行

草枕旅のやどりもみ心の平の都櫻花み盛の世に法の花さきそふ時を待ち  
えたる人の心と嵐山嵐もふかず大井川浪も静けく鹿の園鷺此み山のその  
かみ此教かをりて春風のふく田の君がときごとにもみ法此花も高く匂はむ

戊寅三月盡華頂山主歸京路歷神奈川驛過大綱山高島氏之  
山庄而宿山主命隨從張樂也且爲送別之筵余在其席乃作歌  
以送別



草枕たび此やどりおくりこし友よりつどひ筆とりて思ひをのぼへ笛ふ  
きて別を去れば山松此風おひける諸舉此たりきまらへ片おろしかそけ  
き心からやまと言葉此花もにはひあひより

反歌

うつばりにたちまふ塵の別れても笛のね此おせ此まつかぜ

賞直井晉之庭松作歌

此松やいつくの松初春此子日に出ていはひつゝ野邊にひきけむほぎつゝ  
園にうゑけむ植にけむ人のとはずもひきにけむ人のまらずもさしおほふ  
どこはの緑おひさてるおやしき根ざし根ざしはも家の鎮とお葉の主人  
のみさを五百千世にありゆく色の今よりぞかねて見えけるさかゆかむ末  
たのもしき園の若松

忍草

わび人の心をたねと花もなくみもなりいでずふせ庵の軒端にまげりちる  
露お昔をかけていかさまに時めきし世を去のお艸ぞも

窓前竹

よろぼへる門のうゑ竹葉がへせぬ色を友あて吾なさむおもいそしみよ  
ろぼひて心たゆめば葉がへせぬ色のおもへど世にたてゝまらるゝばかり  
えしわざ此一かどもなくなを事此ひとふしもなまかこりの學の窓此奥  
深くまげりもゆくうよそめはつかし

鳥

八咫鳥こがねの鶉の皇御孫の尊まもらす神ろぞ此御使神を尾頭を動かす  
さまをみそなはしどつごまなほし長鳴ける聲此うちおをこもらしゝ岩戸  
ひらかま其かけも庭くなぶりもうつし身此今のをつゝにありなれて住む  
鳥ならし此鳥も神ども神ぞいさをおもへば

反歌

どり出ば庭くなぶりとかけにつぐいさをいなきさきいすなるらむ

曉雞

庭つ鳥かけをかふ屋の里毎に多くあれども宿さかりよそにあさらせ門は  
なれ外に遊ばねば其友のまじらひもなく其むれのよりもあはねど家毎の  
時なぐらになさかはし一つ心に聲たてゝかゝみにつげぬ曉ぞなき



反歌

うち羽ぶきなくねかはして庭つ鳥あかつきつげぬ里やなからむ

白鷺立洲

夕汐の入江の鷺の蘆まあさりぬぐひにかりぬうきひぢにひそめるむなぞ  
靡き藻にふせる束鮒うなかふしまほりみふけり青波に思ひやつきし白雲  
に望やたえし其波のよしよりくれバ其雲此行方をとめて羽ふきてよてり

馬

世にたちてありゆくわざと馬をらもいふづきぬらむ四つのあしひ身をた  
つるあし口綱の命の綱と鞭にたへ車につかへ蹄ふの眞金をうち目ふのか  
はひをかけてゆくささ此よそめぬふら走ることかさに心ひかず蹄ふうて  
る眞金の石にふれ火さへとぼして走りゆくかも

牛

物皆の開けゆくどふ時にあひさち此めぐりてふぐるまに仕ふる牛の汗あ  
ゆといひけむ如く月に日にそひてつみぬる其西此から此書らにとくま  
に薬にますと身の穴をほりし屠られ思ひきや朝な夕なのあへにならむと

観市場飼虎作歌

から國此虎ちふ神の神なれどけものにしあれバ神ながら人にとらはれ鉄  
のくみこにかはれひと屋なす中にひそめりあらびなばさへがてれやた  
るほどの餌ばみさせねバやさかみて餌をしこひほりおどろへて歎かひい  
ぶく其こふも其いぶけるもさかみたけび噴譲はゆかど驚かれ見のまさま  
じも膳の臣こそいあれ世の常の人たへじをいかさまにはかりとらはれ  
いかさまにたくみなられたけはやき神ふのあれどけものなりけり

観西域所産特象之度來作歌

あら玉此どしのみとせの人はならバ手にすゑましを赤駒のみつあはすども  
あめ牛の四つならぶどもいましおの及ぶべしやもささの三年子

反歌

ささの鼻うごかき見ればはひ見ざるをろちの姿おもはゆるかも

詠魚

此口や答へせぬ口答へせぬ口さきたらし今ゆのち餌をなのみそどのみし  
釣を口さぐりとり神の世になしあやまち罪なはしかきてましける海鼠



はも今の海鼠ならむ赤女はも鯛にやあらむ鯛ならむ罪ありとももろもろの魚のあれども鯛にまさ魚のあらめや世の人のめでぞことなるわたつみの魚らことくよせつどへ問ふともあらじめであえて吾まさらむと答へせむ口

反歌

大御饌につかへまつれり海鼠も鯛もよしや神世に罪ありとも

書贊

益卉數品各有芳艷描此寫之至愛翫之者乎懷其風雅焉乃

作歌

奥深く見ゆる宿かもなつかしくすむ主人かもうつし繪の筆のたくみに木も草もかゝりかきなめ花も實も似せば似せなめ其かゝを見つゝしをれば目に見ぬ心のみやびかたもなきまみかのさまも思ひやりゆかしきまでいふにしてうらぶあるらむあやしきやあるじもまらま家もまらぬを

見畫圖作歌

今の世此時にかくれて上下此きぬもふるされ鬘斗目此きぬもすたれど其

かみのみほぎのむしろいにしへの軍のにはのうつしゑに残る姿のよそへるを見ればいかめしよろへるを見ればいさまし劍太刀鎧兜も弓矢も鉾も

題書畫帖歌

はしきやし此折卷の花ならば園此春花艸ならば園の秋艸八千くさに色香きぞへる秋草のからおどの葉春花此やまと言此葉うつしゑ此筆のたくみも鳥のあと此ふかぎにはひも園生のささくのあれど垣此うちにあめゆふなしてはふらさ老長くをめでむ折卷此をりくとり出うち見ての心なくさめ思ひはるけむ

報贈藤本繩葛歌

たちかはりくる年ごとに夏すぎばまさはれなむ秋たゝば又あはれなむあひ共にまささくあれと祈りつゝあひつゝあれはゆく年を惜みも思はまらつ春をまちてうつろひゆき通ふ便につけて玉梓の使にきけは嬉しきや君も事なく吾も事なく

贈藤園加藤祐之之歌

あかねさす若紫此藤園のふちの葛根の限なくさうえゆくかもはてうなく



繁りゆくかも言此はの道の巷此八街にいはひもとほり古へに遠くのぼり  
て磐がねのかさかるふしもゆひとめて安くいひなし山松の高き姿にさき  
いでて深くにはへり今の世になびく小枝もゆく水のくざりいはて老谷川  
の橋どもかゝりかけ道此たづきともなり言のはの道ゆきなづみなづさへ  
る人を渡さむ人をたむけむ

明治十年五月余於箱根眠雲樓上逢九歳女子佐々木三辰者

女善書看其揮毫賞之贈歌

ひな鳥此さゝき少女のいはけなくうなるはなりあきる髪此かゝかひなぐ  
らかく書のかさなりなら老難波津のあまにたちこえ淺香山深き心を早く  
よりうまらにさとり其山の高きさこえて其海のひろくあさりて名々はし  
き玉もかづき出世おにはひ筆の林に花さかせけり

諭讀書習字兒童歌

こいしどもこいしき岩も手力に槌もてくづさかゝしども堅きま金もたゝ  
らかけ火もてどかせりどきくづくことのかさきい奥深き書の上なる真金  
どくわさのえぬども磐くやま力ありともどる筆を手あひまかせせさへづ

るやからさまながら鳥のあと書此學をつとめいそしめ

荒波直方者程谷之人也其先係本居宣長翁之族裔也直方性

好讀書以故精經史矣乃作此歌贈之

かはほりに似る笠おほひ蔭に似る衣もおそへば鳥じもの舌だみどもお  
のづからあひまじこらむいつとなくあひくちわはひよしゑやしくちあへ  
ぬどもよしゑやしまじこりぬども蟹なすかゝを學ばゝおとこそいうまら  
おさとれ業こそいつばらにならへ言靈のさきはふ國といにしへゆたゝへ  
て高きおととひをおほはまかせそおそはれおせそ

凡世間之事皆因地因人因時而施之者也故有與世推移之語

也今時設小學校者因時而施之是工於教訓兒童者也老翁謂

使此君臣在今日必用今日之施者歟乃作歌

あふみの大津の宮をえらしける天皇むら鳥の班鳩の宮まきましゝ厩戸の  
皇子眞昔よ蘇我此大臣藤原此内大臣うつゝへあおもはしよりて漢書の教  
まきけむ佛の道もちあひけむ倭人のよしとよく見て今もなほおこなはまら  
む海遠くへだつる西のから國のふみの學のいそしきろかも



方今世上有一稱開化亦喚舊習之語故作歌

今の世にあらため造る橋板の堅に渡せり敷石の横に並べり時につけよ  
りによりて堅横のさまいたぐへどみながらにかさのかはらせうつし身此  
人のことく、時にのみうつろひはてずかさくなといふもおはかり今の世  
にかけてご思ふふりしあどをふみてぞおもふ敷石と橋と

近況見少壯者緩歩風狀焉乃作歌

物ごとに関けゆくどふ時にあふよそひをなしてもの學ぶわくごごと  
杖つくも鞭もつもわり杖つけと腰も曲らせ鞭もてと馬あものらせ手なれ  
鞭うちまもりつゝ手束杖つくゝ思へば今し世にさそひいそしむ其西の  
から國までもふみ學ぶ道につく杖をみゆく心の駒の鞭あやあるらむ

世人醜禍者恒聞爭言爲端因作歌

言靈の幸はふ國のことゝひのまぐれてあれどもいひ此うるはしうれど  
ひな言の五百ちのことども一言のまことにまうをふる言を語り傳へし稗田  
の刀禰いたふとし大み言もちてのりてし口持此臣のいそしむをそごごと  
くちなあへそねたは言にくちなあへそねわらそひのはしも造れりごごは

ひのもとも起せりものいひのさかなき人といはるなよ人

方今盛稱文明開化之語故作歌

大御世此さかゆくまにまゑらざりしから此境ゆきかざりし人の國より造  
りなま物もちまゐる來たくみなまわざつたふれば昨日みてめづらしかるも  
今日さけば時におくれぬ今日さゝて新らしかるも明日見れば又ふりゆか  
ひ春花のつぎてさきそひもち月けてれる面わど物事にみちてたらひて人  
ごごにさどくかしかくもあるを此きそふ心に事々にさどりつくさむかし  
あさや物のまなびも業のたくみも

明治癸酉年夏月官設博覽會於萬年橋之館余亦往觀此而作

歌

みるあどの廣からざれば吾まらぬ事の疑ひかさくなにそしれるものを廣  
く見てひろくわさまへ隈もなくうまらにまらば鈍かるもかしてからむと  
かもむけ此これも一つう月に日にあさらくに明らけくくらきを照らま  
大御世此光をあふぐけふにもあるかも

觀習練西洋兵法作歌



外國の人をゑがけばさながらに姿のうつれ外國のよそひをすればさながらにかさちの似つけ黒髪のもどり拂ひまじみ毛にきりつくらし長太刀を一ふりはかし筒袖此鶴衣に鴉羽の黒織囊兜なしどりかゝふり澳つ鳥むなみかへりみたちゐるもあいふさへり鶴此羽なす黒皮沓に鶴脛に毛織もはき袴なしどりよそひ歩みもこしよるしと馬に乗りかちゆきつゝき乗り此むたかゆきかく行きむれ別れかよりかくよりうちつるゝ火筒のけぶり黒雲のかりゐる如くうち放つ火玉のひいき雷のどゝろく如く大鼓うちのみはひに喇叭てふをふき此すゝみにもころをにまけてのあらじどかのもつゝとどめいそはくうべなゝゝ姿かさち此さまをのみ似せてありなばうつし繪のぞと

讚蒙尊上人所護持勾藤歌

久方の天此ぬほこ御倉板擧の神をはむめてぬとたゝへにと尊とみて人の世となりての後も神此世の跡をためしに物さねと齋庭にまつりとりつけて衣によそへりはしきやし吾背の君がめでもゑる曲玉はもよ齋庭にかけし名残りよそひにつけしなごりう其かみを思ひまのげゆいかならむ契な

ればか時ありて世にあらはるゝ折にあひつたへえにける幾ら年埋れにたらむわゝつみ此みくゝみたま此底たからなる

筆

手ならふと手ならま筆此命毛のみじかうれどもはかなかるものにあれども便よくやまぐつかへて眞なほおしなれまゝがひて人ならびいそしをのこぞ人ならばさかしをみなぞまがあとを千年にのこしまがにはひ千世にとめむといそしみてをのあ子ならへ眞直にし女子ならへ手にあらしつゝ

硯

うつゆふ此狭きふせ屋にうちむかふ硯の海もする墨の綾ある色に千重まき波五百重たゝへり八重棚雲百重浮べり昔より名どかき人の世に光る玉もかづき出世に匂ふ花もあさり出波此音此遠くもひいき雲此上も高くも聞え筆此林まなびの道に咲にはひいてりかゝやけ其玉のかつけどつきま其花のあされと絶えずあされゝあされるまにま底ひなくおさるなきかもあざりなきかも

笠



眞菅よすがの小菅三島人いどりもち來難波人いかりもち來て縫ふ糸の細  
きたづきになまわさもいさをの廣し船のへの筑紫のきはみ駒の爪つがる  
此はてもどりかづき旅ゆく人のかふつく眞日をもおほひふりしきる雨を  
もまのぞ一日だになくてえあらじ蔭たのむ三島菅笠難波菅笠

帽笠

かゝふれどかゝふりならせ笠なせど笠あも有せかゝふりにあらねばこそ  
の位なき人もかゝふれ笠にあらねばこそこの蝙蝠がさ猶さしかさせ寒さを  
ら避けむとならば老人の物なるらむを老よりも若き人こそ多くかゝふま  
衣

ふとり縞いやかさね着よ袖縞いやかさね着よろしきままゝ筒袖の鶴  
衣ひろ袖の蔦ちふおまひ時めきてきよそひぬれど市人にふさへる衣のよ  
ろしきままゝ

書生羽織

羽織ちふおまひの長し蔦ちふ衣の袖なし長袖のいたづらなりと筒袖を着  
るらむ人のきよそへる羽織のたけ此長くもあるかも

晚鐘何方

あかねさま日此くれゆけば朝さらせ出る山べにたちかへり雲のまづまり  
時どめ鴉のやどる入相此鐘の響此いつくよりきこゆともなくいつうさを  
限ともなく浮雲のゆくへをおひてむら鳥むれゆくあとに音此残れる

車

とてしへにありゆく御世も小車此めぐれるなして物事うつろひゆけば  
昔よりなれおしこども便よきかさおぞなれる今の世にまいつる事も時お  
あひかゝぞうるなる輿かさ此よぼろかくれて馬此ひく車さしらひ人のひ  
く車さそへり商人のなまなりはひもたくまらが造れる物もふみ人の學の  
わざもも此ふのどる兵器もまうなればつとめもろく黒がねの道はせ  
どほる車なまゝいやささださね御世の手ぶりに

蒸氣車

入尋鰯八俣をろち此かそろしきさまにあらねど石炭をたく火のけぶり小  
車此どいろくひいさ雲をおこし地をゆまりて八俣に車をわかち敷なめて  
走るを見れば八尋のやうさをのせてつらなめてかけるを見れば八谷を渡



れるをろち荒波をいぶける鰐此いさほひもかくしあらむと思はゆるかも  
同

翹たて天どぶ鳥の早しども早くしわれび追手ふく海をたる船鞭うちて陸  
ゆく駒も其鳥のふひまうざれど其鳥もふひまうざるの黒がねのたいちか  
けるふ車なるらむ

看蒸氣車走鐵道偶爾作歌

久堅の空此どけきを鳴神うくづれおちくる龍神ういまきのぼれるかきく  
らし雲ぞ起れるなりひいき音ぞとゞろく其雲のたく火の煙其音の車のひ  
やきたちとまじり見るまもわらまつらなれるやかとのうちにあゝばく此人  
つどへのせまきわを黒かねの道はしりてすぎぬ

赴品川驛將訪故人乃乘蒸車有感作歌

世此民のたよりよかれどうつくしみ思はまなべにたふとまきやうま人のむ  
れいやしきややいつこの友おとそかに隔てのあれどみ恵の隔てのあらま  
一つらに屋形つらおめつらなして走る車にかのもくのりてしわれび飛  
ぶ鳥此こゝちのすれどそらにやの思ふ

於官道看馬車列行乃作歌

から廂長柄の車ひさつらね大路かけるふ鹿毛の駒いや二ならび月毛の駒  
いや二ならぶうま人やうま人どち箱根の湯あみせまらむ江の島の遊びせ  
まらむみやび男も見ゆみや姫も見ゆ

寫眞鏡

うつしゑ此たくまにあらでうち向ふ鏡此かげをさながらに紙にどいめて  
海山も手にどり見れば艸枕たびおわる身もめの前にいままが如く父母を  
見てのをろがみかさはらにありなむ如く妻子を見てのわはれみ世にあら  
ぬ人をもあひ見むつびあふ友にもかれまさりりゐて恐ぶおもひも離れる  
て戀ふる心もなぐさめぬらむ

傳信機

まみさてる木の間をわけこいしかる磐根をうがち高ねにも柱をたてみ谷  
おも柱をたてかけむさむ千尋はりがねさとりえてたくめるわざに荒海の  
底をもとほしこちくゝにひき此まにく千重波の下をもくゝり八重雲此  
中をもかよひまはなわのどいまるかざり國はなれすむらむ人も家さかり



へださる人もあひむきて語らふ如くこと問ひかはせ

同

鞍させば命まなむとかけらしく甲斐此黒駒いそげてふみ言かいふりいそ  
はさし舍人鳥山鳥山が早きあゆみも黒駒のとく走りしもさゝがに此蛛の  
まがさとひきわさを千尋はりぐね千里までこととひかはせ今の世にかけ  
て思へばまかせをありける

詠横濱瓦斯燈歌

大船のはつる湊此横濱のる國人の商じこりつどへるなべに物ごと便  
よかれどかしてきや御思兼にから國の人のさとりてくましくもたくみ出  
たる燈火をこゝにもうつしたてなめて造らせりけむ晒刺日のくれゆけバ  
天つ星つらなるなして大空もかいやくばかりうつろへる火此氣かをりて  
雨ふれど雨にも消えせ風ふけど風にもゆれせ八巻の市此植木の青柳のも  
ゆるめざしもさく花此八重かさなるも並松此まげき葉末もくまもおちせ  
さやに見ゆればとこしへに晝ゆく國どうつたへに夜なき里と夜もすぐら  
いゆきかひらひゆくゝも高くぞあふぐかいやける此ともし火の天地に

いてりとほれる大御恵を

大凡有井深者則架木懸車用綺結二瓶於綺端上下汲之是纒

下婢手力不怠則日用無乏焉以此思之余喻世人學問之道無

他致々勤之汲々思之惟在不怠而已矣乃故作歌

賤の女がくむや筒井の井車につり綱かけてふた方にどりゆふ釣瓶綱ひき  
てくれるまゝくつかつわぐりかつ沈みつゝひとかゝ此水をうつせば一方  
に水をたゝへてあひむきてめぐりゆきかひ度まねくならせばやまぐ手力  
のつきぬ限の誰が手ふもくめばくまるゝ世此人の學びならはしなまわざ  
もかくしあらむとこもほゆるかも

紙意

霞たつ春日うらゝにいかのぼりいかにのどけき天そゝり高くぞのぼる地  
さかり遠くぞゆけるほごしある身のかひなしとらやみてふりさけ見れ  
バ風此まにいゆきまゝめど綱此まにいゆきかへらひ吹く風にのぼりもは  
てまひく綱にくぐりもはてまゆゑひて猶たゝよへりよ此中のかくなる  
ものかうゝらはしもよ



詠兒等所玩石麟玉歌

うつし身此世の人みな此み寶をさめいつきて玉といへば得がたきもの  
 をかやまぐもわらは遊びにとりめせと市の巷を賤の男がうりくる見れば  
 うながせる紐にとりゆひ胸さかにかくる小箱此けにもれる水おひさして  
 ふくみもつ管のさきよりふき出るいぶき此まにまわらはるゝ瑞のまら玉  
 御統此五百箇つどひ此玉の緒此たえてうみぶるとりつくる五百の野篇の  
 玉鏡をぬけてりちるとあふぎつゝいむかふ空に亂るれど音も聞えずちり  
 ぬれどおつとしもなくうなるらぐえまきそへどとりもえず手おもたま  
 らせかつきえてゆくへまらずもあふら其玉

案山子圖贊乃作歌

あしひき此山田のそほごみのさまのおろそかなれば人なれど神にましけ  
 り神なれど人に見えけり人ならば足もゆかずてはり弓此矢もはなさねば  
 おはふ見て鳥もあさらむ欺きてけものもよらむ神なれば足ゆねどは  
 り弓此矢のはなさねどかしてみて鳥もあさらむおそれみてけものもよら  
 じいさつける民の心をうべなひてうつしまをらむくえ彦此神のみ靈此さ

ふとさるかも

商人

あきじこりふさへせむとて蟹がゆく横濱人蝦なす異國人海老のほはさみ  
 のもたじ蟹のも髯のあらじと髭もてかさやとらむと剪刀もてきりやとら  
 むとかのもく目をらむき出むら肝の心にくぼさあらをふらしも

人力車夫

大路ゆく人に雇はえ引きと引くらから車此七車かずかさぬれど朝よひの  
 けぶりのまろにこどくに敷へあつればかなしかる老の父母いとほしき  
 我妻子らの明日此日をすぐさむまけもかりてゆく車のあさひかりてすむ  
 家の價の今日の日此まろになさむどかき酒すゝりもかねて汗あえて息  
 つきあへぐいさづきををつらく思へばゆくさくさ轍をぬぐひ軸にさす油  
 もおのが身のおぶらなる

同

今しみな賤の男の子此さちなくてわさなき身あ人の此る車ゆくはか世  
 を渡るたづきなしとふよそ目さへいたづかはしも此どかなる時にしあへ



見はやせる人をどいめて長太刀のはの上も渡り一筋の綱の上もゆきな  
れぬればあやうきことのわざをぞおやまき世わされおこたらず事なら  
はしたゆみなく業のならばは何しかも車のみやひきわさるべき

同

車ひくいそしを此子よいそはきてとくまぬらむといひつらひ汝が走るま  
あひこづらひ汝がかけるまにすむやけく坂路もこゆれさかし路もうれ

天宇一日起暴風激層波余於是時眺望海面漁郎泛船猶爲其

業有感作歌

うづしは此かをるあるみにいまき吹くはやちかしきりさきだてる秀波た  
ちきり木葉なま蟹が小船を沖さかり漕ぎさむ見ればくましきや波さるひ  
れあやしきや風さるひれをどりふらばかくしもがもど五百重波かけてぞ  
思ふ千重波よせてぞおもふ千はやふる神み實にたぐふるの蟹がをぶねの  
かしてかれども

外國人者置本邦少女爲妾邦俗稱此於羅紗棉也蓋鄙之者歟

乃作歌

玉垣の外國人になづさはりむつぶ羅紗めに吾毛らみよそひかね吾実の  
みあへのまけいぬちだふ惜けくもなし君が爲身もまたさむと盡のも手た  
づさはり夜はもたゝさまなかりあや垣此ふはやが下にむし衾なごやが下  
お玉纏此あぐらによりさにぬりのあぐらにふしい向ひてさむらひをるよ  
おとぞこそ羅紗めふといへうまし處女ら

安政六年己未六月於横濱地新設花街於是使近驛之遊女轉

移于新地送以輕輿矣余見之作歌

いにしへの唐此こきしが北國のえみしのをさにかくりけむみやびをなみ  
此ゆくくもなぐさめかねて乗る駒のあゆももなづみ四つ此緒此琴のね  
亂り玉どちる涙ぬきけむためしをもひきてぞ思ふ蟹がゆく横濱のべにう  
つりすむうかれぬがども櫻花にはへる姿望月のゑめる面わもかきくれて  
袖うちおほひ夏艸此まなへうらぶれ穂薄の露にまほされうなかぶしぬれ  
をばちゆくうつし繪此えらびなりせばまひしてもかきさかばはせてもれぬ  
べきまへもわらむをまへもなき身をなげきつゝ悲しみていとひながらも  
外國の人に枕を明日のかはさむ



讀柳橋新誌就中説解歌妓之情態矣余亦戲作歌

静御代此み蔭をわふを琴此緒の細きたつきにふなする此貢まふして花ひ  
しろ月此うさげどうま人のめし給ふがにとみ人此よびたまふがにふのが  
まし心たゆまをつらはきてひき此まにく槻弓此おやりくも楯弓此た  
てりくさ子らがいとなみ

同

手ならせるみつ此緒琴をこととしてうさげお仕へうかれてもうかれめな  
らず恐みてみおきて守り子雀の袖ふり躍り蝴蝶此袖かへし舞ひまた裳こ  
そすべりいざせれまどけなく身をあやまらてころふまなゆめ

見護送四人作歌

大御代の大み恵をおほおしも思ひてあれやわかましも思ひてあれやむら  
肝此心ふどくもかしこくもみのりおかしおほけなき事たばかりし大方  
のたふれやつこ此僻わざ此たぐひならじう損きのまる荒目籠の興ひきゆ  
へる綱もかさらに香青なる綱ひきおほひ武士此へどりかくみていかめし  
くもりつゝぞ行くいかさまに罪なはるらむ櫂の實のひとりのみかへうか

らおもかゝらむものを父母のたふとからぬう妻子らつめぐくあらぬうわ  
くらはに人と生れて鳥にすら毛物にまらむ劣りぬるまが心から馬じもの  
ほざしつけられ鳥じもの籠に囚はれてつながれぬはや

冬述懐

深緑青葉がうれおかく露も霜にかきかへ紅葉せし昨日の梢ちりまけるけ  
ふ此枯枝めの前にうつりもゆくうみ盛と思へる程に老くだち朽うはてな  
む人の身も青葉のこどやもみち葉此ごとや

寄鳥述懐

天雲の向伏まきはみ鹽沫此とまるかざり鶉はしもよ海わさるなり我も  
世をうみわたるなり其鳥の翹えてしが其鳥此いゆきかひらひ朝風に千重  
波たち夕風に五百重波たつ沖つ波へつ波ま此ぞのとけくもあされる如く  
うつし身此身をも心にまかせさらまし

寄歌述懐

蚓の骨なしとふかへるの力なしとふ力なき學にうさひ骨なき手にかきす  
さび歌よむと思ひてをれど筆どると思ひてあれどかへる歌みづ書とや



世にいはるらむ

花麗聲美先稱櫻鶯人性同之乎乃作歌

霞さち春さりくれバなかさりし鳥も來なきてさかさりし花もさきいで咲く花の多くあれどもなく鳥のさはにまきとも花の櫻鳥の鶯かのづからもてるにはひれむれ出てたへられけりうつし身此世の中にある人もまたまかなるらしうまかならば春花のほど春鳥のほど

寄神神祇

みづくし瑞の眞賢木さかえゆくまみ枝をねおむたらひゆく瑞枝をきりて神まつる齋庭にまなく荒みたま静めまつらひ和御靈まさせまつらひまめはへていつかふひむろ木綿まていはふ幣しる神さびてたふとさるかもかしこさるかも

鳥羽氏祀柿本大神祭奠故作歌

浦なしと人此みにけむ湯あしと人の見にけむ角部經石見の海此かともなき跡も忍びてうらもなく御前つかへて神御かといはひをろがみ古あどをたへまつれば古へのかくれたまひき其かみの然なりけむと邊つべに靡

きふらばひ沖へにかよりかくよる深みる此今も見るごと思はゆるらも

明治六年天長節太嘯聽民庶唱萬歳乃作歌並短歌

一年此月日のあれど御齡を長月のけふの御命の生日此足日現神我大君此神ながらみあれましつる千五百秋長五百秋の今日ごといやさきかれど百敷此大宮人物部の司々ゆ天下大みさからも長きや豊御酒たまふ此御酒や天のたむ酒さかゑらぎほぎもとほしさかみつぎほぎくるほし賤しかる身もゆらくに足ゆけどゆくとしもなく地ふめどふむとしもなく雲井あものぼりきぬるか天路をもたどりゆくかと吾ながらたどられぬらむたゆたひて心もゆさにかのもく酔るいたはる神ながらならし

反歌

酒はがひ杯のかずくたへてもつきぬり大御よはひなるらむ

寄世祝

みさかりにたらひゆければ異國にたくみてなせる物さはあ傳へもくれバさとり得て造りもいで風に乗りみ空ゆく船車をへ海かける船まら波此千里此をちも青雲此五百重がまもたはやくいゆさかへれば梯立ゆ天に



のぼらひうき橋にのりて天降し神世なす今の御世ふの昔よりえがてにす  
とふ久方の月のをち水常世の法にせぬ藥それもとりあむ

賀遐齡而作歌

さき竹此君が齡ハ八千代ゆき万世へむと酒みつぎいはふ菴のまひうたふ  
琴笛のねふ空もすみ波も音たて萬世をさへげてたへ八千歳をほきてよ  
ばとむ鶴の聲龜の心もうかびぬるかも

詠寄水祝賀水舍吉岡信之齡六十之歌

高きるや天の御蔭此水のや此みづのたへへ限なく底ひなきかも言のは  
此ぬなともゆらにふり滌ぐ響の高くあらはるゝ名の輝きていさづき此年  
つませれば底ひなき學と共に限なき齡ならむと其水の流れおちあふ箱根  
山くなさるたぎち酒勾川さかまく波此水沫なしいくらよそらむ萬世を御  
はぎの玉此眞白玉水の江玉此言の葉の玉

杵築宮少宮司秋山光條之父翁和光齡正六十以故掲寄名所

祝之題以集祝歌賀之作歌

八雲たつ出雲の神に意宇の海浦回の蚤が朝なごに小舟棹さし夕なごに小

舟うけすゑいたづきてたてまゝもらむまなぐひを中とりもちて大前を仕  
へまつれる臣の子此親の齡と神御靈さきはひましてひきよする其眞魚昨  
の大口の尾翼鱈のさわくくに老くづをれを釣繩をくるやくにさき竹の  
とをくくにいや長ふ年を重ねむいぬちまさきく

吾友住谷明宣者戊寅一月迎古稀年焉告余曰求賀齡之歌者

盖世人皆所作之者也今於明宣乎乃不做其譽也故干都干鄙

纂輯諸君之歌若干首而壽之木傳之不朽題曰芳風集矣余嘉

其盛舉而乃作歌

靜御代の大み恵に稀といふ年の七十うら安く住谷翁の人なみに齡を祝ひ  
親しかる友にもとめて數ならぬ老木の枝におほけなき言葉の花のふさへ  
なく咲らむよりの同じ道學べる人此たづきともなりなんがねと廣く乞ひ  
多くつとへて櫻木に匂はせりけり其書此名の風かをり末遠くたへへらる  
らむ今ゆ猶命まさきく齡つみ學びいさづき此翁の道此まめ人世此長人と

井上謙治祝父頼國之初老乃掲寄道祝題而以輯歌贈之歌

網長井此井上あせが初老の坂おえぬとふ行末のいくらなるらむ西のから



吾み國も今し世にきそひつくらし車やるくるがねの道おどかはまいと  
がねの道ひきはへて長しといへどききあべて遠しといへど其道をわつめ  
つぐともあせがゆく千歳の坂におよぶべしやも

明治五年壬申七月皇后幸宮根温泉蓋湯戸許多就中福住正  
兄者其妻生男女十一人悉皆成存矣皇后聞之乃召夫妻曰我  
未有子安得似汝夫妻之生子之多耶於是見夫妻並兒女以賜  
物若干今聽此盛事作歌

久方此雲井に聞え天つ風ふく住をぢが眞玉なしめでおひたて、眞心  
磨きなしたる十あまり一人の子ら此一人だおかけささかゆくみむすび此産  
靈のさちにあえなむとおもはしめせうならはむと思はしめせう大后君の  
みことのかり宮にめさげ給ひて其子らぐうめる子をさへ御統此玉とつら  
ねてかしてきや大御はぎこと玉の緒此くりかへしまし物かつけ賜はせり  
けりいにしへゆ名にまられぬる少子都竹取翁いはひ子とおふしたてけむ  
寶子とめで思ひけむよち子ら此たぐひのあれどたぐひなき跡を残りむ天  
つ風高く聞えてよく住此翁が子らにおふけなき大御恵此御光をかゝふり

まつりかゝやきてぬなともゆらに世にひやくなる

賀高橋元茂爲其子娶女作歌並短歌

まなごてる高橋あせがいはひ子にくはしめ迎へうるはしく睦ぶを見れば  
ふさはしくふさへるめをうたぐひよくたぐふ妹背ういもとせ此どつぎ始  
めし二柱神の命のふることを今のをつゝにかけまくの恐こかれどもあな  
にやしえをとこどもあなあやしえ少女どもこゝをしもめでちはひまし日  
刺かゝ此天の益人あれまさむ御靈たばりて寶子も嗣てあれなむいとこな  
せかなしき妹どかくながらありつゝゆかな妹背むつびて

反歌

うるはしく睦ぶ妹背のなかよりどのどけき家此かぜのふきける

賀新室歌

久方此天の御蔭とま木柱ほめていはひて墨繩此すみやまかれと飛彈たぐ  
み心あかけて動きなくたつる宿かもたよりよくつくる家もわさる日の  
軒端をてらしすむ月の窓にかゝやき夜の守晝の護と天づたふ光たゞさし  
朝影此日の出早く夕かげ此日の暮おそし便よく造る宿かもたつる家かも



賀福住正兄新宅落成之歌並短歌

わしがら此箱根の山にはのけたつ尾上のあれど湯のいつるみ谷のあれど  
 少彦名神のくしびれ此ことにしもむくや湯元のはしり出れはしき處出た  
 ち此よろしき處たゝかはる谷のまほらま盤の上につくれる家なるゆれ  
 どゆるぎもあへじ風ふけど動きもあへじたちめぐる杉の大木の上つ枝の  
 天の八十蔭まづ枝の庭の八重垣とはほろくまきみむさき影友のたぎつ  
 荒川さくなぶり波の音とよみそともふの驛のみ坂はゆまの鈴がねひやく  
 はしり湯の屋ぬちになき出旅人の湯ぶねふみてりよろしなへかくしもあ  
 れば杉むらの家のまもりぞ鈴がねの家まづめぞ出る湯の家さかえど  
 湯ぶねのみちさかゆかむたふときや少彦名此神のもる家

反歌

少彦名神のくしびれいつる湯と家のさかえもつくる世あらめや

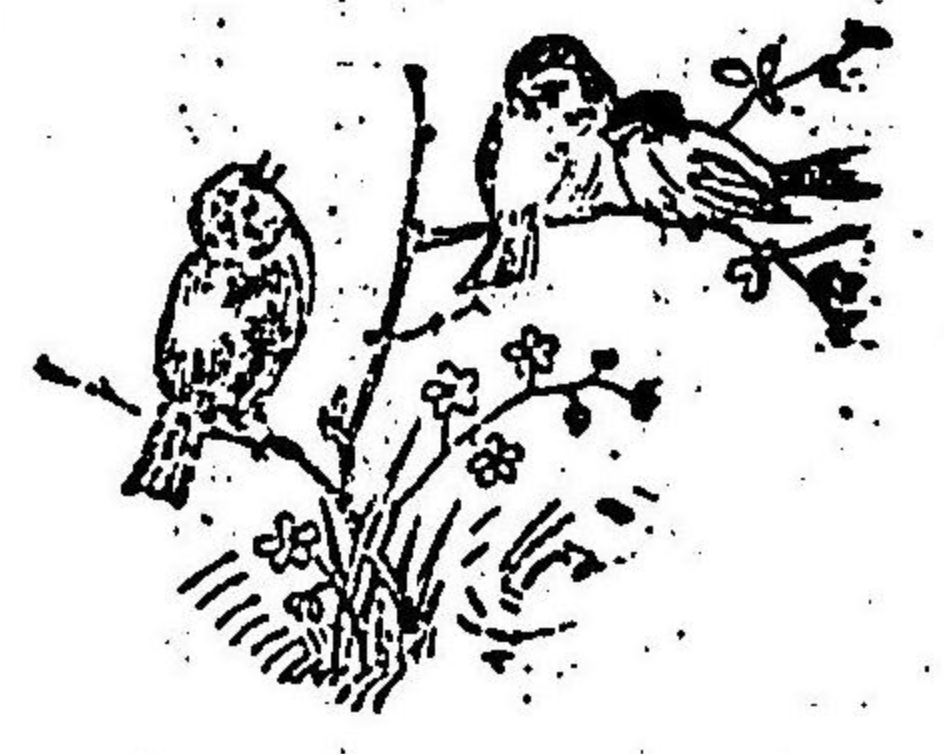
賞岡野氏金井歌

はしきやし岡野此あせがはしりで此庭の堀井此所えてそどもの山ゆもど  
 ほらし下樋をわたしひくまゝに湧ていづみの夏此日もたゝへてかれを冬

の夜もみちて氷ら音きけバ心をすましいむかへバ思をわをれいさぎよ  
 く身もすがくしとこしへにありつゝままむ家人の千歳いく井と家ぬち  
 此八千世さく井とさきはひてまもりまをらむ水分此神

不改樂

うつし身此世此たのみなくも此とどにうつりかはればさかえにし昨日の  
 花もはかなくて今日の夢てふ謎を人のいふなるどこしへに何うたのしき  
 物あつけ事にあふりて思ひやり心はるけて神代よりかはることなき言の  
 葉の道此あそびにまかじぞぞ思ふ





跋  
 輓近以國歌鳴于世者不乏其人而於吾桑門倡之者甚希偶有一二得名者亦不  
 過扭捏三十一言而已矣社友神奈川三寶寺辨玉翁性嗜吟哦兼有臨池之風平  
 居與俗絕諷詠花月徜徉山林緇禍藜杖恬淡自如其於吟哦折衷古學洵汰今體  
 格調偉麗別出一機軸務潤色圓球庵之餘風是以名聲喧都鄙巨幅小幀乞者日  
 填闔有門人岡野良哉犬山周造者輯錄翁所咏長短歌若干首將壽諸梨棗於是  
 翁語諸子曰余歌素出於淨業餘暇何足傳于世耶雖然人各有所嗜好若夢窓於  
 假山頓阿於洞簫故有慈鎮和尚容吾敷島道之嘆亦宜矣如余亦然聊籍吟哦以  
 醫懶癖亦是助修道之力耳一生事業皆如夢幻泡沫況於彫蟲小技乎諸子聞之  
 嘉其志高尚愈服有道者之言云頃者馳郵筒徵余跋余太暗國歌然與翁爲莫逆  
 友因不辭而書曾所聞跋卷尾爾

明治十二年三月上浣

古經堂主人松翁

瑠々室集 終

稻舍長歌集抄

日下田足穗

雪消松綠といふことを

明くれバ朝日たゞさしくまゆけバ夕月此ぼる高砂の尾上にたてる一つ松  
 あはれ其松ふ七さう八さうふり積し雪ふいあれと春たちて消ゆくまゝに  
 野のべふの桃の花さき尾上ふの櫻さきけり桃ならバ色ふや出む花ならバ  
 香ふやにははむまかしあれと句のめでじかくしあれと色い思はじとこし  
 へに縁いろこき一つ松あはれ

若菜つむ少女を見てよめる

梓弓春の野に出て鈴菜つみまじしるつひと朝露に袂ひひつち夕露に裳裾  
 やぬらす腰布そのまがる少女むなだかのくはし手弱女誰が爲に若菜つむ  
 らむちゝの實の父のみこと柞葉の母のみこと此御齡を五百年までと千代  
 までといはひつむらむ鈴菜すゝしろ



父母のあまのふものどあどつかぬ清きゆき間のわか菜つむらむ

杉田の梅見おゆきて

冬おもり春さりくれバ櫻さく山の多けど花のさく野のさはなれど東路の  
杉田の里の梅の花今まさかりと聞くからに我見おくれバ千本の梅五百も  
どの梅めもあやに咲みちにけり其梅のこのもと毎にさかみつぎ圓居をま  
つゝ香ぐはしど一人のいへバめでたしど一人のいひてはてくゝの手とり  
かはして舞ひ歌ひ遊びどよもし其花をちらすもありけり其枝を手折るも  
ありけり千本の梅五百本の梅の木のもとに浮れあされるをのこらの風流  
士なれやたはれ男なれや

嵐山の花見にゆきてよめる

嵐山高嶺の櫻大井川江此櫻めもあやに花さく頃の打日さす都少女も天さ  
かる鄙のあらをも花見むとゆくをし見れば物部のものゝふどち手弱女の  
たをやめどち長き袖みじかき袂花の香にそまぬやゝある一筋の橋もさり  
あへず二方此岸もにさびて酒みつぎ聲打あげて大和歌から歌うたひめで  
あへる人のゑらさび其山の瀧にひゝかひ其川の浪にあらそふたいまひ

見つゝ思へバさく花も咲くかひわれや見る人も見るかひわれや嵐山高ね  
の櫻大井川江の櫻あかきもあるかも

卯月ばかり信濃路を過る時花のさくを見てよめる

内日さす都へゆくと天さかる鄙へ歸るとゆくさくさ人のあゆらむを木曾  
山みぬの山なびけとふめと靡かきかくよれとつけどもよらぬ其山をわが  
ゆく時に山櫻さきもそめよと遅櫻さきも出よと我いひしことやうべなふ  
雪さゆる夏さりくれバ峰の雲谷のみゆきとみるまでに花さきあけりこゝ  
もへバ心ある山ぞおぎそ山みぬの山

大木曾やをぎその山のおそぎくら夏こそはなのさかりなりけれ

庭に始めて竹の生ひいでけるを見てよめる

我宿の庭の垣根に今年かひしわはれ若竹いづくより根はひきにけむ空蟬  
此世れことごとくに子といへバなべて親あり親といへバ其子ありけりちゝ  
のみの父やいつら柞葉の母やいつら父なくバまな子とめでむ母なくバめ  
づ子となさむ我をしも親と頼みて家の風千代に傳へよ庭の若竹  
もゝひろや千尋此たけの榮えづゝ我屋をとほにもるよしもがも



樹陰納涼といふことを

あし曳の山下庵のかげともい瑞枝繁れりともい新竹かひぬ瑞枝ふ朝  
雨はれて新竹の夕風渡る其雨のわざへもる雨その風の我身もる風そふ故  
に夏やよりこぬ雨風の心あはせて朝夕あわざへもるらむ我身もるらむ  
安蘇此川岸に三人四人集ひてすいみまとして

下野やあその川邊にかひたてる五百枝つきがえ秀枝の朝日さすす  
枝の夕日かやく中つ枝の風をやとせり其風のなかつ枝いでて瑞枝さす  
はつえにわたり若葉さすさづえにふきぬ五百枝つさいやつきくにふき  
わたる夕風すいし五百えつきが枝

名所鹿といふことを題めてよめる長歌短歌

此鹿やいづくの鹿紀此國のせ山の鹿いづくあうゆかむとすらむ大和なる  
妹山にゆく何きとや夜半あつ通ふ若草の妻まきかねて渡らむと百度おも  
ひいゆかむと千度や見けむ吉野川岩波高きこえかねてゆきも渡らむ吾妹  
子とさけべこたへ我背子と音なけべいらへ行く水在中に隔て、夜もま

がら歎きさまよふ其鹿のあはれをまらば流れ行く岩波なびけあはれ此川

よしの川ながれてくだる鹿のねい紀路ゆく人もあはれとやきく

葉月ばかり箱根の宿にやどりける夜声の海に船こぎ出て

月を見てよめる

足柄や箱根の山の峯みれば高くたふとし海みればさやけく清しその峰に  
此ぼれる月此其海に宿れる見ればみ棹さす舟あいのれど村肝の心空ゆく  
夜はあもあるかも

諏訪海の水を見てよめる

まなぬなる諏訪の海路の秋すぎて冬さりぐれば朝風に五百重波たち夕風  
あ千重波よせく其風のふきての結び其波のよせての氷り風のむた五百重  
かさなり波のむさ千重あぞとづるそこゆるにふめどゆるがま驛路此道ど  
もなれば馬車ひきつらなりてかち人のわさりたえせぬ諏訪此海結ぶ氷の  
上あしも道ある御代とまられぬるかも

海邊雪といふことを

住の江のあら、松原まつばらにうち出て見ればかのこる島淡路島も見ゆ



わづき島家島もみゆ島々のよろしきかも白雪のめづらしきかも常見しに  
姿かはりて白かねをたゝめるがごとく白玉を重ねるがごとく真白ふを雪ふり  
あけるあはれ其島

朝鷹狩といふことを

玉きはるうちの大野ふ白雪のふりつもれども朝やらけ御狩たゝすと黒駒  
ふまづ鞍おき赤駒に玉くらおき白かねのめぬきの太刀黄金もてつくれる  
劍つるぎ太刀こしにさげはさまをらを此いでたゝす見ゆまら雪の八さか  
つもれるうちの大野に

朝かりにいまたとすらしなりは老の音きこゆなりうちの大野に

隔懸といふことを

新はり筑波の山の二柱神の命此うしはかすかしこき峰ぞ鎮もらす尊き山  
ぞ其峯のを峰とさかり其山のめ山と別れ中さくる谷こそうけれ二柱神の  
尊此み中ぶに隔てのありとふ現身の世のくならずまづた巻いやしき身  
だふ相思ふ中の契の二柱神の尊の御中ふもたぐひてあれややまをゆかば  
人めを多みまねくあはれ人まらぬへみ現身の人めの關ぞすべかりなる

月のさやけかりける夜人を思ひ出て

水鳥のみかも此山此大をふの月を登れるさをふの時雨をはるゝ大をなる  
月の光をさをなる露まちどりてま玉なすうつくしまの其山のをちにし  
あれバ大をなる月あもがもなさをなる露あもがもな月ならば夜たゝなが  
めむ露ならば見つゝまぬばむあはぬ此夜を

詠富士山歌并短歌

駿河なる富士の高ねの古への聖もたゝへ後此世の人もめでけり東雲のは  
がらゝと明くれれば朝日たゝさし夕されば入日てりそひ雲霧のたつかと  
見れば空はれて雪積りたり日本のやまと此國に一つなる玉とやめでむ二  
つなき寶とや見む彌高に神さびたちて萬代に見れど飽めや富士の高嶺の  
ふじのねにたち重ねたる雲さりやうしはく神のみけしなるらむ

詠箱根山歌並短歌

神さぶる箱根の山の大名持神の命と少名彦神の御さまと神はかり議り給  
ひて造らし、神のみ坂と産まし、神の太山と語りつぎいひつぎけらしそ  
こ故にあやにかしこみ里みれば烟たちたつ海みれば鷗たちたつうべしこ



そまゝを宜しと大名持少名御神のうしはかす太坂なるらし太山なるらし  
大名もち少名みかみのにぞみたまをさめたまひし箱根やまかも

詠淺間山歌并短歌

信濃なる淺間の山の神がらうくしくあやしき國がらう高くたふとき神山  
とまみさびたてりくしひねと神さびませり天の原ふりさけ見ればかぐろ  
くぞ烟たちける眞白くぞ雪のふりける其火の雪も消えせ其雪の火も  
とけぬ此山の神のみたまの峰にをにかくりまをらしそ故に淺間の山  
の神山とかしこきるかもたふときるかも

ふる雪ものぼるけぶりも淺間やまうしはく神のみたまなるらむ

詠近江湖歌

我妹子にかけのよろしき逢坂の山もこえあへせ近江の海うち出て見れば  
ゆふ花に波たち渡る沖さけてこぎくる小舟へつきて漕ぎたむ小舟いつく  
ふりはてむとすらむ神樂波や近江の海のうち見る島のさきくかき見る  
磯のさきかちさき毎にあやに見かはしあやにうらくはし

閑居松といふことを

我宿の庭に年ふる一つ松人にありせば昔をも語り合せむ後の世も契りか  
はさむ言とはぬ松を友あて心なき身も老ぬれば明ぬとて訪ふ人もなし暮  
れぬとてまつ人もなし世中に在てなきごと此宿のあるじも一人松も一本  
あるじいと世の人とは庭の松なしとこたへよあるかひもなし

詠案山子歌並短歌

秋の田の假はの庵をもるをちや友あひあるらむ在たすそはづを見れば  
なが身あひつれまどひて頭あひやれ笠かぶり賤しかる姿ながらもめて  
あひそ矢とりもたし弓手あひゆづるにぎり益荒雄の健雄とも見ゆ立出  
て身あひかりかねと天地にまらぬ事あくいとはたす少名御神のみなをしも  
まらぬとぞきくこゝもへばあやにくましも神あ似て神あもあら老人に似  
て人あもあらず心なきそはづあひあれど心ある神もまらじな人も及ばじ  
小山田をもるや案山子のいさをさへはに顯るゝ秋あもあるかも

河の瀬に龜と鮎とすめるを見て

安蘇川の石川かゝ淵かゝ淵に龜ぞうかべる片瀬に年魚ぞさばしる其龜  
の萬代ふとふ其年魚の一年ふとふ萬代の龜の齡と一年の年魚の齡とくら



べ見るわれ幾代へむ龜と年魚とすみはてがさきなが世おも淵瀬のありけり石川かた淵

玉のをのながきみじかき龜と鮎といく代かけてり末ちざるらむ

紀伊國藤代の坂をこゆとて

藤代のみ坂ゆ見ればわかぬ浦此沖つ洲崎に汐ひれば白波まどく汐みてはたづ鳴きわたる其浪のまどくもわかず其たづの聲もめづらし藤代のおれの太坂の和歌の浦此汐の満干をめでぬべきうてなど神やつくりおきけむわかぬ浦よせてかへらぬえら波や声べにあさるたづのむらどり

草津の湯あみにゆきける時よめる

上野や草津の里のまきたつ荒山中たゝなはる青垣山まかのあまど軒端づたひにかくゆけば湯瀧さばしりかくゆけば湯舟たゝへて行く處いたる處に湯の出ぬちまゝやゝあるあはれおの出湯し思へば少名彦神のみたまを大名持神の稜威を二柱神のみことの神はかりはうり給ひて病人の病いやすといく薬湯やわかすらむそお故に此湯たふとび足曳の山里人もわたつみの汐くむ蟹もつとひきて里を賑ふ年毎に家を富みけるかくしつゝ此奥

山もいづる湯に淵やなまらむ海やなまらむ

詠鳩歌並短歌

空蟬此世のことくゝに鳥てへばまなひあれども鳩ばかりかなしきいなし上づ枝にまが父やどり中づ枝おまの母とまりまづ枝おのまのこもるらむ父母につかへまつるとあしたにいとく出てあさり夕べにはや歸りきてかにかくあるやまふ見れば世のなかにさかしら人の山鳩の鳥にいくらもまさらざるらむ

夕さればおれくれぐり山ぼとの此どなきかはす聲をともしき

ぬま人に物とられける時よめる

庭つ鳥かけの時告ぐ人の飼ふ犬の門もるおのもくまけあるものを世の中おありてかひなくうつし世になくておとたるぬす人此まおを此こらひいとなまむ事をもまらにたがやさむ業をもまらに人の衣人の寶を我物とどらくを思へば空蟬の人の皮着てむらぎものおの心庭つ鳥かけおもまかず犬にもおとれり  
ひとにして人にもあらぬ心こそとりけるのおもおとりたりけれ



紙鳶といふことを

梓ゆみ春さりくればうら／＼と雲井かきみてこちかぜの吹きたつなべ  
うなる子が心も空にいやたかに糸くり出すいかのぼりあはれ朝風に比ば  
りもはてせ夕風にくだりもはてせ中空にたゞよふ見れば世の中もかくこ  
そあるらし心なきいかのぼりだふ心ある人ふ教ふと高からず低からせし  
て中空にたゞよひぬらむいかのぼりあはれ

自由といふことを人のよませけるによめる

春の野に來なく鶯秋の田にはねかく鳴えるかねの籠に飼はるとも黄金の  
こお飼はるとも尾をせばめ翅たわめてうつし世にありへむよりの春の野  
にさやる事なく秋の田お物思ひなく飛びかけり友むつれしてあさる餌の  
あさりえがてに玉きはる命おぬともおのがじし心のまゝに世を経るべた  
ぬしとや鳴く鶯と鳴と

### 稻舎長歌集抄終

## 櫻園長歌集抄序

こたび佐々木君近世長歌集を出版せらるゝにつきて亡父の遺稿をも掲  
てむとねもごろにいひたせられたればやがてまづ櫻園長歌集の中より  
不肖が拙き心に任せてよしあしのわいだめも無く抄き書きして次第をさ  
へ整へて送る事となしつ但櫻園長歌集に長歌數百首有れどこゝに出せ  
るの僅かに四十首ばかりに過ぎず遺稿の全集の折を得て櫻木にゑり世に  
出さむの考なれば見む人まうおぼしてよ

明治三十二年二月

中津の里にて男重兄ゑるす



# 櫻園長歌集抄

渡邊重春

天皇陛下献御太刀銘貞清於大鳥神社卜明治廿二年六月十日  
三日爲奏告祭之時謹而賦而献歌

八隅しゝわが大君の随神かんぶら神をいつくと高ゆくやわが太鳥の神宮に奉らせ  
る此太刀はや綾ふ尊し冬川の岩瀬にこれる立氷たぢひかもかくの成りたる冬の  
野の眞草にける霜しかもまかひ凝りたるぬき見れば肌も寒はく取り見  
れば目らもまばゆし事しあらばはかし給ひて皇軍のみ前にたゝし魯西亞  
の國のことく英吉利の國の崎々きりなびけまつるへ給ひ皇國の大御光  
を大君の大き御稜威をかゝやかしあらはしまさむ此太刀はやあやに尊し  
あやにふとし

詠補正成卿歌并短歌二首

五百機の千機をたてゝ少女子が手玉もゆらふ織なすや綾ふかぐはしき補

の君のまこと河内の國の鎮めとまもとゆふ葛木山の山下やまもと鎮まるとい  
す水分みづの神の命の八隅えゝ君のみために奇魂くしんさきはへ給ひ分魂わけたまち給ひ  
て人としもあれしゆけれか天地のよりあひの極み類なき國の忠人まことみ功を  
仰ぎまつれば千早山益々高しみ心をはかり奉れば湊川ますく深し子孫  
のありのことく櫻の木のいやつぎにみ心を繼がせ給へれこそもへ  
ば人おしあらま靈ちはふ神とも神といましけらしも

反歌

神ながら人どあれいでて人ながら神のまわざをさまきみかも  
言だまのさきはふ國のおとごまもたへをへめや神なるものを

詠補正行朝臣歌

尊き君の御惠臣とありてむくいさるべき畏き父の御言子とありて守  
らざるべき海行かば水つく屍山行かば草むす屍火水をも願みせむと言立  
て言立てのまふま大君のめでれあまりに給はると御勅此らま紫此句  
へる妹も肝むかふ心動かず速やけくいさみまつりて河内のや暇の露と玉  
きはる命失せぬま吉野の吉野の宮ふ高知るや天の御蔭天しるや日の御



蔭どおほへりし楠の老木の木陰ももどらぬ陰と大王もおもはし給ひ臣の子も頼みけらしを此たけ雄はや

考妣祭日二月五日賦献靈前歌并短歌

白真弓伊豆の國より五百重波千重浪へあるひむがしの南此海お父嶋のありといふなり母嶋のありときくなり父の實の父の命を去のぶがねかくや名づけし柞葉の母の命を慕ふがねまかや云ひける父母おそれのまお子母父おそれのめづ子ぬばたまの月日めぐりて二月の五日の今日お逢ふ毎おいとくるしる近からばい行き見ましを名を聞えもうらあつかしき父嶋母嶋

反歌

ちゝはゝの嶋をつね見る小がさ原嶋のまま人ともしきろかも

題鯉魚登瀑布圖歌

あゝだくの龍のくだまう其水のかくいはげしきあゝだく此虎此吼まう其音のまかい轟くさくなたりたさち落ちくる荒波のおちのどよみお岩がねも常おゆるぎて松が枝もとはおたわめりかくばかりはあしき瀧も一筋お

思ひあがればあがるべき道のありけり群肝の心ふりおこしいそはけやあはれ世此人選返お人と生いでて魚おだおまかすてやまばやさしからずや

詠菜花歌

紫の萩此花野のその花の錦かざらひその露此玉をよそひてうるはしくおはふとすれど吹く風此音をさぶしみ啼く虫の聲をわびしみなぐさるる心もあらず黄金色の鈴菜咲く野のうらくと霞たなびきたかくお雲雀囀り吹く風もこぼるゝ露もその花の香をなつかしみ肝むかふ心うかれて敷妙の家おもえあらし益荒男のままらをとち少女子の少女子とち出で行けば憂を忘れ出でゆけば心おもしろしおをもへば朱を奪ふてふ紫も黄金色お酒まかおけり

松の老いたる若き打ちまじりて生たる處お鶴の雛を伴お

ひて遊べるかたお題せる歌

照弟重石丸齋

松が枝も千世の後をし繼がしむどおふまゝ小松芦たづも千年此跡を受けしむどらみし雛鶴松まらもかくなるものを鶴すらもまかなるものをうつそみの人をし見れば家をだお子おも傳へず跡をだお人おも譲らず敷妙の



家の名れとし身をはふる人もありけりかへり見よわはれ世の人思ひ見よ  
わはれ世の人心無きも此ためし鳥獸草木をのみひくべくあらめや

遊高師濱詠歌并短歌二首

和泉のや高師の濱に常世の浪よる濱常世の風吹く濱其波のいたふる時の  
地震のごといゆり動かひその風のあらぶる時の神のごとい鳴り轟き遠近  
の里人ごもいを安くよるもねらえそお故にたてる濱松まが枝の風ふ  
たわみて久方の空おものびずまが根はし波ふ打たえてあら金の地をもは  
なれ深淵を出でたる龍うそおふしも伏してあるらむむたつみを出でたる  
鱈うおしおしも遊ぶならむとぬば玉の夜目おひひゆ面白き濱の松かも  
宜しけき松のかかかも松うかふよりくる波のまくくおあそびふを來む  
常翁おて

反歌

淡路島まへおよおほり武庫のやま紀の山とやお見らくよろしも  
わたのはらうかべる船の眞帆片帆ちる花あせりおはをよろしも

詠月歌

山見まわら松原まつばらふ風のかとをみて遠々お鹿のね聞ゆ野邊見  
れバ句ふ萩原はぎ原お露此玉まきあちくお虫の音とよむ面白き今日此  
今宵お思ふどち圓居しをれバ玉うきお玉の碎けて玉うきお黄金どちらふ  
驚きてかへり見すればはがらく山の木の間ゆ月の出でくも

詠彦山歌

梓弓引豊國此高光る日子のみ峰の時じくぞ雨の降りける間無くぞ雲の立  
ちける其雲の天をおほひ其雨の國濕はせり尊くも奇しき山かも人こそ  
犬が嶽てへ其山の裾野ありけり世おこそ其葉梳山てへ其山此麓ありけり  
豊國の國此鏡と萬世おいます神かも千歳ふたす山うもかしこきや日の  
皇子恐骨の神の命の宮所定めませればうべあく日子のみたけと名附け  
けらしも

送増田宋太郎赴筑前國歌

重兄云ふ宋太郎の父の從弟なり西南の役陸軍に投じ城山にて戦死しけり

不知火の筑紫の國深みるの深江の里のえみし國見放る國戎狄國見渡す里  
西ふかバ浪路眺みてうち嘆く息とおもはむ地震ゆらバ土踏建び立ちをど  
るとよみと思はむ國の名の心づくしの里の名の思ひ深江の旅衣うらやす



から老おもはゆるかも

登金剛山詠歌并短歌

楚樹結葛木山此山さみお高く尊く天をり立てるおの山木此根とり石根  
ふみさくみ此ぼり立ち國見をすまバ大和の國內ことく目の下お引きて  
ありけり足本およせてありけり群雲も袖より立ちて鳴神も足おとよめり  
立ち居れば風の吹来て肌寒く針さすきせり物云へバ息のこほりて鬚白く  
玉を貫きたりかしこきや一言主の大神の天皇と言かさらひし跡も存せり  
山上にカマリ尊尊かる山おし有りけりくすしかる峰おしありけりきたきけ  
き中子が名もて何の世のまかおふせし葛城といふある山の此山を本お  
まけらしあはれお此山

反歌

忒心きくていのらバ一言おうべおたまさむかつらぎのりま

十津川懐古歌并短歌

み心を吉野の郡十津川のふれの郷わの山見れば巖根こいしも川見まバ瀬  
のとさやげし濃く薄き山此紅葉の松杉のひまおまじらひ淵瀬の底おらつ

りて面白き山おしありけり愛たかる川おし有りけりまかまども露をまけ  
みうかゝれども霧を深みかゆくも袖ぞかわかぬいおしへおもひて  
いおしへをいさどほるしく憶おまバ山風とよみ瀬の音むせびぬ

遊井手里詠歌 該里在山城國觀喜郡

山城の井手の里はも里がらうかくし宜しき梓弓春たけゆけバ川瀬おの蛙  
まばあき岸邊おの山吹咲けり橋の大臣井手左大臣  
橋諸兄公と聞くも此里に住まはせ  
りけり高比賣此命下照姬命  
御一名さくも此里お鎮まりませり宜しけり里あるかも  
よ山城の井手の玉川たまに來て見る我の去りおへぬかも

詣孝女妙冲墓歌并短歌

在和泉國日根郡孝子畑村  
與父逸勢墓東西相對

かぐはしき橋此子の手弱き女にしあるをうら若き未通女おしあるを罪お  
はえさすらはえもく父の跡慕ひ嘆きてつうさ人來勿と叱きどありねさを  
ひるのまぬばひ野干玉の夜の追ひ行きて風の音の遠つあふみの板築の驛  
お到りさぶらひて仕ふるはしおまどとへと言も通はず相見れど目だにも  
見ず秋風のさそふ野の邊の朝露と命失せぬれそおをしもわやに悲しみ奥  
墓の側に在りて荒玉此年月經しを其誠神や感けし其誠君やめでてしみ許



しの勅かゝふり驛路の草むす屍負持ちて京へ還り此里ふはふりけらしも  
 たらちねの親み仕ふる道こそこの道の本なれ其道をたぢみし刀自其道を  
 ふみえし君が奥つき我あゝとし聞けば吹く風もうらさびしもよ鳴く虫も  
 うら悲しもよ一筋の其真心の幽世も變らず有れや千年も貫き有まや殊更  
 おまゐるしの石の面をむけ立つとどのすれど奇しくも一夜のうちお父のます  
 方に向くとお橋の子おはれ手弱き未通女おしゐるを女にしゐるを橋の子  
 おはれ

よろづ世にいひつぐがねと里此名あまか負せしはしき子故あ

献天國劍於字佐神宮時詠歌

みはかしの此つるぎはや伊豆の尾羽張の神師のみ靈の太刀と取りはかし  
 いふきかさして太刀の名の天がけりまし太刀此名此國翔りまして神功の  
 天にたらはし神稜威國かゝやかし荒御魂幸ひ給はねその御稜威はや此  
 劍はや

越箱根山之時詠歌并短歌

玉久しげ箱根此山の高けれど天あゝあらずあごしけど地おこそ立て馬有

りど人あいざさひ怨籠有りど人あゝしり石根木根くゑはらゝかし踏み  
 建びさつびをとりて直越にあえぞむま行かむ額こそ波のよせたま髪こそ  
 霜のかきたま事しあらば君の御楯とあらむ男子ぞ

反歌

げたといふ高ぐつをはきておれのもよ翁さびすも箱根此やまを

登岸和田城天主臺詠歌並短歌

み心を吉野の宮お天此下知しめしける天皇の其大み世お補の公の支族と  
 和田をしも家の名おひし益荒男の高家ぬしい茅葺の海のいつくのわれ  
 ど岸村のおゝを宜しみ城を杵築き敵ふせぎしゆ岸和田と名おひ負ひぬれ  
 ぞかりしゆ武士のとも櫻此木のいやつぎくゝおくま竹の世をおし居れば  
 み民等が家居の榮え商人が陌のふえしを世のさがひすべ無きものか城の  
 趾おのぼりて見れば堅かりしいは垣崩を深かりし池水あせぬ宴すと男女  
 の充満を琴かきさらしうたひつゝ舞ひつゝ遊ぶ景況をしも見まご心の  
 さぶしきろかも

反歌



時守がつゝみお代へてゆふぐまをつぐるかはづの聲しきぶしも  
遊紀三井寺詠歌

朝もよし紀の三井寺の立すくみたちすくみたる堂とらたきに此ぼりて見れば山邊  
おの桃の花咲き野此邊にの菜の花咲けり西見れば和歌の浦松浪此間おひ  
たりつゝけり北見れば和歌山の城し雲の上お笠えたちたり少女の眉引か  
すの玉匣二名の嶋か見れどくまし珍らしも見れどくいやなつかしも  
石上古きみ世おし木國ひだしのくにの魁師なぐさの名草戸と畔住しへけだしおの有らぬり

詠酒歌

支那人かみの云ひける如く一杯ひつちの心地宜しみ人こそ酒を飲むかれ二杯のう  
らおもしろみ酒こそ酒をのむかれ三杯おの心失ひ酒こそ人飲むか  
れゑらくお笑ひとよもしろはし久怒りのゝまほろくど打泣くも  
ありて久さくくの癖も見えぬれ飽かざれば足らずと思ひ足らざれば飲ま  
まく思ふうつそみの人の心ぞすべも為方なあき

午睡覺後有感作歌并短歌

神無月時雨の晴れてあたゝけく日影かざろふ庭の面の落葉此下ゆやみ渡

れよろばひ出でて塵塚の下お到りて物申すといへば蟻磨はひ出でて誰お  
かはする畏けど御名を知らせと云ひつれば答へ云へらく我こそは蟬彦お  
れ面おかる事お侍せどきからし、單衣のやまはて、扇もおいぬ日ひ十  
日夜おの九夜をし物も口お断ちたり汝こそ國の富人阿世倉を七倉もたし  
伊那倉を八倉もたまと皆人此いひのゝまれ、肉おらば五段いつさだばかり飯おら  
ば十粒ばかりさまはる命助くとたまはれや蟻磨の君と乞ひつればこた  
へけらくの夏の日此照りはたゝきて土裂くる日もやすらはは汗かきたり  
運び寄せけり夕立のそゝを溢れて道見えぬ時も厭はず身をすて、拾ひき  
おけりまかれこそ年の一とせ遊びても食ひもあまらめ君見ればすいし此  
衣すいしくも高き木末を高殿と占めて遊ばひ朝おの露おうたひ夕べおの  
風おうたひて暑けさもまら顔なり飢ゑたりと今しおはすも興ふべき物  
やの有ると土の戸を堅くもさして玉くしげ二度いでず蟬彦の力もなげお  
泪ぐみい這ひ去りぬれおなくしき事なりけりど驚きておが身を見れば霞  
立つ長き春日のくだちぬる窓おしふして簀子おの蟻を一筋道をつけたる

反歌



長き日を日すがら蟻のあり通ひいそはく見てもつとめよるく

後醍醐天皇五百五十年御祭詠芳野懷古歌並短歌

應如慈輪寺  
住職某語

み吉野此吉野の山の春されば花咲きを、秋づけば紅葉匂へり紅葉なす  
赤き心花のごと清き心の武士の八十伴男の大王を守り奉ると此山おまの  
き集ひてあしたの谷間のみ雪踏みしだき軍を出し夕べの籠の狭霧押  
し分けて賊を襲ひ敷妙の家をも身をもまら波のかへ見なくて年まねく  
盡せりけるを神しかもいまだ助けぬ時しかもいまだ至らぬ行宮をよそは  
ひ替て石戸たて常つみうごと萬代お鎮りましき播磨五百年餘五十年を  
來經といすまど此を思へば八束鬚お花のごと涙みごまて紅葉おす面  
は照らおも益荒雄わまの

反歌

忠人の魂かも凝りて花と咲きもまぢとてれるみ吉野の野やま

權田直助翁一年祭同詠寄文懷舊歌

書といふ書の八千巻くりかへしよみもて行けば久方の天のありかた荒金  
の地のさまをもまつぶさに説きて有けり生も來る本ついはまも身まかり

し後此事らもつばらかに教へてありけり國を治め身を修むべきすべさへ  
お悟り知らおもかくばかり尊き書をまかばかりめでたき巻をくやしくも  
八十の隈路お隠ります君お相見む道を煮るさず

明治廿一年二月十五日訪小原竹香後數日賦贈歌

囀るやから學せま玉だまの小原の君が和歌うたふのあやし玉ちはふ神の  
道ゆく芦原の重春おれが詩を作るあやしと思はまもかたみお手うちはか  
らずも相えたどけてから歌をうたひ直し大和歌えらべ直して語らへばあ  
やにたぬしくこととへばいともおもしろし君とまじはる道も八重疊  
へだて無くして今よりいとのへ行かむから歌のごと大和歌の如

詠櫻歌並短歌

梓弓春の盛此鶯の來鳴き囀りうらくと霞む山野に白雲と梢を埋み白雪  
と枝もたわゝお咲き匂ふおまの櫻の木花の開耶姫の大御魂おぼりそめし  
ゆ一筋の種傳りて敷嶋の大和國に花といふ花此大君と世の人に稱へらま  
けり梅のあれど木立からぶら枝くねりめでたくもあらず桃のあまど花の  
さどびて匂ひ無くおむかしからずから國の國の八十國もろこしの島の八



十島まぎぬとも類有らめや風流士の家ふるあらず宮人の山野ふまじと花  
ぐはし櫻のめでかぐはし花のめでとめでくるひめでもどはまれかゝる日  
の年ふいく日ぞ花見つゝ遊びくらしして海行かば水潜屍山行かば草むす屍  
かへり見のせじと言たて花ふるをれせむ

反歌

宮人のふちせらゆもさくらばか手をりかざしてあそぶ春への

詠山路花歌 當坐探題

足曳の山の大峽小かひより伐りもて出づる檜の爪手真木のつま手をより  
麻かけひあづる男の子もろでかけあそぶる男の子いたくあひこづらひそ  
ねいたくあそぶらひそね今日をしもさきの盛の櫻花ちる

稱讚堺人森本氏造酒小唄歌

明治廿一年五月應該氏命  
小唄井名係豐太間所命

豊園の神の命の井の名にしあふせ給へる小ざらしのさらく世ふるも二つ  
あぐいともめでたく類あく綾ふともしきうま酒と其名あひぬれ荒玉の年  
の八千歳かさぬともかはらふべしやわく水の如

代盤陳思歌

汝がゆきの横あいさらひあが目らひ横あいつくと世此人あひひもあどさ  
え世の人あ見もそしらえぬそあゆゑあ時めく人の馬車あどまる毎あ田の  
畔の草あ隠るひ溝川の泥にあまりて争はむ心も持たせかくそしる人をし  
見れば其ゆきの正しくい行き其目らひ直くい屬くと鼻高あ誇らひ居まど  
あああひのあしのあどくくも見えは横あこそあれ天地のあしのみあ  
くくもあゆきのゆきてあるありあが目らひつきてあるなまたまちはあ神  
隨ある蟹麻呂をれを

詠流車歌

久方の天かも動く荒金の地かもしゆる天つ日もうつりかはらひ山川もゆ  
るき出でつゝ雷のい鳴るが如く其あどのおどろふとよみ龍神の比ばらふ  
もあろ其烟雲とたちけりゆく雲もあどあふくれて飛ぶ鳥もうしろああり  
ぬ千五百人載すとのままど重しとも見はずあるかも百千里行くといすれ  
ど遠しともあはえぬかも葦が散る浪華を出でて二時もいまだ経なくあ  
都路の車やどりとありあけるかも

詠平家蟹歌并短歌



氏の名に平とひ源と負し武士互ふもまけじ魂相さしり争ふはしに玉匣  
 二つのもの此並びたつ事をしえねバ末終ふ相戦ひて平の臣の猛夫ハ打日  
 刺京都おとさえうみ麻奈す穴門此國と梓弓ひき豊國と鯨魚取海を隔つる  
 其海の浦のあちよ其海の嶋の崎々つたよへる跡おひまかえいやせめお  
 せめらえぬまバ太刀もをれ矢も盡きはてゝおとぶとみ水潜屍と魂きはる  
 命失せぬれ其魂か蟹とありつる其からり蟹と化りつるいかめしくをし  
 き姿そお故おかく名おふせて世の人のいひつぎけらしおはまおの蟹

反歌

奥浪おたいよふ蟹の引く綱おかゝらく見るもむかしまぬばも

詠紫雲石硯歌 大和國大和川所出石也

いそのかみ古き大み世のたらし世お吉事の祥と龍田山たちおびさけむ紫  
 の雲うかりたち其川の岩と凝りつる行く水のそゝぐとすまどよる浪のあ  
 らふとすまど其色のましうるはしも其岩を硯お造り墨すれば雲の綾おし  
 立ちのぼるさまも見えぬれ高麗劔おが世の事も同じくハ硯の海も紫の雲  
 をたてこそ吉事あるがね

詠窓橋歌

枕つく妻や此軒もまそ鏡見えだにわうぬ五月やみ雨さへふりて足ひきの  
 山杜宇前つ戸の外にをちかへり二聲も三聲も名のり後つ戸の外にをちか  
 へり五聲も六聲も啼きていねがたき夏の夜深くかをりくる花橋のど宿  
 のそれうあらぬうよその梢う

詠夏月歌

臘夜の春のあれどもまきやけき秋のあまども湯あみして涼むおましおそ  
 よくど夕風渡りわかねさす昼の暑さも忘ま水忘るゝ時しまそ鏡むかふ  
 高峰おほがらく出でくる月を見るぼうり心地よき夜の豊あらめやも

詠螢歌並短歌

恐きや天つみ神のうかがせる五百つ集ひ此白玉か緒たえておつる惶きや  
 國つ御神此もたらせる五百つとすまるの赤玉うとけて乱るゝ川隈此八十  
 隈おちままきやけく光りあからし川の瀬の七瀬おとくあきらけく照り  
 かざらひて野干玉此夜とも見えざるをどると里此うあぬハ墨染の夕へお  
 きれハ敷妙の家おもあらずみざりおハ小竹葉とりもち左おハ籠を携さへ



て川岸の草葉おしきみ川此邊此石踏みおらしひた狩りにい狩りのぼらひ  
いや捕へどらへ下らひおのがおし袖も照るがみ狩り捕りて歸らく見ま  
夜光る玉のわか玉真白玉やらぐおしけまうつそみの人の心の真白玉つ  
まひせら奇盤見るおも

反歌

よる光る玉と照れこそ飛ぶやふる出づるすきはち人ふどらゆき

初瀬寺觀牡丹詠歌

言さへぐ唐國人の花の君とめつるなれこそ敷島の大和の人もすめらぎの  
花と云ふらめ亦此名の深見草とふ深き色此うべも見えけりまたの名の廿日草  
とふ廿日までうべも匂へり亦の名の夜白色草夜を白くうべも咲きけりく  
さくゝに其名おふせてめつれこそ名取草とふ亦此名の負ませたるらめわ  
やありゝおむかしき花いとくゝまぐはしき花草といふ花此百草八千草  
の花の中おひすめらぎの花とも花とされもたへむ

詠杜若歌

梓弓春暮れ行けば山吹の跡なく散りて藤波のうつろふ時し垣津旗咲ける

よるしも益荒男の夏野此男鹿さそひ狩る衣にもすらむ風流士の山杜宇尋  
ね入るころも、染めむ紫の水底掛けてまぐはしく匂ふ花かも此花に思ひ  
忘まつうつろひし山吹此花藤浪の花

詠蛙歌

御心を吉野の川此上つ瀬のいとも瀬はやみ下つ瀬のわやおさやけみ檜の  
爪手杉のつまでをも、たらす五日か太お作りわりねさす盡をすがらお  
くだせばよどむ瀬も無しかくばかり瀬はやかまこそまかばかりさやけか  
まこそ其後過ぎの絶間をまが時とてろび聲して蛙まばあけ

有感作歌并短歌五首

憶きやすめろぎの神の神隨うまま、國の皇國の國の親國を此國をまろし  
めしける現神まが大王の世界よの君の親君潮沫此凝りて成りたるさひづる  
やえみしの國の八十國の國の末國その國をわかちうしはくきたあけきお  
さしごとむの世界の君の末君青海原棹かち乾さず皇國お貢まべきを時し  
かも未いたらぬ神しかもいまだ助けぬまが國のいよ、貧しく外國のます  
ます富みぬ兵士つひとこれの少く兵士かれお多しそこゆるおかまのこきしら



君きみ借かび健たかびたかぶるそこゆゑふじが國人こくにんのかへらまふめしく媚こびて動うごれバかれが蕪わをも猪し自物じぶつふしてたぶらくともすれバかれがゆまりも雲うのごとあふぎてぞ飲のむ日の本のやまと健男けんなんと陰蕪いんわある男子おとこやすべきそこもへバ拳こぶし握にぎらえこもへバ髪かみ逆さかだつも日本にっぽん太刀腰たちこしおさげはさあまよみの甲斐かいの黒駒くろこままづ鞍くらを置おきてまたがり華盛頓ワシントン倫敦ロンドン教巴キョウハ理伯倫リハクレンお聖彼得堡セントピートルスブルグの都みやことく縦横縦横お塵ちりをくゑたて肝向かんむかひふ心のまふま遊ぶ日やいつ

反歌

矢立やたてつとも願ねがはずてふこの額ぬか伏ふせてえみしが勝かくゆる世よう  
 三千さんぜんあまより七百萬しちひゃくまん人のあまど陰蕪いんわある人ぞひとりだあまき  
 ままらをの魂たまとさげはくやまと刀やいばかれが寶たからとある世悲よこしも  
 大君おほきみの甲斐かいの黒くろあま時ときし來きバ口くちとらせてあ八十やそひのあさしお  
 道理ことわりの開ひらくるまふま天あまの下の君きみのひとりあまさぶまらじやは

詠月前蚊遣火歌

賤しんの女をんなよ蚊かみやりやめこそ賤しんの女をんなよ烟けせこそ足引あしひきの山杜宇やまのつと夕ゆふされバ來啼きこきとよもす我宿わがしゆくの花橋はなはしおはがらく月つきの出いで來きる賤しんの女をんなよ蚊かみやりやめ

を烟けせこそ

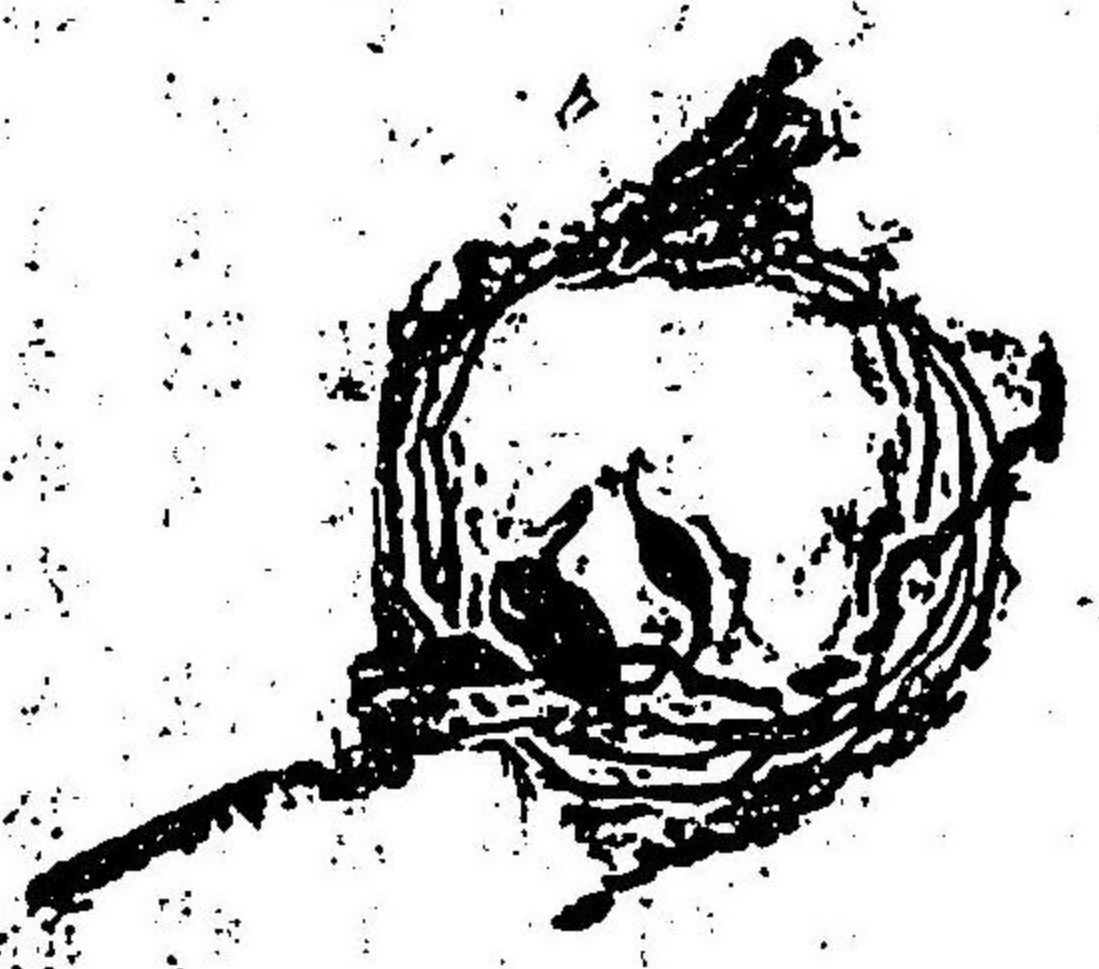
思子歌

子こを見みまばめぐし悲かなしと神代かみよひより云いひのきつるが老おいて後のち此こ子のうつくし  
 何なにあかもたとへて云いはむ明あけたてバ眞手まゝあひだきて庭中にわなかつを歌うたひもど  
 はり夕ゆふされバ膝ひざあかきする埋火うゑあひよりあたゝめ心地こころよく醫いつくるひゑ  
 ひ時の親おやもあまま病やまみふして乳ちちをだに飲のまを泣なく時の親おやも泣なかれて老おら  
 くのくるをも忘れぬば玉たまの黒髪くろかみゆひて其髪かみふかさしかざらせ其髪かみお爪櫛つま  
 さしせふさはしき夫おとこをもたせむ日ひをはやく見みてしもがもと對たいひ居いて妹いもうとと  
 うたらひふして居いて妹いもうとといひつゝ玉たまぶまきかけて頼たのめどたのみあき老おと  
 ちりぬまををもへバいやうつくしくおもはゆるかも



櫻園長歌集抄終

春やむらしのはるならむ  
 静前  
 吉野のやまに入りける  
 戀しきひとをまたひても  
 山家  
 世のうらま事のがれまむ  
 めらしの音の身にしてみて  
 青海波  
 まひれ名にかよふ青海の  
 波立ちいでてながめする  
 本居宣長



今様歌集抄

在五中將

むかし男と身のありて  
春やむらしのはるならむ

静前

吉野のやまに入りける  
戀しきひとをまたひても

山家

世のうらま事のがれまむ  
めらしの音の身にしてみて

青海波

まひれ名にかよふ青海の

佐々木弘綱編輯  
同 信綱補

本居宣長

のこる言葉のはあひなほ  
とばかり今もにはふなり

人のゆくへも老らゆきや  
いづこをはうと尋ねまも

柴のあみ戸にさそがまた  
みやこあひしき山のかく

本居大平



こゑの老らへもまむ月の

かつら此殿にきてゆらむ

春

足代弘訓

みもまそ川もこほりどけ

たかくら山もかまむなり

うちどの宮のへだてなく

さかゆる春になりけり

夏

古巢にこもるうぐひすの

老とゑのみどおむひしを

青葉がくれおほとゞぎす

なくはつ聲もささゆなり

秋

あきのとびかふ草の葉お

あきのはつ風ふきそめて

入日のかげのてりながら

ゆふへ涼しくなりおけり

冬

まぐれくしかみなづき

おく霜つきもすぎおけり

まはすい雪のさむけれバ

うづみ火をのみ友として

四季

花はとゞぎすまぎゆけバ

つきより雪にうつりつゝ

はるなつ秋もふゆもみな

一とせながらおはれなり

夕

ねにゆくからす打ひれて

とびゆくかこの山の端お

入日のひかりはなやかに

紫だつこそおはれなれ

夜旅

まらぬ野道にゆさくれて

里あるかさをたづぬれば

かなさの森にうれしくも

ともし火の影みえそめぬ

齋宮の舊跡おて

橋のつめなるはなぞのい

跡もまられずなりおけり

いろもかはらぬ竹がはの

みづのみ昔此みどりおて

折あふきて

鳥のはかなくさへづるも

そらふく風のおとづれも

こゝろにまめてさく時の

皆たゞならぬものをかし

三番叟のうらみ今様をど人の乞へるお

加納 諸 丞

立ち舞ふ袖につゝみても

猶あまらるうれしさぞ



さやけき鈴の音に立て、

寢覺の窓

本居内遠

ねざめの窓のさ夜あらし  
ちざりし人いられしを

君が千とせ此かきそへむ  
うつり時雨もみぢ葉り  
何いまさらにおとづれむ

四季

清水濱臣

春もあかばのまぎの戸を  
のさばの雲のさくらにて  
雲間のつきもやどるなり  
たちばなかをる夕かぜに  
秋ふくかぜのばせを葉に  
まどより西につきかげの  
冬ごもりせるゆきの夜に  
炭やくまづがなりはひを

れしあけ方に見いだせば  
そぼふる雨こそ香に匂へ  
くひかの聲もまきるなり  
岩もるまみづまゝしくて  
ふた聲三こそおとづれて  
傾く見るこそあはれなれ  
ねやのうつみ火かき起し  
思へばいとこそ身いひゆれ

静の今様まひたるか

海野遊翁

まづのをご巻くりかへし

むかしを今どうたひけむ

其世のさまいあらねども

四時の月

石川依平

うめ咲く園にかきみつゝ  
曇りもはてぬおぼる夜の  
まだしきはどのぼとくを  
馴れてまゝしき月かげに  
桐の葉わけにかげ見えて  
立待おまち待ちどりて  
木の葉ふりしく山の端の  
雪に照りそふつきかげを

牛比繪お

思ひやるこそあはれなれ  
峰のさくらのほかやもり  
月こそはるのひかりなれ  
初音待つ夜のまくらより  
閨の戸さゝであかまなま  
秋どはのめくゆふへより  
いく夜り月をさがめけむ  
時雨にくもりまもあさえ  
なごまさまじと思ふべき

春の野がひのかれが身の  
心れどりさおまふしを

うらむ草あうらあれて  
うしどい何うおもふべき

君澤檢校の想夫戀をさして

原久胤

君がつまみと聞くとさ

千年此ぶめり三島江や



まつ吹く風よ去らちよ

すみだ川

滋野貞融

かまみわけゆく角田がは  
きしのやなぎの糸たれて  
月にさをさすまみだがは  
富士の高ねのほどゝぎす  
くれゆく空もすみぶがは  
あづまの果といふゆれど  
あさ風さむさすみさがは  
あしの枯葉のまもわけて

年内早梅

くれゆく年の去らゆき  
はる風さそふながさ日

述懐

身のあさ顔の葉がくれて

いつせあはれを争そへり

つながね舟こそ楽しけれ

つゝみの花のかげもよし

つながね舟こそ涼しけれ

筑波ねさしてなきわたる

紫がぬ舟こそあはれなれ

月のみやこぞはからぬ

紫がぬ舟こそをかしけれ

ともとなれくるみやて鳥

あらしふ梅こそをかしけれ

いづれの花うさかさらむ

真木保臣

日影まばゆくなりにけり

ひるもたもとの白つゆり

宇治萬碧樓にて

近藤芳樹

木の芽はる風よそよりも  
こ此山がはをいかなれば  
尾花かりふきやどれりし  
はぎも紅葉もときめきて

紀元節歌

高崎正風

くもにそびゆる高千穂の  
なびきふしけむ大御代を  
うなばらなせる埴安の  
めぐみの波にあみし世を  
天つ日つぎのたかみくら  
もとの定めしそのかみを  
そらにかやく日の本の  
國のみはしらたてし世を

どころせき迄かきまよふ  
長閑に吹きておもしるさ  
世をうちとしも名づけむ  
むらしの秋の知らねども  
今をみやこの宇治のさと  
たかねかるしに草も木も  
あふぐ今日こそ楽しけれ  
池のふもよりなほひろき  
あふぐ今日こそ楽しけれ  
千代萬代にうでさなさ  
あふぐ今日こそ楽しけれ  
よるづの國にたぐひなき  
あふぐ今日こそ楽しけれ



天長節歌

天つ日かげりかはらねど  
はれみ曇りみさだまらで  
いまいとおこる時つかぜ  
とよさか昇るみひかりを  
大和にしきのうるはしき  
やまとだましひ類なき  
開きたまへるもろくの  
ならびまゝみて月に日お  
よるづの國もへだてじと  
八しまの海のかぎりなき  
おはふねを舟くあつもの  
民のけぶりもたちそひて  
めぐみの露のかゝらずバ  
この大御代あうまれずバ

世此うき雲のゆきかひあ  
七もゝとせになりぬるを  
四方のむら雲ふきはらひ  
あふぐ御代こそ樂しけれ  
色もいよゝにはふべく  
光ますゝそひぬべく  
まなびの道もなすわざも  
榮ゆく御代こそ樂しけれ  
みなとのとさし開きさる  
ひろき御心またひつゝ  
つみて運べバとしくゝお  
賑ふ御代こそたのしけれ  
たみ草いかでさかゆべき  
此さちいかで得らるべき

たまのうてなも柴の戸も  
祝ふさかづさどりとくに

心の花

匂ふさくらいはるのいろ  
人のこゝろにさくはさめ

戒の歌

八重山吹の一重だふ  
花物いはぬ世の中も

新嘗祭

民やまかれとささらぎの  
千町の小田あうちなびく  
御饌あつくりて奉る

孝明天皇祭

むかしのひかり今もなほ  
のちの月のわなかぞらに

わが大きみのよるづ世を  
うたふ今日こそ樂しけれ

福羽美静

そめしもみせの秋のまな  
千載の後までかざるなり

千家尊福

人の許さぬ枝をるな  
神のさやかお見そなはす

小中村清矩

祈年祭まゐるしあり  
たりはの稻のうましげね  
新嘗祭たふとじや

本居豊頼

たかくかゝやくひがし山  
雲がくれしぞかしてさや



思へばけふのみまつりに  
おもへば今日の御祭お

春興

きのふのひがしきふの西  
ゆたううつゝかどぶ蝶も

勇士

ひたひみ痛手のおははへ  
むかふ野山のつゆよりも

詠史

我身のまていひとまぢお  
あかきこゝろの跡とめて  
よしやあぶ波立たたて  
君まがらもともあらし  
波かぜあらびしあまるとて  
うき坂せきもむらゝつもの

たれか昔をまのばさる  
たれかみ影をあふがさる

うかれどころの花ざかり  
霞お酔ひてぞ舞ひ遊ぶ

そびらの見せじ君がふれ  
いのちのかるじ名の重し

ふてしいさをたかを山  
紅葉も世々をや照ららむ

まかみ清きうぶがはの  
うきせの果こそ悲しむま

大御劔さへうみのそお  
神のまもりもそはぬ世う

まろの名おふちはや人  
あじまの末まで一まぢお

山櫻

朝日おにはふ山ざくら  
今年の春の夜あらしお  
時を待つ間のまごころの

早苗

さあへとりぐ、賤の女が  
そのまが笠もをりにおふ

如大夢覺といへる心を

まよひ開けし曉お

苦しき海お沈みぬと

若菜

春さりくればあさごどに  
まらゆき見えし昨日まで

そのうち川のさちばあ  
濁らぬ名をこそ留められ

陸軍工兵少佐 柳原昇造

散るも散らぬも君が爲

惜しからぬ身を永らへて

また來む春の色お見よ

鈴木重嶺

うたへる聲をおもしるさ

白きいろこそまゝしけれ

福田行誠

さめて思へば百千さび

見し昨日の夢なりき

小杉根邸

わら菜の色ぞあをむなる

枯野と思ひし野遊ごどに



古戰場

いく世をふりし武士の  
雨ものまごきゆふまぐれ

かばねにむきや艸のはら  
きつねう何かこゑをきり

平壤の戦

大砲たいほう小銃せうじゆ聞きのこゑ  
あかめごましや

天あまや崩くずれる、地ちう碎くだくる  
かもしるや  
中村秋香

大浪おきなみ翻かして衝つき入いる皇軍きやうぐん  
萬歳ばんざいとあふる勝開かちあの

雪ゆき類たぐひを打うて亂みだる、清兵せいへい  
山やまを動うごかし谷やをゆきま

あかこゝちよや

いさましや

平壤城頭へいりやうじやう硝煙せうえんのひまお

はれく見ゆる朝日の御旗あさひのみすし

薔薇花下

あめあひそめば雨あめかをり  
庭にわのうばらのほさざかり  
この花はなかさしこのにはあ  
かぶりし人ひとよいまいつこ

風かぜあわらへばかせにはふ  
みしよの友ともをきつかしき  
あそびし友ともよいまいかあ  
花はなのみしよあかはらぬを

山家

垣根かきねのかはあうを流ながどり  
うかべる雲くものかへりみず  
みねあひひらく花はなのまゆ  
つきせぬながめ山やまふかく

小出

榮

歳暮歌

この年としこの日ひをしむべし  
ながれハ淵ふちふといまらず  
この月つきこの日ひをしむべし  
明ある日ひけふの日ひあわらず

此こゝき端はたの山やまあどりあそぶ  
もどめぬ富とみもあまらぬ  
きしにハ撫なづる昔むかしのひげ  
うき世よのあもび水みづあはし

待花

繰くりり返かへし見る花はなごよみ  
馬うまふ鞍くらたけ山やまさとの

白石千別

彌や生なは半かたもまきあけり  
使つかひたそしらいま行ゆかむ

團扇

笛ふえふさられむ一節いちせつも

團扇あふぎの柄えらどこを成なふけれ



ならず手もどひ變らねど

田家納涼

世のうき事の手もたる  
夕顔棚のきたすいみ

山家初冬

山柿の實の二つ三つ  
見るものけたり此夕べ

詠史

立よる木陰どたのみつる  
ひと日くみ吹きよるる

耳づくの自書賛

世のわらしの吹くども  
己れを守りて枯枝あ

鷹の子

鷹の子するて思ふども

竹の心のいかならむ

團扇の風も拂はせて  
見あぐる月も隈なし

残る軒端も又ひとつ  
柳あかゝれる三日の月

楠の若枝も下をれて  
南の風こそ悲しけれ

知らず顔なる耳づくの  
眠れる姿をやすげなる

鶉がりせんや小公達

嵯峨野の原や小栗栖の

松の操

月のかつらも手折るべし  
つきの桂いたをるども  
時雨おそまずふりつもる  
松のみさを茂まもらせ

萩も咲きたりやささむ達

税所敦子

ことばの花もかさすべし  
言葉のはなにかさすども  
ゆきにたわまぬ常盤木の  
世ふたつかひや無らまし

月の瀬あものしるる時

佐々木弘綱

舟よぶ聲もかをるなり  
尾山月の瀬咲きつづく

夏

芦の葉そよぐ川づらの  
かやりの烟末をれて

さど吹きわたるあみ風も  
たいよふ見ること涼しけれ

湖邊月

かたゝの浦も鴈鳴きて  
石山寺の見えねども

比良の嶺れろし袖さむし  
月こそ空おさやかなれ



戀

松吹く風を身ふまめて  
契りし人のれどもせで

山家

うき世の夢のさめはてし  
谷の戸のあは雲とちて

業平朝臣

小野此やま路此雪よりも  
春やむりしとまればむ

述懐

さりともと世を頼むまふ  
残りすくなさ程だふも

はたや今宵も更けぬらむ  
鐘の聲こそきこゆなれ

枕の山を見いだせバ

高嶺の松こそぞらみけれ

深きあゝるのうらもまて

花此あぶ名を世ふにはふ

あはれはかなく老ふけり  
うき事さかぬ身ともがな

今様歌集終

明治卅二年四月二十日印刷

明治卅二年四月廿三日發行

定價金三拾五錢

版權  
所有

編纂者  
佐々木信綱

發行者  
大橋新太郎

東京日本橋區本町三丁目八番地

印刷者  
熊田宜遜

東京神田區錦町三丁目廿五番地

印刷所  
熊田活版所

東京神田區錦町三丁目廿五番地

發兌元

東京市日本橋區  
本町三丁目

博

文

館



佐々木信綱君編纂  
續日本歌學全書目次

每月一回 全部拾貳册  
紙數一册五百二十頁以上  
定價一册金三拾五錢 六册前金壹圓九拾錢  
○十二册前金三圓七拾錢 郵稅一册八錢

第一編 加茂眞淵翁全集上卷(再版)

- 久我建通君題辭  
●自撰晚花集 ●拾二番歌合  
●自撰漫吟集 ●國歌八論  
●春葉集 ●國歌八論評  
●加茂翁家集 ●同歌斥非  
●歌意考 ●同餘言拾遺  
●ひまなび ●同餘言拾遺

第二編 加茂眞淵翁全集下卷(再版)

- 東久世通君題辭  
●さきさき草 ●再贈大平書  
●うけらが花 ●魚彦家集  
●答眞幸書 ●靜屋歌集  
●答勝義書 ●筑波の家集  
●答大後書 ●縣居門人集  
●春海平書 ●賀茂翁家集正誤

第三編 本居宣長翁全集

- 二條基弘君題辭  
●自撰歌 ●歌のしるべ  
●石上私淑言 ●詩歌論  
●後鈴屋集 ●詠歌大概評  
●稻葉集 ●海士の嘯

第四編 香川景樹翁全集 上卷

- 德大寺實則君題辭  
●桂園一枝 ●またぬ青葉  
●同拾遺 ●六十四番歌結  
●新學異見 ●うす氷  
●古今正義總論 ●大ぬさ  
●桂園遺文 ●歌學提要  
●中空日記

第五編 香川景樹翁全集 下卷

- 高崎正風君題辭  
●隨所師說 ●古今正義總論補註  
●かるかや集 ●古今正義總論補註  
●景恒翁歌集 ●古今正義序註追考  
●須磨日記 ●浦のしは貝初篇  
●古今正義總論補註 ●桂の下の枝

第六編 小澤蘆庵翁全集

- 萬里小路通房君題辭  
●六帖 ●拾遺  
●同 ●かひ遺草  
●盧 ●ひか遺草  
●或 ●髪問ちび  
●振 ●杉のしつ枝  
●同 ●閑田百首  
●盧 ●垂雲和歌集  
●或 ●夢宅和歌集  
●振 ●分

第七編 近世名家家集 上卷

- 近衛篤磨君題辭  
●千々廻屋集 ●常侍集  
●和漢草 ●あづま歌集  
●日枝の百枝 ●柿園詠草  
●大降言 ●同拾遺稿  
●三草 ●亮々遺稿

第八編 近世名家家集 下卷

- 蜂須賀茂昭君題辭  
●常山詠草 ●五家園家集  
●季吟子歌 ●柳園詠草  
●岡屋家集 ●五柳園家集  
●古郷道屋家集 ●佐十柳園家集  
●春郷道屋家集 ●佐十柳園家集  
●魚産郷道屋家集 ●佐十柳園家集  
●泊酒産郷道屋家集 ●佐十柳園家集  
●松屋家集 ●園清家集  
●松屋家集 ●園清家集

第九編 近世長歌今様集

- 本居宣長君題辭  
●近葉菅根集 ●藤垣内集  
●奴でのや集 ●寛居長歌集  
●山齋長歌集 ●ゆらむろ集  
●櫻園長歌集 ●今様歌集

第十編 桂園門下家集

- 第十一編 明治名家歌集(上)  
●第十二編 明治名家歌集(下)

以上萬葉以下古集を校して歌學全書十二編を發行し、續に萬葉以下古集を校して歌學全書十二編を發行し、以後の家集を續録して以て完璧となすものなり。







華族女學校監下田歌子著

家庭文庫

第八編

女子手藝要訣

蠶桑、裁縫、刺繡、押繪、編物等、凡て我邦の女子に缺くべからざる手藝は、一々之れを圖解して詳密なる説明を施し、之を讀めば師に就かずして、各種の工藝自ら悟了するを得べし。眞に深切丁寧の良書、請ふ一本を購ふて座右に備へ玉へ。

全壹冊和裝  
大判大和綴正價  
卅五錢郵稅八錢

- 第一編 女子書簡文
- 第二編 女子普通福式
- 第三編 詠歌の榮
- 第四編 料理手引草
- 第五編 婦女家庭訓
- 第六編 母親の心得
- 第七編 家事要訣
- 第八編 女子手藝要訣
- 第九編 女子普通文
- 第十編 作文の榮
- 第十一編 女子遊戲の榮
- 第十二編 女子習字帖

全部拾貳冊 大判和綴 正價(前) 壹冊拾五錢 六冊壹圓九拾錢(每月發行) 拾貳冊壹圓六拾錢 郵稅壹冊六錢(壹回發行)

發兌元 東京本町三丁目橋區 博文館



工B85





1880

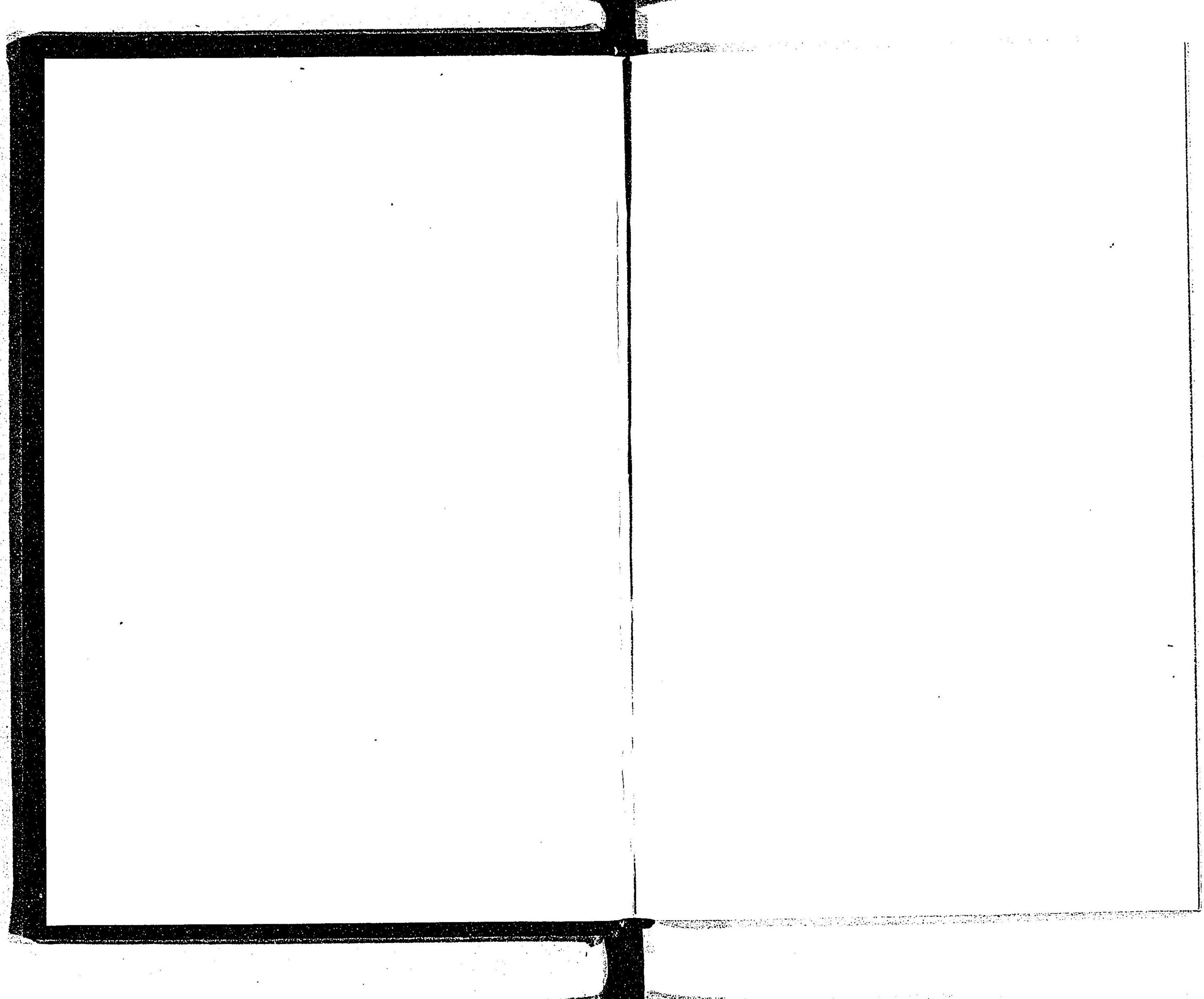
1881

1882

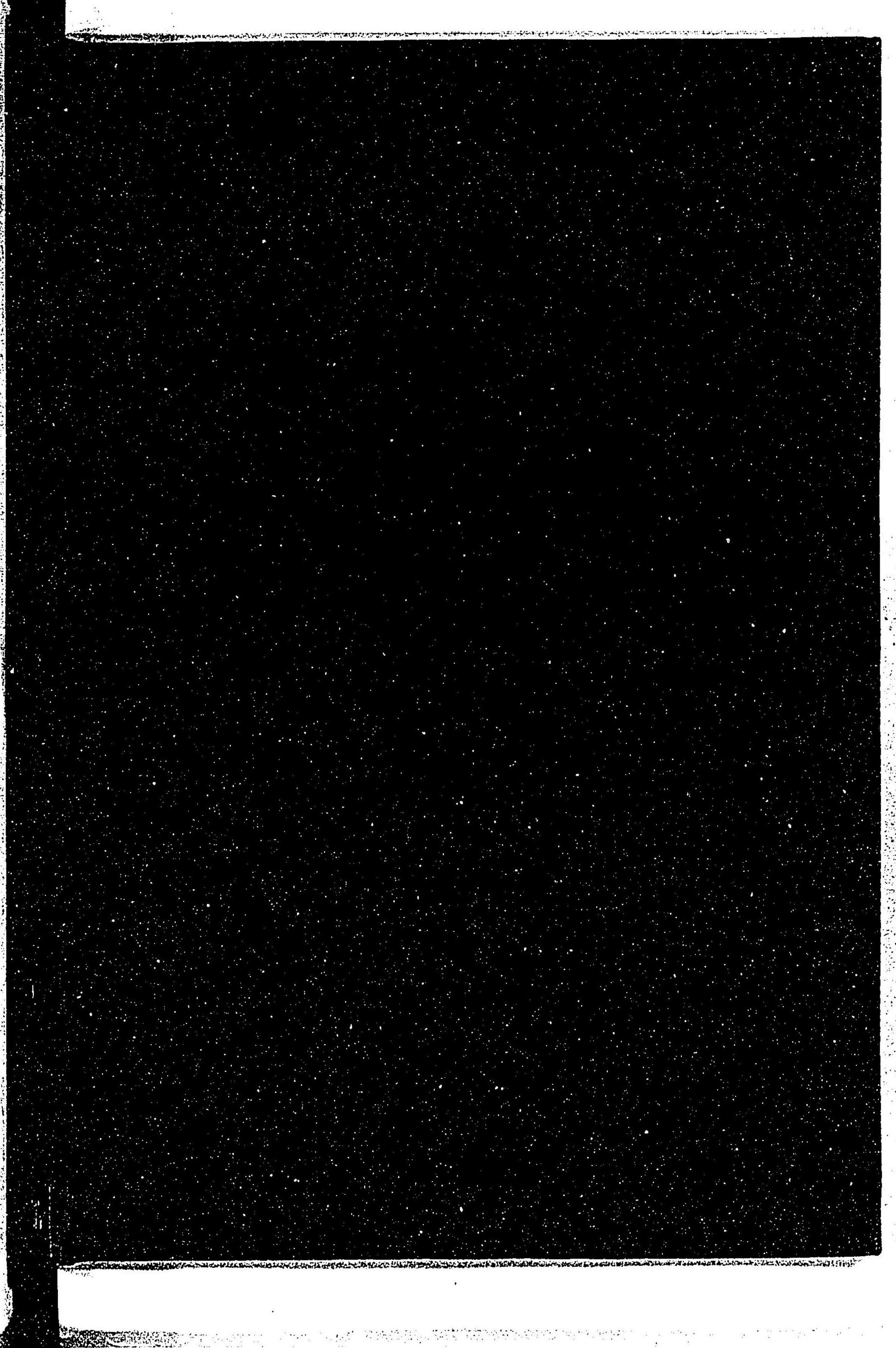
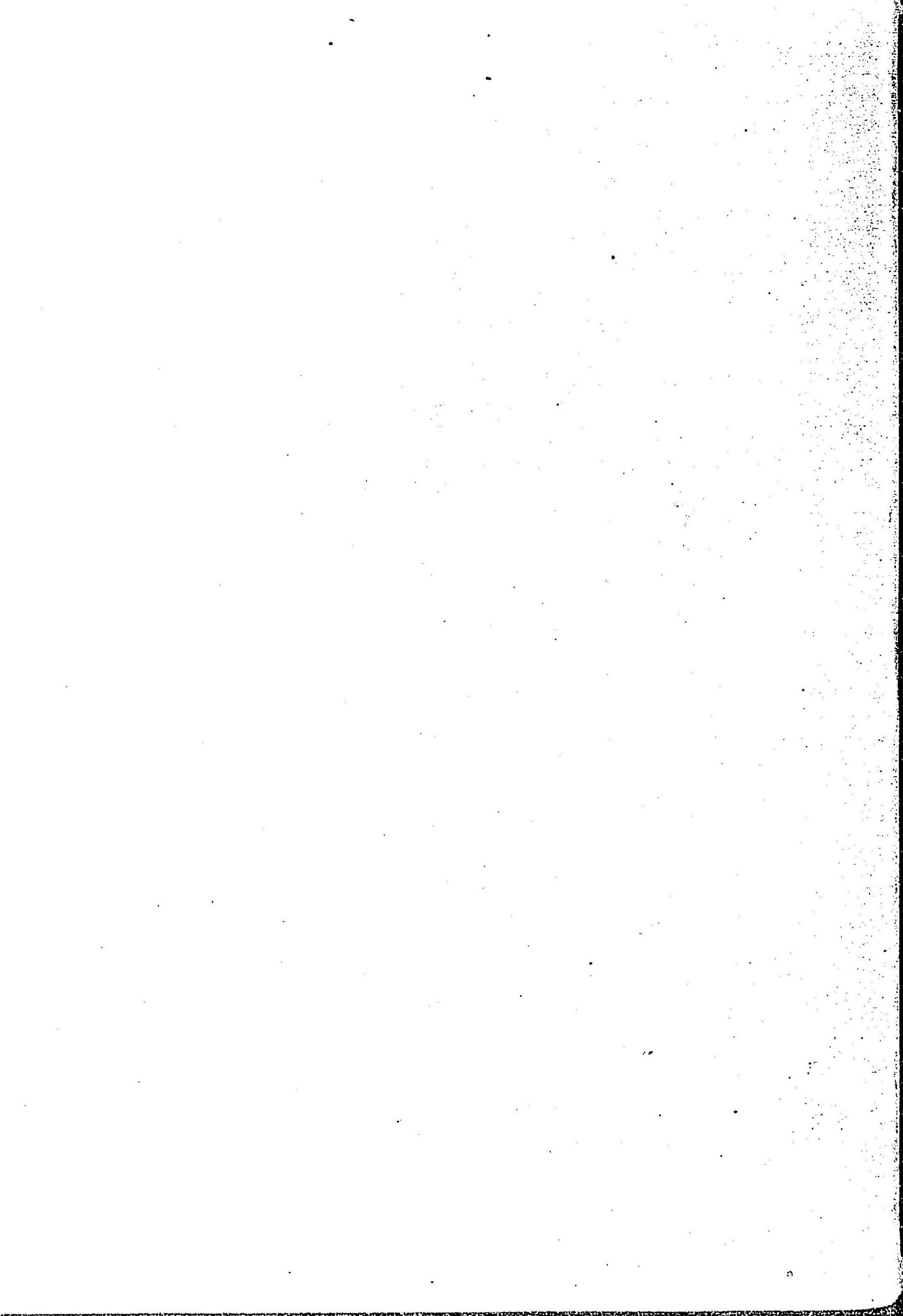
1883

1884











911.108

N6852

S<sub>2</sub>

086398-009-0

911.108-N6852s2

日本歌学全書(続)

佐々木 信綱 / 編

第9編

M30-36

DBD-1217

